
喪失病

むう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪失病

【Nコード】

N5433W

【作者名】

むう

【あらすじ】

「娘は、あなたのことが好きだったのです」

高校2年生である藤野シヨウの目の前に、日記帳をかかえた女性、黒松が現れた。女性は、自分の娘『黒松イユ』がシヨウのクラスメイトであり、想い人だと話し、少しでも娘を知って欲しいと娘の日記帳を手渡す。しかし、シヨウは……自分を含め、黒松以外の人間は『黒松イユ』という存在を知らなかった。黒松によると、『黒松イユ』は『喪失病』にかかっていたという。『喪失病』とは、一種の精神病で共通している症状は「ある日突然、大事な人がいなくな

ると訴える」というものだった。しかし、黒松の言う『喪失病』とは『ある日いきなり消えてしまった人』を指していて……。日記に綴られる想いと、『喪失病』という未知の病。その両方を知ったとき、シヨウの取る行動とは――。

いち

今、現代にはある病気がゆつくりと、しかし着実に進行していました。

いつ、誰が最初にかかったのかは誰もわかりません。

いつの間にか、まるで季節が知らず知らずのうちに移りゆくように、その病気は人々に流れていきました。

空気感染も血液感染ありません。人から人へ、広まることは決していないのです。

ただし、誰もがかかる可能性がある病気でした。

その原因は誰にもわかりません。そして、治す方法もわかりません。

本来であれば、その病気に人々は脅えるでしょう。

しかし、それはありませんでした。

まるで子どもの噂話のように、その病気の話は人々の間に静かに、じわじわと伝わっているだけでした。

人々はそれを、ただの作り話。それこそ、架空の存在——妖精や幽霊のように思っていました。

——その病気に関わった者以外は。

その病氣の名は「喪失病」。

その名の通り、その病氣を患ったものはある日突然、喪失し、消滅します。

身体、だけではありません。その者の心も、記憶も、これまで生きてきた証も、世界から、消失するのです。

誰の記憶にも残らない。その者がこの世にいたという、存在が消えます。

ただし、その者と一番に親しかった者を除いて。

これは、その病氣に関わった人々のお話。

私の、1年と少しの日記に関わった人々のお話。

私の、最後の恋のお話。

「娘は、あなたのことが好きだったのです」

冬の名残が少しだけ残り、タンポポモドキが咲き乱れるある春の日のことだった。

藤野シヨウは、突然声をかけられた。

市内のごく普通の県立高校に通う高校2年生のシヨウは、学校から家へ帰ろうと校門を出たところだった。

シヨウは部活にも入っていないし、役員のような面倒くさい用事も滅多にない。生活委員ではあった、自主参加制が強いものばかりで、よくサボっている。

ただ、学校をうろろして帰ったり、友人とゲームセンターへ行ったりするような毎日を送っていた。

外見は、どこにでもいるさわやかな男子高校生で、若干口の悪いものの、教師に対しては丁寧な対応をしているので評判は悪くない。そんな、どこにでもいるような生徒だった。

シヨウに声をかけたのは、40歳中頃の女性。ブラウスにスカートという、シンプルかつ上品な服装をしたその女性は、きつと美しい女性だと思う。

——だと思う、というのは、今はそれがわからないからだ。

女性の目は泣きはらした後がはつきりと残っており、腫れぼったくなっていた。

なにかいけないものを見てしまったと思ったシヨウは、気まずくなつて女性から目を反らして尋ねる。

「あの、どちら様ですか？」

何か事情があつて訪ねてきたことはわかる。だが、その心当たりが全くなくどうしても疑心を含んだ口調になる。

女性は気にした様子はなかった。予想していたのだろう。

「私は、黒松こころと申します」

黒松、と名乗った女性は丁寧な頭を下げた。

「あなたは、藤野シヨウさん……ですよね？」

「あ…はい、そうですけど」

自分の名前を言い当てられ、用件はやっぱり自分にあつたのだと思つた。

「娘が、お世話になりました」

「娘って…黒松さんの娘さんですよ？」

「はい。娘の名は黒松イユ、と言います。あなたのクラスメイトでした」

その返答にケイスケは眉を潜めた。

「クラスメイトって…俺のクラスに黒松なんて苗字はいませんよ。人違いだと思います」

ケイスケのクラスには『黒松イユ』という名の同級生は存在しなかった。聞いたことはないが、広い学校だからシヨウと同名の男子生徒だっているかもしれない。その人物のクラスメイトではないのだろうか。

しかし、黒松は確信に満ちた顔で首を横に振る。

「いいえ、あなたです。——これに映っているのは、あなたですよ？」

黒松は鞆から、ポラロイドカメラで撮られた写真を取り出し、差し出す。

ポラロイドカメラ、というのは一言で言えばその場で現像できるカメラだ。すぐ現像できる点ではこれ以上ないほど手軽だが、逆に言えばすぐ写真がいらないければデジカメの方が画質が良いし同じ写真を生産できる。今の時代、持っているのは少数だろう。

写真を覗き込むと「……確かに、俺ですね」そこに映っていたのは、確かに自分自身が写っていた。

それはつい最近撮られた写真だった。シヨウは写真の中央より右にずれて、ほがらかな良い笑顔で笑っている。写真を撮ったときだつて、シヨウはよく覚えている。

一週間ほど前、校庭にいた自分はたまたまポラロイドカメラを持つた校長と出くわした。家を片づけていたらポラロイドカメラが出て

きて、フィルムも余っていたという。それで何か撮ってみたくて歩いていたらしい。そしてせっかくだから、ということ撮ってもらったのだ。どこに行ったか忘れたが、シヨウはその写真をもらったことはつきりと覚えている。

だから、シヨウが持っているはずの一枚しかない写真がこの場にあるのが不思議だった。

「娘も、そこに映っています」

そう言つて、黒松はシヨウの映っていない左側を指さした。

「…何も、ありませんけど」

そこには、何も映つてはいなかった。

ただ、青々とした木々や雑草。そして、タンポポモドキの花が咲き乱れているだけだった。

「やはり、あなたもそうなんです」

黒松は、静かに重く、息を吐いた。

「あなたもそう……つて、どういうことですか？」

何も無い虚空を娘と呼ぶこの女性の方が、どこかおかしいのではないか。

しかし、彼女はとても落ち着いてとてもそうには見えない。

「私の夫も、あなたと同じことを言っていました。夫は私の頭がおかしいのではないかと、病院にさえ連れて行かれたぐらいです」

どこか乾いた笑い方だった。

でも、と彼女は続けた「そのおかげで、娘の病名がわかったんです」

「病名？」

シヨウはオオム返しに聞いた。どうしてそこで病気が出てくるのだろうか。

はい、と黒松は目を伏せた。じんわりと、その瞳は潤んでいた。

「娘は、消失病にかかっていたのです」

「喪失病……つて」

喪失病。

ショウも聞いたことがある。知名度は低い病名だが、それは精神病である。

それにかかったものはある日突然、精神が不安定になり泣き叫ぶ。あるときは破壊活動に駆られ、あるときは気分が極端に落ち込む。

そして、共通している症状が……。

「いるはずもない存在を訴える……」

目の前の女性を見つめた。

「それって……」

あなたのことじゃないんですか？

喉もとまでその言葉が出かかったが、飲み込んだ。

彼女はすでに医者に行っている。病名を知っている異常、彼女はその喪失病と判断されているはずだ。

自分ではなく、消えたはずの『娘』が喪失病だと言い張っているということは、彼女自身がそれを認めていないか、それとも……。

「娘は、本当に消えました。ある日、突然」

その声は、とても静かだった。

自分自身が喪失病なのだと、さんざん周りから言われているはずなのに、それでもその言葉には訴えてくるものがあつた。

「あなたが、少しでも私の言葉に耳を貸していただければ……話を、聞いてもらえないでしょうか」

ショウは、無言で頷いた。

正直言つと、黒松の言っていることを信じてはいなかった。彼女自身が喪失病という可能性は十分に高い。

では何故、ショウは頷いたのか。

今は落ち着いているように見えるが、ショウがここで頭ごなしに否定して彼女を追い返したとしても、彼女はきつと諦めず、もしかしたら突然精神が不安定になるかもしれない。

そして毎日毎日、学校から帰宅するショウを捕まえて今の話を繰り返すだろう。根拠はないが、あの真剣な態度からすると絶対に諦めないように思えた。

下手をすると、家や学校にまで侵入してくるかもしれない。

そうしたら事実、シヨウは彼女から逃げ切るきっかけにはなるとは思うが、それは周りにも迷惑をかけるし、それまでの間にシヨウ自身が疲れ切ってしまうだろう。

ならここで彼女の気が済むまで話を聞いてやって、それでもおしつこいようだったら彼女の家族と連絡を取ってなんとかしてもらえない。

「では、あちらの喫茶店に入りましょうか。少し……長い話になります」

彼女は、学校近くの喫茶店を指さした。そこにあるのは。外観から見ても落ち着いた雰囲気のある店。

学校が終わったこの時間帯なら、その喫茶店に寄り道をする生徒で店はいっぱいになるはずなのだが、学生じゃ手を出せないぐらいこのメニューは高い。コーヒ一杯で千円近くというのは学生にとってはとんでもない金額なのだ。

彼女もそれを知っているのだろう。だからあえてその店を選んだのだ。

それは、この近所に住んでいるから知っているのか、その消えた娘が言っていたから知っているのかはシヨウにはわからない。

喫茶店に入ると、予想通り店内に同じ学校の生徒は全くいなかった。

青々とした観葉植物置があちこちに置かれており、お洒落なデザインのテーブルやイス。壁にはさりげなく風景画などが飾られていて、それらが壁を明るく華やかに見せていた。

静かに新聞を読んでいる年輩や、上品に会話を楽しんでいる妙齢の女性達がいて、騒がしくはないが、静かすぎるこのない店内だった。

シヨウはこういう店にはあまり入ったことがないので、正直緊張

していたし学生服の自分が入るのはいささか部相応な気もして居心地が悪かった。だがそういうことを考えても仕方がないので、雑念を頭から追い払おうと努力する。

黒松のあとに続いて、ウェイターの勧められる席へと座る。彼女はコーヒーを二つ、注文するとすぐにシヨウを真っ直ぐ見て、真剣な顔で話し始めた。

「娘がいなくなったのは、つい最近のことです。一週間…ぐらい前でしょぅ」

いち（後書き）

誤字脱字いっぱいです。

それと、あらかじめ書いてあるものを出しています。

もしよろしければ、彼らの行く道を見ていただけると嬉しいです。

に

「イユ、夕飯できたわよ」

黒松は二階につながる階段に向かってそう言った。学校から帰って二階の自室にこもっている娘を夕食に呼ぶためだ。

返事がないのはたまにあるが、数分もしたら降りてくるはずの娘がその日にかぎってはいくら時間が経っても降りてこない。

どうしたのだろう、と思って、また二階へと呼びかけても返事がない。

「おい、さっきから何言ってるんだ」

先に食卓について、黒松が席に着くのを待っている夫がそう言った。

「何って……」

黒松家では、いつも夕飯は家族3人揃って食べるのが習慣だ。イユが友達と外食したり、夫が仕事で遅くなったりするときは例外だが、3人とも家にいるときは夕飯に呼ぶのは当たり前。

「イユ、降りてこないなって」

「イユ？」

まるで初めて聞く単語のように、疑問に満ちた視線を向けて夫は聞き返した。

黒松は気が付かなかった。……いや、理解することが出来なかった。

「寝ているのかもしれないわ。ちょっと起こしてきます」

どこか抜けているところがある娘だから、休憩のついでに寝てしまったのかもしれない。そう思って、黒松は二階へと上がった。

『イユ』と書かれている可愛らしいプレートが扉にかかっている部屋の前に止まる。起こすつもりで、少し強めに黒松はノックをした。

「イユ、寝てるの？起きなさい、夕飯よ」

しかし、返事はない。不安になり、今度は大声で呼び、先ほどより強くドアをノックした。返事はない。

「イユ……？」

理由はわからなかったが、突然嫌な予感がした。

背筋が凍るような、後ろから何かがじわじわと迫ってきているような、そんな予感。

「イユ、入るわよ」

一言そう言つて、ドアを開けた。キィ……という、静かな音が鳴つた。

「イ……ユ……？」

部屋の中には誰もいなかった。電気はつけっぱなしで、布団の上には投げっぱなしの制服や鞆が置いてある。勉強机を見ると、参考書とノート、日記帳が広げられたまま置かれていた。シャープペンシルも無造作に転がっている。

どう見ても、つい先ほどまでイユが使っていたように見える。

だが、イユはいない。

状況が理解できずどこか魂が抜けたように、ぼうつと黒松は勉強机の方まで歩くと、足下に何かあることに気が付いた。

「……服？」

それは、イユの服だった。

つい最近、黒松がイユのために買った服。桃色のカーディガンとジーンズのショートパンツ。フリルのあしらわれたレギンスまで落ちてあった。その服は今日、イユが着ていたものだった。二階にもる前、イユが黒松にその服を見せていたのだから。

黒松はそれを、恐る恐る手に取る。

ほのかに、温もりを感じる。その温度で黒松はようやく自分の娘がいなくなったことに気づいた。

「イユ、イユ、イユっ！どこ、どこなの！？」

半狂乱状態で部屋を飛び出し、家中の部屋という部屋を探し回った。

何か、たちの悪い冗談なのではないだろうか。

こんなイタズラの子ではなかったが、もしかしたらただのイタズラなのかもしれない。

「イユ、イユ、イユ、イユっ!!」

呼ぶが、返事は返ってこない。

黒松は娘を捜し続けた。

「おい、どうしたんだ」

黒松の声を聞きつけ、二階に上がってきた夫が心配そうにそう言った。

黒松は夫の胸に飛び込み、そこでようやく涙を流した。

「イユが…イユが、いないの……っ！部屋は今さっきまでいたような様子だったのに、あの子が今日着ていた服まで……」

「お……おい」

夫はどこか狼狽えるような声を上げた。黒松はそれには気づかず、顔を上げる。

「あなた、警察に連絡しましょう。もしかしたら、誘拐かもしれないわ」

「おい、おまえ……」

「イユ……イユ……どこへ……どこへ言ってしまったの……？」

未だ悲しみに暮れる黒松に、夫はそつと両手を彼女の方に乗せた。

「……おまえ、一体どうしたんだ？」

「どうしたって……？」

さつき説明したじゃない、と若干いらついて黒松は先ほど同じ言葉を繰り返す。だが、夫の顔はどこか晴れないままだった。

そこでようやく、黒松は夫の様子がどこかおかしいことに気がつく。

「あなた……？」

夫は、衝撃的な言葉を言った。

「俺たちには、イユなんて子ども、いないじゃないか」

「そんな」信じられなくて、黒松は夫から一步下がった。

「何、言ってるのよ。イユよ、イユ。私たちの、たった一人の子どもよ……？」

夫はその言葉を理解した様子はない。それどころか、どこか可哀想なものを見る目で黒松を見つめていた。

それが、黒松には信じられなかった。

「嘘……嘘よっ！意味がわからないわ、あなた……どうしたの！？イユのこと、忘れてしまったの！？」

「……おまえ、病院へ行った方が良い。大丈夫。どこか、疲れていたんだ」

「違う、違うわー！私、頭がおかしくなったんじゃないわ！本当に、イユはいるのよ！」

必死に娘の存在を訴えても、夫が信じることはなかった。

一晩中泣き過ぎ、夫に精神病院へと連れて行かれても、黒松は必死で娘の存在を夫に説明した。

そこで、黒松は事実を知ることになる。

「……そう、ですか」

話を聞き終えたシヨウは、呟いた。黒松は静かに頷く。

やはり、にわかには信じられない。

心臓の音が大きく聞こえる。何か、触れてはいけない秘密に触れてしまったかのような気持ちになった。

彼女の話は一言でくだらない、そう言い切れる自信がシヨウにはなかった。

まだ大きく鼓動する心臓を落ち着かせようと、運ばれたコーヒ―

を口を含むが……すっかり冷え切っていたコーヒ―は、シヨウの心を静めるのに何も役には立たなかった。

「夫は、イユに関することを何一つ覚えていませんでした。それどころか、イユのものを認識することすらできないのです」

「それはどういう……？」

シヨウが言うより前に、黒松は鞆から手帳サイズの一冊のノート取り出して、テーブルの上に置いた。桜柄のついた可愛らしく、でもシンプルな手帳で、赤い紐のしおりがついていた。

「それは？」

「娘の日記帳です。これが、見えますか？」

「あ、はい。桜柄の赤い紐の手帳ですよね？」

机の上にある日記帳はそれ一つしかない。シヨウは当然桜柄の日記帳をさしてそう言ったのだが……。

「いいえ、違います。こちらです」

黒松はそう言つて、桜柄の日記帳のとなり。何もないテーブルの上を指さす。

「……？何も、ありませんけど」

試しに彼女が指さした方向を手で探ってみても、何かが触れることはなくただ虚空を掴むだけだった。

「……今、あなたは娘の日記帳を触っていますが、わかりませんか？」

「いや、何もありませんよ？」

からかわれているだけなのだろうか。シヨウの中に、苛立ちに似たどす黒い感情のようなものが生まれようとしていた。

これが年上じゃなければ、シヨウはふざけるな、と怒鳴っていたかもしれない。

「では、こちらは見えますよね？」

そう言つて、ようやく桜柄の手帳を指さす。シヨウは頷く。

「これは、イユの日記帳の内容を私が写し書きしたものです。私以外の人間は、イユの日記帳を見ることが、触れることもできません

が、こうすればあなたにも読むことができます。

先ほどの写真は、恐らくあなた自信が写っていたから、イユの姿を認識することはできなくても、写真自体の存在はわかったのだでしょう」

ずっと、桜柄の日記帳をシヨウに差し出した。

「どうか、読んであげてください」

「え……」

「娘は……イユは、あなたのことが好きでした。イユのことを、知って欲しいのです」

シヨウは狼狽えた。

シヨウはそれを素直に受け取れなかった。それは、彼女への不信であり不審の感情を持っていたからだ。だが。

「お願い……します」

切実な声が、漏れた。ポタポタと、テーブルに滴が落ちる。

「く……黒松さん」

母親と同じぐらいの年齢の女性が泣いているところを見るのは初めてで、どうしたら良いかわからずシヨウは戸惑う。

「お願い……お願いです。どうか、少しでも……イユを、知って欲しいのです」

「思い出して欲しい」ではなく「知って欲しい」。

「それ……は」

どれほど悲しい言葉なのだろうか。

彼女に対して同情の感情が生まれた。

それが例え彼女の妄想だったとしても、それを信じている彼女のことを考えるととても悲しい気持ちになった。

彼女の娘を知る者はこの世界に、彼女一人しかない。決して、他人が娘のことを思い出すことはないのだと、すでにこの女性はわかっていくかもしれない。

だからこそ「知って欲しい」という言葉。

本当に、精神にどこか異常があるのかもしれない。だけれども事実はどうであれ、こんなにも必死で訴えてくる女性を突き放すほど、シヨウは彼女に対して非情にはなれなかった。

娘を思い出せ、という願いならどう考えても無理だ。そのときはなんとか突き放したかもしれない。しかし、ただ日記を読むだけで彼女が満足するのなら付き合っても良いと思った。

「…わかりました、読むだけなら」

そう思ったから、シヨウはその日記帳を受け取った。

日記帳は、厚さからいつてたいしたことはないはずなのに、手に取った瞬間、ずっしりと重量感を感じた。

それは、込められた想いの重さだったのかもしれない。

さん

ついに、高校生になりました。

北海道だからなのか、春なのに雪は溶けていなく、コートがないと寒いです。クラス分けの紙を見たときも、何故か外に貼ってあってみんな寒そう。

私のクラスはC組。同じ中学からの友達はみんな別のクラスだったから、離ればなれになっちゃってちょっと寂しい。

教室を捜して、見慣れない校内を歩いていたら見事に迷いました。「どうしよう……」

登校初日で校内で迷うとか、とてもじゃないけど恥ずかしいです。どうしたら良いかわからなくて、うろろろしていると呼び止められました。

「君、もしかして新入生？」

ジャージを着ている、大柄な男の人でした。たぶん、体育の先生だと思う。彼は、いじわるそうにニヤリと笑って私の肩を痛いぐらい叩いてきました。

「あつははは、さっそく迷ったか！」

この学校、1年生の教室は何故か一カ所には集まっていない。

私は周りの同級生っぽい人たちについて行ったのは良いけど、全く別の教室についてしまつて慌てて引き返したら迷つてしまったのです。

何組だ、と体育の先生は聞いたので、C組です。と答えた。

「お、じゃあちょうど良いな。おい、藤野。こいつ、連れて行つてやれよ。同じクラスだろ？」

先生の後ろには男子生徒が立っていました。身長の高い、すらつとした男の子です。切れ目の目が特徴的で少し怖そうでしたが、雰囲気は私でも話しかけやすい柔らかい感じがしました。

藤野、と呼ばれた彼はなんでもないことのように「ああ、はい」

と頷いて「こつち」と私を呼んで歩き出しました。

「あ……」

私は先生に一礼して、その人の後ろを付いて行きました。

「あの……」

私はおずおずと切り出しました。他人と話すという行為はどうも苦手で、いつも触ったら簡単に火がつく爆弾を扱っているような気分になってドキドキしてしまいます。

「ありがとうございます。私、黒松イユです。Ｔ中から来ました」
中学校でもそうだったけど、一つ上の学校へシフトすると一番始めに名乗るときは出身校を言うのがだいたいのお約束。人によつてはそれをネタに話ができたりして、早々と友達を確保します。私には縁のない話だけれども。

「ああ、俺は藤野。Ｇ中、よろしく」

彼は少しだけ笑つて、手をヒラヒラとさせました。

そしてそこで会話終了。

「……………」

気まずい！

私は心の中で叫び声を上げました。

一応自己紹介をしたのは良いものの、何を話して良いのか全くわかりません。男の子なんて事務的な会話しかしたことがないのです。おしゃべり好きな女の子なら、勝手に話し出して私はそれを聞いているだけで良いはずなのに。

ちらりと横に並んで歩いている藤野くんを見ると、特に気にした様子もなくただ前を向いていました。

気にしている私の方が、おかしいの？

ますます不安になりました。地に足がつかないような、そんなおぼつかない心境になりました。

じつと見ている私の目線に気が付いたのか、彼はふ、と私の方を見ました。

「なに？」

「なななな……なにも！」

私は慌てて逆方向に首を曲げました。勢いが良すぎたせいか、それとも首の回る限界まで挑んだのが悪かったのか、ゴキッ！という鈍い音が首から鳴った気がしました。

「——っ！」

私は声にならない叫び声を上げ、潤む目を必死で押さえて唇を咬んでその場に立ち止まりました。あまりもの痛さに、しばらくその場で固まっていると、横から押し殺したような笑いが聞こえてきました。

「……………」

目に涙を浮かばせながら、やや回復した首をその方向へ向けると、左手を口元に当てた藤野くんがぼん、と私の頭に手を乗せました。

「く……くくく……くく」

隠した口から声が漏れています。

これはもう、確実に笑ってます。

ものすごく恥ずかしくなって、視線を逸らして痛む首を押さえていると、藤野くんがぼん、と私の頭に手を乗せました。

「……………行こうぜ」

と、まだ小刻みに肩と声が震えたままそう言いました。

羞恥で顔が真っ赤だったと思います。もう、恥ずかしすぎてものすごく泣きたくまりました。

でも、乗せられた手のぬくもりは、まるで冬の日につけられた小さなろうそくの火のように弱々しく、暖かく私の心を少しだけ照らしました。

それがきっかけなのかはわかりませんが…それから私は、藤野くんと少しお話しをするようになりました。

その日は、高校生活が始まった日。入学式だった。

俺は、まだ寒い廊下を一人で歩いていた。廊下には、数えるほどの生徒しかない。新入学生である俺は本来ならもつと遅い時間に来ても良かったはずなのだが、それは出来ないことは決まっていた。俺は新入生代表として体育館のステージに上がり、校長に向かって面白くもないおきまりの文章を読むという任務が与えられていた。

高校受験の際、俺は行きたかった私立高校があった。だけれどもそこは今の俺にはいささかレベルが高く、合格できるかどうかかわからないラインだった。親は私立だと眉を潜めて公立を勧めていたが、残念なことにこの学校より上のランクの公立高校は俺にとっては例の私立よりもレベルが高い。

ということで、俺はなんとか親を説得して私立を受けたが見事に落ち、それでもこの学校の中では学力は高い方だったのでこの学校内で、偶然にも最高点を取ってしまったのだった。

入試で一番成績の良かった者がステージで校長にあいさつをするという、ものすごく面倒くさいことになった俺はこうして朝早く練習のために学校へ来たのだった。

「おうおう、待ってたぞ！」

職員室に向かうと、よく日に焼けた大柄なジャージ姿の男が俺を出迎えた。ジャージごしでも、よく鍛えられた体がわかった。

「初めまして。藤野シヨウです」

俺は優等生つぽく見せるように、丁寧にお辞儀をした。第一印象は悪くない方が無難だろう。

「なんだー？そんなのどうでも良いから、行こうぜ。体育館に校長もっているはずだ」

「は……！？」

どうでも良い、と一言でバッサリ切られ、腰を折ったままの姿勢で俺は呆然としてしまった。そこは形式的にでも、一応丁寧に自己紹介とかするのではないのか。

一人でさっさと行ってしまったジャージ教師のあとを俺は慌てて行つた。歩き慣れない階段を降り、冷たい廊下を進むと、体育館にたどりついた。

「おお、来た来た。では、始めようか」

恰幅の良い、頭皮のてっぺんが光を受けて輝いている男性がこちらに向かつて言った。口調からすると、この人が校長だろう。

「あ、はい。よろしく願います」

俺は、せいぜい従順な生徒のフリをしてつまらない練習を始めた。校長はこういう決まり事に対して、高い意識を持っているようで、細かいところまで指摘をする。内心、そんなの適当で良いんじゃないかとも思うが、それを決して顔には出さず言われた通りにした。

小一時間経つて、ようやく俺は校長に解放される。時間を見計らつて、さきほどのジャージ教師が俺を迎えに来た。彼が迎えに来る意味などなかったが、体育館を出ながら聞いた話によると俺の疲れ切った顔を見に来たらしい。性格が悪い。

その途中、俺はまるで迷子になった子どものように、不安そうに歩く女子生徒を見つけた。顔立ちもしぐさも大人しそうで、人に道を聞く勇氣すらないように思えた。

俺の視線に気づいたのか、ジャージ教師はその女子生徒を見つけて小走りに駆け寄つて話しかける。

「組、という言葉が聞こえてきた。どうやら、同じクラスだったらしい。この流れだと恐らく…」

「お、じゃあちょうど良いな。おい、藤野。こいつ、連れて行つてやれよ。同じクラスだろ？」

予想通り、ジャージ教師は俺にC組まで案内を頼むことにしたらしい。

それについて、俺は特別何も感じなかった。ただ、道に迷った間抜けなクラスメイトになる女子生徒を案内するだけだと思っていた。歩き出すと、控えめにその女子生徒が話しかけてきた。

「あの…」

まるで俺が今にも噛みつくのではないかというほど、ビクビクとした声だった。

気の弱いやつなのかな、そう思った。

「ありがとうございます。私、黒松イユです。Ｔ中から来ました」
誰にでも言えるような社交辞令に近いあいさつだったが、意外とはつきりとした口調で黒松と名乗る女子生徒が言った。

「ああ、俺は藤野。Ｇ中、よろしく」

だから、普通に返す。

それから、俺と彼女は何もしゃべらずに廊下を歩く。今時の女子は口がよく周り、どうして俺がそこにいたとか俺の家族構成とかいろいろと聞いてくるが、彼女はそういうタイプではなかったらしい。しばらく歩いていると、視線を感じたのでそちらの方向を向いたら、彼女はすごく慌てた様子で首だけを逆方向に向け始めた。首から危ない音が聞こえ、彼女は激痛にもだえ、うつすらと涙を浮かばせていた。

普通、首だけ背けるか！？

その様子があまりにもおかしくて、突然ツボにハマッてしまった。懸命に笑いを抑えようとするが、口元を押さえた手から笑いの振動が外の空間へと漏れ、それは彼女の耳にも届いてしまった。彼女の顔にはやってしまった、とはつきり書かれていたがそれがさらにおかしくて俺は腹を抱える。

あまり笑うと傷つけるのではないだろうかと思ったが、一度ツボに入った笑いはなかなか止まらない。笑いながら教室へ向かうことを促したが、しばらく俺は腹を抱えながら笑いを押し殺していたのだった。

よん

話を聞き終えたあと、黒松の連絡先を聞いて別れて家路についた。帰ってから日記を軽く開いてみたのだが…日記の文章量は多く、とてもじゃないが一晩じゃ読めない。それに、正直言って気が乗らなかった。

どう考えても、彼女は頭がおかしいとシヨウは思う。シヨウの記憶にないクラスメイトのことを話し、その人物が自分のことを好きだったのと言う。

どう考えても自分は彼女の妄想に巻き込まれた。付き合わされているだけなのだ。

なのにシヨウは黒松に同情してつい引き受けてしまった。だけれどもいざ読もう、というその場面になると、その手は進まない。

「っあー…もう、どうしたら良いんだ…」

架空の存在だとしても人に好かれていた、と聞くと悪い気はしない。

だがその相手は黒松の話では、もうすでに死んでしまっている。はつきり言って、げんなりだ。期待すらしていなかったが、なんだか損をした気分になる。

それでも、日記を読まないと彼女にとっても悪い気がして、シヨウは一つ、ため息をついてページをめくったのだった。

「ついに、高校生になりました……」

日記は、去年の4月の入学式から始まっていた。

知っている地名、知っている学校、全てがこの町のもので、クラスメイトの名前だって、シヨウは知っていた。

あの日、シヨウが生徒代表として入学式のあいさつをするために体育館にいた。そしてその帰りに、何故かはわからなかったが教師に言われて教室に戻った。ジャージの先生がいたと書かれていたの、そうなのだった。あの学校には常にジャージを着ているの

はあの先生しかいないからだ。ただし、彼は数学の教員なのだが。でも、一緒に向かった人物がいたかどうかははっきりしない。

日記を読まなければ、一人だと言っていたかもしれない。

「わかんね」

なにせ一年前のことだ。記憶ははっきりしない。

「そうだ……！」

思いついた。彼女がいたかどうか確実にわかる方法を思いついたのだ。

次の日、雲が薄くいつぱいに広がっている空を眺めながら、シヨウは朝早く学校へと来ていた。校門を抜け、一年間通い続けた学校を見上げた。そびえ立つ校舎は時が止まったのだと思うぐらい、とても静かだった。

いる生徒と言えば朝練に来る運動部の生徒ぐらいだが、彼らは体育館やグラウンドへ行って校舎にすることはまずない。

誰もいない生徒玄関を抜けて、教室まで歩いていると無機質な廊下を歩く自分の靴音だけが響く。こつん、こつん、こつん、と。

廊下で吐く息は、白い。

昼間なら生徒もいるし人の熱で息が白くなることはないが、今日の朝はいつもより冷え込んでいてより一層この場を寒くさせていた。寒さを振り切るように足早で教室に向かって、教室のドアを開ける。

暖房がかかり始めたばかりのようで、まだ教室内は寒い。鼻を突く、灯油の独特の臭いが教室内に充満していた。

耐えきれず、教室のドアを開けっ放しにして入る。本格的に暖房がついたら閉めることにしよう。そう思い、自分の席へと向かった。シヨウの席は、廊下側の一番後ろの席だった。授業中、この席からはクラス全体がよく見渡せた。

壁によりかかるように、イスに座って、鞆を机のフックにかける。

ちなみにコートはない。北海道といえど中・高の男子学生は、コートなしで冬場を過ごすのが当たり前だ。制服の中に、これでもかというぐらい着こんで過ごす。暑いなら脱ぐ。それがスタイルだった。誰もいない教室を一回見回し、机から一枚の紙を取り出す。

それは、座席表だった。

2年生に上がったときに、クラス替えがあつて、これまでの出席番号と変わったので、担任がすぐクラスメイトの名前を覚えられるようにと、春休み明けのHRで配られたものだ。

正直、使う機会なんてないと思っていたから机に入れっぱなしだったのだが、捨てなくて良かったと初めて思った。

シヨウはその紙をじつと見る。

よく見ても、そこには黒松という名は書いてなかった。しかしだ。シヨウは思う。

この教室には、机が30個ある。

縦に5列、横に6列、という形で机が配置されている。自分を含めて30人の、クラスメイトがいるということだ。それはどのクラスも同じなのだが、中退した者がいる場合は数が合わないこともある。しかし、このクラスは綺麗に30人揃っているクラスであった。

見回してみると、5×6に綺麗に机が並んである。

もしも。もしも、その『黒松イユ』がこのクラスにいたのなら、彼女を入れて人数は30人いるはずだ。彼女がいなかったのなら、クラスの人数は29人。

彼女がこのクラスにいなかったら、クラスの人数はそのまま30人。

クラスメイトの人数を数えていけば、わかるはずである。

シヨウは慎重に、一人ずつ数を数えていった。

1人、2人、3人……

数え終わり、数字を確認してみると30。

「……ただの、嘘か」

安心して、机に頭を乗せた。なんだ、『黒松イユ』なんていなか

ったんだ。そう思うと、どこか拍子抜けしてしまった。

やはり、彼女の妄想だったのだ。それに自分は付き合わされただけなのだ。

朝早く起きたせいで眠気がまだ残っていたのか、シヨウはその状態のままうとうとと寝てしまった。

ざわざわと騒がしい音が聞こえた。まだ覚醒しないままゆっくりと頭を上げると、教室にはもうクラスメイトは全員集まっていてホームルームを始めようとしていた。

今日は珍しく、全員揃っているらしく担任が満足げに言っているのが聞こえた。

……全員。

シヨウはぼんやりと、席に座っているクラスメイトの人数を数えた。

にじゅうなな、にじゅうはち、にじゅうきゅう…。

「……あれ？」

一人足りない。

もしかして、自分を抜かしたのだろうかと思って最初から自分を入れてまた数え始めた。

27、28、29……。

やはり、一人足りない。

背筋がヒヤリとした。いつの間にか、咽がカラカラになってる。でも、一人欠けることなく机には30人ぴったりと座っている。

これだけわかりやすい席の配置なのだ。わからないわけがない。

急いで、座席表と今いるクラスメイトを照らし合わせた。……3

0。不自然はない。なのに、どうして実際にいる人数を数えると29しかないのだろうか。

そこまで考えると、どういうわけか頭の中がぼんやりした。

「……あれ？」

ぼうつとした状態から意識を戻したかのように、はっとした。

「今、俺……何、考えていた……？」

そう確か、クラスの人数を数えていた。

もう一度、シヨウはクラスメイトの人数を数えた。

28……29。29人だ。

なら、30人いるはずのこの教室は一人足りないということに……。そして、そこまで考えるとまた、頭の中がぼんやりして、思考の邪魔をする。

何回も何回も、思い出しては、同じことを繰り返す。

まるで何かに憑かれるようにシヨウは確認した。なのに……。なのに、おかしいということに疑問が持てない。具体的に何がおかしい、と考えると頭の中が真っ白になる。

そこで、シヨウは気がついた。思わず、立ち上がる。

急に吐き気がこみ上げて、口を押さえた。

気持ち悪い。なんだ、これは。

おかしいはずなのに、おかしいところがないように思える。…思っ
てしまう。

だけれども、何かがおかしいことはわかる。それがとても気持ち
悪い。

頭がぐるぐるする。足下がおぼつかなくなり、ふらついて壁によ
りかかった。その反動でイスが倒れる。前の席にいたクラスメイト
が不思議そうな顔でシヨウを見ていた。

しかし、そんなのを気にしてはいられなかった。

なんで、どうして、これは……。これは……。！？

「なんなんだよ……。これは！！」

気がついたら、叫んでいた。

見つけてしまった小さな歪み。

でも、シヨウにはそれで十分だった。十分すぎた。

……おかしいのは、あの人じゃない。俺たちの方なんだ。

学校生活にも、少しずつ慣れてきた気がします。前の席に座っているシオリちゃんは、元気が良くて、優しく、とても明るい性格で良い人です。

こんな私になんで話しかけてくれるのかわかりませんが、彼女と話していると私も楽しい。私が返す言葉はとも少なかったけれども、それでもコロコロと表情が変わる彼女はそんなことをまったく気にしていない様子でした。そんな彼女のことは私は、とても羨ましかったです、尊敬しています。

それと……優しいと言えば、藤野くんは、とても優しいです。

初めて会った日もそうですけど、みんな嫌がっていた生活委員にもなっていました。

生活委員は、教室にある花瓶の花を取り替えることと、学校内にある花壇を植えたりするのを手伝ったりするのが仕事。その他にも学校に関する細々とした連絡事項を伝えたり、手伝ったりします。面倒くさいのに、手間と時間が拘束されるからみんな嫌がりました。

委員を決めるとき、誰も手を挙げない中（基本的に委員は誰もやりたがないけど）、藤野くんだけが立候補しました。

どの委員よりも面倒くさそうなの仕事はどう見ても好きそうに見えないのに、手を挙げた藤野くん。とても優しいと思います。

でもその生活委員。雪が溶けていない間は、花瓶のお花は造花ですませていたのですけど、少し経ってタンポポが咲くようになって担任の先生が「そろそろ生花でも良いんじゃないか」と藤野くんに言いました。

藤野くんはわかりました、と言っていました。1日経っても2日経っても、その花瓶にお花が入ることはありませんでした。

私は、花瓶についての話をしているところを偶然聞いてしまいま

した。藤野ちゃんと仲の良い櫻井ちゃんと話しているときの会話の一つでした。

「いや、朝来る前に拾ってくれば良いと思ってるんだけど、結局ギリギリまで寝てそんな時間ないんだ。朝来て、しまった！って思っ
て、昼休みに摘もう、と思っても昼休みには忘れて、結局そのまま
一日が終わる」

「君、それはやる気がないって言うんだぜー？」

「気のせいだ。なんせ、俺のやる気スイッチはどこにでもあるんだ
からな」

「そうかそうか。身体の電力を使いすぎて常にブレーカーが落ちて
いる状態なんだなー」

「……………」

怠惰。ものすごく、怠惰だと思いました。

私は、もう夏近くなのになぜか栗の実がなっている造花が刺さっ
ている花瓶を見つめました。

——よし。

私は朝早く学校に行くことにしました。

誰もいない廊下を歩いて、誰もいない教室へと入ります。私一人
しかない教室は、廊下みたいに私の足音を響かせる箱に思えまし
た。試しに声を上げてみると、私の声は反響して四方に広がりました。
私の地声が少しだけ綺麗なものに聞こえて、少しだけ嬉しくな
ります。

教室の後ろ、参考書が置いてある棚の上の花瓶に手を伸ばしまし
た。飾り気のない、一枚だけ緑の葉っぱがついている、シンプルな
白い花瓶。つるりとした肌触りと、陶器ならではの重さを感じて落
とさないように注意しました。

それを持って、給水場まで行き、水を入れます。透明で冷たい水が
花瓶の中に吸い込まれるように入って行って、その冷たさが容器を
通じて私の手まで伝わってきました。ちょうど良い量まで水を入れ
て、私は再び教室に戻ります。

そして、タンポポを数輪、その花瓶にそつと、入れました。通学途中、学校に周りや家の近所の周りから摘んできたものです。元気そうなタンポポを捜して地面ばかり見てあるいていたら、電柱にぶつかって痛い思いをしたのは内緒です。

タンポポの花が飾られた瞬間、その花瓶の周りの世界にパツと色が差したような気がしました。細かい花弁を大きく開かせている鮮やかな黄色と、心が落ち着くような茎と葉の緑。その花弁から今にも水滴が落ちそうぐらい、みずみずしい花でした。

そのタンポポの茎は長く、うっすらと毛が生えています。

これは、日本古来のタンポポじゃなくて、タンポポモドキというものです。

またはブタナといいます。正確にはタンポポではないものだけど、茎が長いものの、見かけがタンポポに似ているからみんなタンポポとひとくくりに呼んでいます。

……フランス名を直訳すると「豚のサラダ」になると聞いたときは、なんとも言えない気分でした。

本当は外国の花だったそうだけれども、持ち込まれてあちこちに繁殖していて、時期になると見ない場所はないぐらいです。

本来は5月か6月になってから咲き始めるのですが、ちょっと気の早いやつを見つけて摘んできたのです。

「……よし」

私は満足げに頷いて、花瓶を元の位置へと戻しました。

タンポポではなくても、タンポポっぽい。ようは見かけが綺麗なら良いのだ、とそう思いました。

私は鞆を持って教室を出て、いつも開けっ放しにされている図書室へと行くことにしました。

古い本特有の匂いがそこには充満していて、どことなく私は落ち着きを覚えます。誰もいない図書室でイスを引いて、鞆に入っていた読みかけの小説を開きました。私のページをめくる音とざわざわと葉っぱが擦れ合って騒ぐ音だけが空間に流れていきます。

私がそのまま教室に残らなかったのには理由がありました。

他のクラスメイトが、いつも朝早く学校へ来る私と花瓶を見比べて、藤野くんとの変な噂を立てられたりするのは嫌でした。それに、迷惑が掛かると思ったからです。

私はクラスの中で目立つことを嫌っています。下手に目立つたり、注目を浴びたりすると何かの的になる可能性だってあります。シオリちゃんみたいに明るくて元気な正確の人は、何かあってもその人柄でなんとかありますが……私にはそれが出来るとは到底思えないのです。

藤野くんに対して下心がなかった、といえば嘘じゃない。気づいてくれて、お礼を言われたらどんなに幸せだろうとも思います。けど、私はそれを彼に知らせる気はありませんでした。それにこんな私でも、花瓶の花を摘む、水を取り替える。それだけで、藤野くんの役に立っていると思うだけで良かったのです。

だから私は次の日も、その次の日も朝早くに家を出て、学校へ行く途中で花を摘み、花瓶の水を取り替えるようになりました。花を換え終わった後は、図書室に行って時間をつぶす。ちょうど良い時間に何事もない顔をしてクラスへと足を運ぶ。

藤野くんは毎日取り替えられている花を見て、毎日不思議そうな顔をしていました。それで、お友達に「おまえ？」と聞いて「違うけど」というやりとりを毎日していました。

私は毎日それを見て、密かに笑うのが好きでした。

「なんで笑ってんの？」

一度、藤野くんの目の前でつつい吹き出してしまったときに言われました。

私はしまった、と思ってそこでとっさに。

「お……思い出し笑い、してたの」

「……ふーん、変なの」

興味なさげに言って、藤野くんはこれまでしていたお話に戻っていつてしまいました。

……助かった。

私に対する反応がやや寂しいものがあるとはわかってはいましたが、そのときばかりは本気で安堵しました。

ちらりと藤野くんを見ると、先ほどの私の会話なんてまるでなかったかのように笑っていました。

それすらなんだか微笑ましくて、私は持参した本を手にとって読み始めました。こうすれば、友達は気を遣って話しかけてこないし、私はゆつくりと彼の笑い声を聞きながら本を読んだりすることができる。

……幸せでした。

俺は、ここ最近起こる不思議な出来事に頭をひねらせていた。

俺は、生活委員だった。生活委員になった理由は酷く明白で、ただだんにやる人がいなかったから拳手しただけだった。

それに、本人にやる気がなければそんなもの意味をなさない。俺は部活にも所属していないし、良い暇つぶしになるのではないかと思いい、やることにしたのだ。

それでだ。生活委員に任命されてから、俺は花瓶の花を取り替えることはしていない。

ある日担任に「生花飾ったら？」と言われた。そんな毎日どこからか花を摘んで飾るなんて、正直面倒だったしどうせ誰も見ていないのだからやる必要はないと思って放っておくことにした。

だから、俺はすぐにその花瓶に花が飾られていることに気がつかなかった。

「あら、綺麗ね。このタンポポ。英語ではタンポポをDandel

ionと言つたのよ。格好良いわよね。フランス語ではライオンの歯、とも言つらしいわよ」

突然英語の教科担任が言い出して、俺はそこで初めて気がついた。教室の後ろで咲く、鮮やかで黄色い花を。

「せんせー、そのタンポポ、タンポポモドキですよー。厳密に言うとは違いますよー。正式名はブタナで、フランス語では豚のサラダですよー」

櫻井が手を上げて指摘する。茎の長さから俺でもわかっていたが、わざわざ指摘するとはあいつも性格が悪い。

櫻井とは、入学式があつたその日にすぐ仲良くなった。俺は、若干性根が腐っているものの櫻井のあつけらかんとした性格が気に入る、櫻井は俺の何かを気に入ってすぐに意気投合した。波長の合う人間というものは本当にいるのだな、と妙に関心してしまったのは記憶に新しい。

「……いいんです。それっばいんですから」

少女のように頬を膨らませて先生は怒る。まだ大学を出たばかりらしく、まだ可愛らしく見える。まだ慣れていないせいか、授業もどこかたどたどしかったが、生徒の評判はまずまずだった。

クラスメイト達は、ダンディライオンと、豚のサラダという相反する組み合わせがおかしかったのかドツと教室内に笑い声が広がった。

「とにかく、授業を続けますよ」

そう言つて、英語の文章を読み始める。

俺は、教室の後ろに置いてある花瓶をみつめた。大振りで、元気の良さそうなタンポポモドキ。まだ季節じゃないのにあるということとは、早めに咲いたのを摘んだのだらう。それでも、こんなに元気の良いのはなかなかないはずだ。

クラスの誰かが、元気なタンポポモドキを見つけて飾つたのだらうか。なら、それは今日一日だけで終わるはず。

だけでも、タンポポモドキは次の日も、その次の日も、教室に飾られていた。

楽できてラッキー、と素直に思ったが、毎日毎日丁寧に飾られるその花がどういふわけか俺は無性に気になった。

「タンポポ、お前やった？」

俺は、周りの男子友達に昼休みが来るたびにそう聞いていた。残念なことに、これまで聞いた全員は首を横に振っていた。櫻井だけ嫌らしいニヤけた笑みを浮かべていたが、無視をした。何か知っているとは思うが、絶対口を割らないだろうと思ったからだ。

……そもそも、男子が花を飾るといふのはいささかおかしい行為にも思えた。確率的に女子の方が高いとは思ったが、花を飾っている犯人探しをしているなんて俺は女子には聞けない。どこことなく、俺には恥ずかしかったのだ。

「違うけど」

そう即答される。すると、プツと突然笑い声が聞こえてきた。

「……………」

見ると、黒松が本を手を取ったまま笑っていた。

「なんで笑ってんの？」

何もおかしいことはないのに、突然吹き出した彼女が本当に不思議で聞いた。

彼女は、気まずそうな顔をしたあと、思い出し笑いをしていた、と答えた。

「……ふーん、変なの」

本の面白い内容でも思い出したのだろうか。彼女ほど大人しい人間なら、そういうこともあるのかもしれない。さほど気にすることなく、俺は黒松に興味を無くして会話に戻った。そのまま俺は、雑談へと移り、休み時間を過ごした。

シヨウは、開いた日記を静かに自分の横に置いた。

教室の花瓶がいつの間にか取り替えられていたことを、疑問に思っていた時期が確かにあった。

……今は、あの花瓶、どうしてるんだっけ。

しかし、思い出せない。

その思い出せない記憶の歪み。シヨウは、教室で気味の悪い歪みを自覚した。ぼんやりとして、形のないものだったが……彼女は本当にいたかもしれないとシヨウは思う。

だから、あの花瓶の花を取り替えていたのは彼女だったのかもしれないと思った。

清潔感のある、消毒液のにおいがするシーツの上でごろりと寝転がって考えた。四方にカーテンがかかっていて、ちょっとした個室のような状態だ。カーテンごしに誰かいるような気配がある。

そこは、保健室だった。

教室で突然パニック状態になったシヨウは、気がついたら保健室へと運ばれていた。

気がついたらベッドの上に横になっていて、最初は吐き気のようなものを覚えていたが徐々に気分がよくなった。

偶然制服のポケットに手が触れると、何かが入っていた。それは、桜柄の手帳。……『黒松イユ』の日記帳だった。

読んでいって、思った。

『黒松イユ』は、この時点でシヨウのことが好きだったのだろうか。はつきりとそう書かれてはいなかったが、シヨウに役に立つことを嬉しがっていたのだから気にしてはいたのではないかと思う。それに、シヨウは思う。

この日記の文章はとても暖かった。顔も知らないはずなのに、幸

せそうに日記帳につづる姿が思い浮かべられるぐらい、そこからは
んわりと暖かい感情が溶け出して、シヨウの心に染みこんでいた。
「変なカンジだ……」

薄気味悪いとは思った。毎日の自分の行動が知らない他人が知っ
ているのだ。

けれども、それをその一言で終わらせてしまっただけいけない気が
した。

「あら、起きたの？もう大丈夫？」

シヨウの独り言を聞いた保健室の先生が、カーテン越しに声をか
けてきた。シヨウは半身だけ起こして「ああ、はい」と返事を返す。
先生は「開けるわよ」と言っ、カーテンが開かれた。小さな空間
の中に光が入り、眩しくて目がちかちかした。

そこに立っていたのは、30歳後半ぐらいの女性。ピンクの白衣
を着用している。保健室の先生である。

「教室でいきなりパニックになったそうだけど……何か、悩みでも
あったの？」

彼女は何気ない調子で、でも少し顔色を伺うようにして聞く。

今どきは心に病を抱えている生徒も少なくない。今、ほとんどの
学校ではそういう生徒のためにカウンセラーを置いていたりする。
シヨウの学校だってそうだ。

不登校の生徒だってこの学校には少なからずいる。そういう生徒は
の中には健室登校して、学校への復帰をしようと頑張っている者も
いる。だから、保健室とカウンセラーは決して無関係ではない。シ
ヨウの返答によっては彼女はさりげなくそこを勧めようとしている
のだろう。

「いえ……ただ、ちょっとだけ混乱したことがあっただけです」

なんでもないことのように笑っても、まだ彼女の顔はすっきりし
た様子はなかった。

「そう……？何か悩みがあったら、担任の先生でも私でも相談しに
いらっしやい。一人では抱え込んでいけないわよ」

深くは聞かない方が良いと思ったのだろう。彼女は優しく笑ってそう言った。

いえ、本当になんでもないんです。そう安心させるように言った。「最近ほ、ため込んだじゃう子もいっぱいいて無理しちゃうからね。それで心の病気になっちゃう子もいるわ。でもそれは悪いことではないわ」

「そうですね」

シヨウは相づちを打つ。

心の病気。精神病。……喪失、病。

「……なあ、先生」

「なにかな？」

「友達から聞いたんだけど……『喪失病』って言う病気、知ってますか？」

保健室の先生なら、喪失病について知っているかもしれない。

喪失病は、ほとんど都市伝説のようなものなのだ。どれぐらいの人数がかかって、どれぐらい確認されているのかなんて誰にもわからない。

ただ、『喪失病』。その名前だけが、人々の間に知れ渡っていた。詳しいことはわからなくても、どこで聞いたとか、何で読んだとか、もっと詳しいことを知っている知り合いが先生にはいるかもしれない。

そんな期待を込めて、シヨウは訪ねた。

「……………」

先生は少し驚いたように目を開いて、口を半開きにしていた。そして、悲しげに微笑むと、シヨウの座っているベッドの近くのパイプイスに腰掛ける。

「……知っているわ」

「突然人がいなくなっただって訴える病気。先生は、その病気にかかった人たちが言っていること、本当だと思いますか？」

我ながら、おかしい質問だと思った。

だけれども、他の大人よりは真剣に考えてくれるという不思議な確信があった。

シヨウの質問に、彼女は言葉を詰まらせた。

その間は、その表情は……ただ、信じる信じないですまされるほど単純なものではないように思えた。

「……彼らにとっては、本当だと思うわ」

それは、返答になつてはいなかった。だけれども、シヨウには十分だった。わかったのだ。

「先生は、それにかかった人を見たことがあるんですか？」

思い切つてシヨウは聞いてみた。

それは彼女にとって触れられたくない過去かもしれない。それぐらいは予想できた。しかし、聞かないといけないと思つた。

先生は、ためらうように沈黙した。

「そう……そうね。いたわ」

先生は悲しい顔をしていた。涙も流していないのに、顔は穏やかに笑つたままなのに、悲しそうに見えた。

「ある日、突然そんなことを言つたわ。でも、情緒不安定で精神的に追いつめられた様子もなかった。ただ、淡々とそんなことを言つていたわ」

先生はどこか遠くを見るように、窓の外を見た。

「喪失病だった人は、消えた人こそが喪失病だと言つていた。彼のことを誰も覚えていないのなら、せめて自分だけは彼のことを覚えていたいつて……そう言つていた」

「消えた人こそが……喪失病？」

「そう。そして、喪失病になつて消えた人のことを覚えているのはたった一人」

「たった……一人？」

懐かしむような口調でもあつた。

「ええ、そう。それは、その人と一番親しい人。一方的に想うだけでも、想われるだけでも駄目。誰よりも、絆の深い人」

「絆の深い人…って、誰がそんなの判断するんですか？」

さあ？と、先生は笑った。

「わからないわ。もしかしたら、神様かもしれないわね」

「……そんな、馬鹿な」

いきなり神様なんて言われるとは思わなかった。

「でも、彼は自分が喪失病になった人の一番親しい人だったことを、悲しんでいるように見えたわ」

「……それは、自分だけが消えた人を覚えているからじゃないですか？」

黒松のようなものだ。いくら必死に訴えても、誰も信じない。信じてもらえない。それなら、最初から自分も忘れてしまった方がよかったと思うのは当たり前な気がした。

だが、いいえ、と先生はかぶりを振る。

「『どうしようもないことだったけど、それでも、悲しい。どうしても、俺だったんだ』って」

「……先生は、その消えてしまった人は本当にいたと思います……か？」

もう一度、シヨウは聞いた。

まだ、シヨウの中には『黒松イユ』の存在を確信出来てはいなかったから。

「その人ね、嘘をつくような人じゃなかった。ただの冗談にしては、淡々としていて、全然現実味がなかったわ。」

私も、消えた人のことを知っているはずなのに…私は知らない。

知っているのなら、多くの時間を過ごしたのなら、絶対どこかに記憶の空白や矛盾、歪みがあるはず。

だけれども、私はそれをわからなかった。疑問にすら思わなかったわ。今でもそう。わからない。でも……ね」

先生の目が細められた。どこまでも、どこまでも悲しみを帯びた瞳だった。

「先生は、その消えた人は本当にいたと思うわ」

「どうして」

「だって彼と私が二人きりなんて、なるはずがないもの」

イタズラっぽく、彼女は笑った。

「そう……ですか」

自分と似たような境遇に置かれていた彼女。その彼女は、信じた。なら自分も黒松の言うことを、信じてもおかしくないのではないだろうか。

信じるまでいなくても、否定をする必要はないのではないか。

「……先生」

「なにかしら？」

「少しだけ、友達の遊びに付き合っただけようかと思えます」

突然、そう言ったシヨウに先生は首をひねったが、少しだけすっきりしたシヨウの顔を見て笑った。

「あら、そう？大切なお友達なら、付き合いも大切よね」

そして全く見当違いのことを言うのだった。

今日、ちょっとだけ良いことがありました。

シオリちゃんと学校から帰っていたときです。

私は鞆に、中学生の時の修学旅行で買っためざましくんストラップをつけているのですが……雨に打たれ、風に打たれ、雪に打たれたその紐は切れてしまったみたいなのです。

まだ外は若干雪が残っていて、土や何か汚いものが入り交じって足下はぐちゃぐちゃしていました。シェイク状態です。

とにかく、そのストラップはそんな地面に落ちて可哀想な運命になったようですが……それを、拾ってくれた方がいました。

「黒松」

わざわざ走って私を呼び止めた彼は、同じクラスの男の子でした。名前は櫻井くん。男子の中では、わりと会話をする方でした。さらさらとした、少し色素の薄い髪をしています。染めているわけではないそうなので、地毛でしょうか。

彼は、どこかふわふわした雰囲気の子で、誰ともかまわず臆せず話すことのできる人間だと思いました。だからこそ、私にも話しかけてくれるのでしょう。

彼は、近くの席に座っていて、他の男の子より話す機会が多くありました。だから、少しだけ話しやすい人のうちの一人でした。

「これ、お前のだろー？」

「え、うん。そうだけど……、落ちたの見てたの？」

そうとは思えませんでした。彼は首を振りました。

「いや、もうすでに落ちてたのを拾った。2人ぐらいに踏まれてた。それで、埋まってた」

「そ……そう」

埋まっていたためましくんを発見した櫻井くんはすごいけど、それを私に報告する必要はないと思いました。

汚れは払い落とされてあったけど、切れた紐の部分は湿っていてああ、落ちてたんだなとんだか少し悲しくなりました。

「じゃあ、なら私のだってわかったの？」

そんなに大きなストラップではないです。他のクラスメイトがじやらじやらと鞆にキーホルダーをつけている中、申し訳なさそう程度に鞆にくっついていてるカンジ。自分で言うのはなんだけど、女子高生が鞆につけるものとしてはものすごく地味です。

「いや、オレもわかんなかったんだけどさー」

櫻井くんの後ろに、二人のクラスメイトがこちらに歩いているのを見つけました。一人は、松木くん。そしてもう一人は、藤野くんでした。

「シヨウがさ、コレ、お前のだって言ってたから。いやもう絶対、黒松のだって！とか言いまくってて。しかも当たってるからすげー

のな」

「え……」

ドキリとしました。

何回も言ううただけど、本当に目立つような代物ではないのです。実際、一緒に帰ってたシオリちゃんも「あれ、そんなあったっけ」なんて言っていました。

それを覚えているなんて……。

勘違いも甚だしいとは思いましたが、嬉しいものは嬉しい。

「ああ、それやっぱり黒松のだったのか」

私たちの様子を見て、自分の言ったことは正しかったのだと得意げに笑って、藤野くんと松木くんがやってきました。

「黒松の鞆、何もついてないから目立つんだよな。それに俺、めざましくん好きだし」

「へー、藤野クンめざましくん好きなんだー。じゃあ、朝はめざましテレビ派？」

「まあな」

シオリちゃんが持ち前の人なつこさと、元気の良さで次々と藤野くんと会話をしていました。私はそれを聞いて頷いているだけでしたが、途中まで一緒に帰れて楽しかったです。

ろく

先生との会話を終えたときには、もう3時間目が終わりそうになっていた。

昼食は平気で取れそうだったので、保健室を出て教室に戻ることにした。教室のドアに手をかけるとちょうど授業終了のチャイムが鳴って、授業担任と入れ違いになったので睨まれることもなかった。

「シヨウ、お前大丈夫かー？」

イスに座ったシヨウに気がついて、前の席にいた櫻井が声をかけた。

「ああ、大丈夫。ちょっと驚いただけ」

「驚いたって、あんな驚きかたあるか？」

口元を歪ませて、櫻井は笑った。気を遣わないようにしているのだろう。

「しょうがねえだろ。気味、悪かったんだから」

「は？」

何のことだ、と櫻井は眉を潜めた。だがそんな櫻井を無視し、シヨウは問う。

「去年の春さ、お前……ストラップとか拾ってなかったか？」

ストラップ？ 櫻井は首を傾げた。

「……いや、なんでもない」

聞いてもどうしようもないことだ。そう思つて、昼食のパンを靴から取り出していると……。

「ストラップって……雪に埋まってたアレ？ めざましくんの」

「……………！？」

シヨウは手に持っていたパンをポトリと床に落としてしまった。ぱすっ、という間抜けな音を立ててパンは地面に落下する。

シヨウは、その時のことを覚えていない。それは、ただ忘れているだけなのか喪失病のせいなのかはわからないが……とにかく、シ

ヨウは覚えてはいなかった。

だから、櫻井が覚えていたのはとても意外だったのだ。

「……それ、どうした？誰のだったか、覚えているか？」

「あー？」

彼は面倒くさそうに返事をした後、うーんと記憶を探るように人差し指を額に持っていくと顔を上げた。

「アレ、お前が持ち主知ってるのか言ってる……」

「それ、誰だ」

「シヨウ、知ってるんじゃないの？」

「忘れた。教えてくれ」

「はあ……？」

いまいち納得していないようだったが、一応了承したようで、再びうーんと首をひねる。腕を組んで、最大限に頭をフル稼働させているのだろう。

「……オレも忘れたけど、確かに、誰かに返したと思う。それ以上考えると、記憶にモヤがかかったみたいになる。……わかんね」

「……役に立たないヤツ」

「なんで!？」

ちつと、舌打して言うつとすぐに櫻井の突っ込みが飛んできた。

櫻井は自分の使っている机の反対方向を向いて、イスの背もたれに足を挟み、おおぶりなおにぎりを3つほど取り出して口に運ぶ。そして、ため息混じりにもらす。

「ああ……ホント、なんでお前みたいなヤツがモテるのかわかんね」

「モテる？誰に」

それほど考えずに、聞き返した。モテるようなことなんてあっただろうか。

あー嫌だ嫌だ。これだから、と櫻井は見下したように言う。

「まず、本気なのは同じクラスで2人。隣のクラスで1人。良いな！って思ってるヤツが、クラス内だけでも5人」

「……なんの統計だ」

「オレ、女子と仲良いからー」

ケラケラと櫻井は笑った。この軽い調子の友人は、どこかのグループに属することなくフラフラしている。付き合っている女子もないのに、怪しい噂は飛び交う。将来、絶対振った女に刺されるタイプだとシヨウは思う。

そして、シヨウと遊ぶときは必ず一対一なのだ。シヨウは櫻井の友達と一緒に遊ぶこともないし、櫻井がシヨウの友達と遊ぶこともない。それは、自然に出来た暗黙の了解だった。

「でもさ、一時期お前、カノジョいないのにいるって噂になったことあるよな」

ああ、とそのことを思い出す。

「女子の間でんな噂出てたな。迷惑な……」

シヨウとしては、そのとき好きな女子がいて、その噂はまことに迷惑ことの上なかったことを思い出した。

「お前そのせいで見込みなくなった、だったし！」

「……うわー、マジで腹立つんだけど」

中学では付き合っていた女子はいたが、告白してきたは相手からだった。それ以来、好きな人もいなく過ごしていた、好きな女子ができた。

付き合っている人がいることは知っていたが、どうしても気持ち伝えたくて告白したのだ。

だが……告白したときの女子が「彼女いるのに、どうして？」と聞いたときには真に驚いた。

「いやーでもさー、そのあと、その女子に告られたんだろ？なんで振ったのさ」

「……あ？」

そんなことあったっけ。

「いや、あ？ってなんだよ。あ？って。疑惑が晴れたなら、付き合えば良かったのに」

「……なんでだっけな」

「は、マジで!？」

櫻井が声をあげた。

シヨウは本気で理由を忘れてしまった。

まだ若いのに、更年期障害が自分にも出てしまったのかと
思ってしまう。

「可愛いし、性格良いし、明るいし……。オレだって、ちょっと
良いなーって思ってたんだけど」

「まあ……。気分が乗らなかつたんだよ。たぶん」

「なんだよそれー」

「というか、誰が告ったか知ってんのかよ」

「さあねー。それより、お前優柔不断すぎねー？」

櫻井はおにぎりを頬張りながら、不満を訴えた。おにぎりの具の
シーチキンがケイスケの机の上に落ちているのを見て「拾え、食え、
這いつくばれ」「なんで!？」と、軽口をたたいた。

「てかさー、そろそろゴールデンウィークじゃん。お前、なんか予
定ある？」

「あ？別にないけど」

シヨウは部活には所属していないし、長期のアルバイトもやって
いないから事前に予定は埋まっていなかった。だから去年は、グ
ダグダと過ごしてしまった。だから、今年もそうなるだろうとなん
となく思っていたのだが……。

「ならさー、バイトしねー？朝早い、船の清掃のバイトなんだけど。
なんか予定入っても、昼前には終わるから融通きくしー」

「ああ？別に、良いけど」

どうせ暇だし、引き受けることにした。

櫻井がシヨウを誘ったのは、寂しかったからだろう。案外、この友
人は寂しがり屋でいつもフラフラしているくせに人のそばにいたが
る。

「女の子の友達とも遊べるしー」

「……ああ、そうかい」

じゃあその女の子の友達を誘え！と言いたくなつたが、グツとこらえた。

「オレは今のままでも楽しいけどさー、お前夏までにカノジョ作つた方が良いんじゃないの？」

「その、クリスマス直前に大慌てで付き合う相手探すヤツみたいなことしたくない…」

「マジでー？オレ、お前と夏祭り行つてやっても良いけど、なんかむなしー」

「じゃあ来なくてよろしい。俺は家で寝てる」

「いやーん、そんなこと言わないで付き合つてよー」

「なんなんだお前は、面倒くさい！」

じゃれあつてしていると、シヨウの左前：つまり、櫻井の隣の席の女子がこちらを振り向いた。

「え、なにになに？藤野くん、カノジョと夏祭り行く予定なの？そのカノジョって、実は櫻井くんだったの？」

高田が突然、声を上げた。彼女も同じクラスの女子生徒と昼食を食べていたが、その友達を放つてシヨウ達の会話に首を突っ込んでくる。目がキラキラと光っていた。

彼女は大きめの瞳にセミロングの髪。活発で明るそうなオーラを全身に纏っている。

「高田……お前の思考が3次元薔薇で腐っているのは知っているが、その煩惱を俺たちに押しつけないでくれ…」

「え、シヨウ…オレと付き合いたくないの？」

「わからないふりをして、面倒くさいことを言うな」

高田は、大声では言えないが……男同士の同性愛を扱った漫画が好きだった。

余程親しくないただのクラスメイトのシヨウがそれを知る機会はなかったはずなのだが、授業中に男性の同性愛を扱った漫画を教科書で隠して読んでいるのを見つければ、彼女がそれが好きなんだと嫌でもわかる。

それを授業が終わったあとにさりげなく注意すると、お礼を言われて……それ以来、彼女はシヨウに自分の趣味を言うことを遠慮しなくなっていた。

「えへへー。だって、絵になるんだもん」

屈託なく高田は笑った。一緒にいた高田の友人はなんともいえない顔で笑っていた。

「それよりさ、ゴールデンウィークにするの？ゴロゴロしてるだけ？」

「いや、バイト」

「そつかそつかー！あたしはやっぱり、今年も家の手伝いかな。混むだろうし」

高田の家は、喫茶店をやっているらしい。休日になると店の手伝いをするという。手伝いなので、小遣い稼ぎができないとよく嘆いていた。

「大変なんだな」

そう言つと、あっけらかんと笑って「そうなんだよねー」と高田は言う。

「まあ、毎年のことだし……。去年は、一人じゃなかったから良かったしね。あ、ななみ！ゴールデンウィーク中、遊ぼうね！」

興味の対象が移ったのか、高田は自分と昼食を食べていた女子との会話に戻った。まるで台風のような女子だとシヨウは思う。

櫻井を見ると、何故かニヤニヤ笑っている。

「……シヨウって、高田と仲良いよねー」

なんだか無性に腹が立ったので、その言葉に返事を返さず、シヨウは櫻井の頭を軽く叩いた。

あたしの記憶の中で、一番古い彼に関する記憶は、まだ寒い春の日だった。

あたしは、入学式が終わってすぐにいろいろな友達ができただけ、その中でもひとときわ気が合ったのはあたしの後ろの席にいたイユだった。

イユは大人しいし、あまりおしゃべり好きではなかった。たまに友達付き合いを面倒に思っている雰囲気もあった。都合の良いときだけ、親しく話せば良い。そんな身勝手な意識が身体からにじみ出ていたけど、あたしはそれでいっこうに構わなかった。

どうしてかという、イユは誰の悪口も言わない純真な子だと思っただから。

あたしと話をする友達はみんな良い子だけど、共通の嫌いな人の話題になると一気に盛り上がる。

それは仕方のないことだとはわかっていたけど、あたしはそれが少し嫌だった。

だからそういう話になると、あたしは何気なく話題を変えたり別のグループへ行ってしまったりしていた。

そんなあたしが居場所を変える必要がなかったのが、イユだった。そして、そのイユがきっかけで私は彼を意識の中に留めることが出来たんだと思う。

あたしは、ある日イユと一緒に帰っていた。

あたしがボーイズ・ラブの素晴らしさについて話をしていると、後ろからドタドタという音が聞こえて振り向くと、同じクラスの櫻井くんが立っていて、その手には汚れたストラップがぶら下がっていた。

「これ、お前のだろー？」

「え、うん。そうだけど…、落ちたの見てたの？」

それは、どうやらイユの鞆についていたものらしく、それを櫻井くんと一緒にいた藤野くんが当てたらしかった。あたしは藤野くんの名前は知っていたが、あくまでも同じクラスにいる存在としてし

か覚えておらず、顔を全く覚えてはいなかった。

「ああ、それやっぱり黒松のだったのか」

後から来た藤野クンは、そう言って誇らしげに笑っていた。

とくんつ、とどこかあたしの心臓が鳴った気がした。

背が高くて、まっすぐに癖のない髪。ちよつと痩せすぎな体軀をしていただけ、手足がすらりと長くて、それぐらいがちょうど良いと思った。

藤野クン。

一度、胸の中で名前を唱えた。

一度唱えると、まるで秘密の宝のようにその言葉はキラキラと光り輝いて鮮やかな色を発しているように感じた。

「黒松の鞆、何もついてないから目立つんだよな。それに俺、めざましくん好きだし」

イユとは知り合いなのだろうか。その言葉は顔見知りになったばかりのクラスメイトに向ける言葉とはちよつと違って、少しだけ、あたしは面白くなかった。

「へー、藤野クンめざましくん好きなんだー。じゃあ、朝はめざましテレビ派？」

気がついたら、口が勝手に動いていた。誰にも臆さずに話しかけられる性格の自分に感謝した。

案の定、彼は先ほどと同じような親しげな笑みを浮かべて「まあな」と返事してくれた。

それはイユがいたからこそその返答だったけど、あたしも一気にイユと同じ立場に立たされたような気がしてちよつとだけ得意げになった。いいや、気がした。ではない。この瞬間、あたしはイユと同じ立場に立ったのだ。

イユは元々あまりおしゃべりな方じゃないし、会話を盛り上げるのには向かない。なら、あたしが楽しい話をしてみんなを楽しませよう。そう思って、あたしはとびきり面白い話や質問をしてその場を盛り上がらせた。イユも、楽しそうだった。

その翌日、あたしは学校で男性の同性愛を扱った漫画を授業中に読んでいた。今日がその本の発売日で家に帰るまで読むのを待てなかったし、後ろの席にはイユがいるのでバレても良いと思ったのだ。授業が終わって、さりげなく読み終わった漫画を鞆の中に忍ばせると、なんと藤野くんがあたしの席へとやってきた。

ドキリ、として何の用かと聞いたら、彼は顔を少し赤らめて気まずそうに頭をかいていた。

「授業中にさ、漫画を読むのはあまり良くないことだと思うんだけど」

その言葉に、もしかして……とあたしは思う。彼の席は、あたしの右後ろ。真後ろのあみのことしか考えていなかったから、まさか右後ろの人物が……とは露にも思っていなかった。

「……もしかして、見た？」

おずおずと聞いてみると、彼の頬がぴくぴくと動いている。

「……お前、そういうのは18歳になってからにしろ」

ちょうど、危ないシーンを目撃してしまったらしかった。

「……………」

「……………」

「てへっ」

気まずさを吹っ飛ばすために可愛らしく笑ってみたが、効果はなかった。藤野くんは、思い切り顔を歪ませて変な顔をしている。あ、ハズしたと思った。

「後ろで見る俺の気持ちにもなってくれ……！」

その声はすごい切実だった。

「あ……あはははは、ごめんごめんっ！もうやらないよっ！」

これはヤバいと思って、笑ってごまかす。

突っ込みにくい内容の漫画を読んでいることをわざわざ注意してくれた彼は、すごいと正直に思った。

彼は、そういうものについて理解があるのだろうか。好きそうには見えないけど、特別嫌悪してなさそうだった。顔が赤いのは、愛を育んでいるシーンを見たからだろうけど、偏見なども抱いている感じもない。

それはあたしにとっては少し、嬉しいことだった。

こういうものについて話題を出すとき、たいていの男子は嫌悪感や偏見を顔に出したり口にしたりする。その時、あたしは好きなものを汚された気分になってひどく悲しい。

そのときは周りに合わせて笑っているけど、心の中は涙でいっぱい濡れている。

「……つたく、家で読めよ。ホントに」

視線をハズしてまだ赤い顔を背けた彼が、あたしは好きになった。ほんの2日のことだったけど、彼のことを好きになるのにあたしはそれで十分だった。

なな

ゴールドデンウィークになりました。

去年は受験勉強のために塾通いだっただけ、今年はそんな心配もなく、アルバイトをすることにしました。

私に勤まるのかなあ……と思ったけど、意外と大丈夫です。ひたすら食器を洗ったりひたすらテーブルに料理を運んだりして、お客さんとはあまり話すこともないし……大丈夫でした。……ちよつとお皿割っちゃったりしたけど。

そんな風にゴールドデンウィークが風のように過ぎ去ってすぐに、宿泊研修になりました。

宿泊研修というのは、入学したばかりの1年生同士が親交を深めるために行われる一泊二日の旅行のことです。

知らない子たちと同じ部屋になるので、私にとってはものすごく神経を遣うので、ものすごく胃が痛かったです。シオリちゃんは別の部屋だったし……。

もうだいぶ前にできている仲の良い同士のグループがある私の部屋では、私はみんなのあとをまるで金魚のフンのようについていくのが精一杯でした。

でも、夕食前にみんなで集まっていると偶然近くに藤野くんがいて、少しだけお話しできました。

藤野くんに、さりげなく花瓶の花について聞いてみると「ホント、楽しめたいけど誰なんだろうな」と答えていました。私は意地悪く、知らないふりをして「そうだね」と同意しました。

「もしかして、シヨウのこと好きなのかもしれないぜー？」

突然やってきて会話に入り込んだ櫻井くんが、ニヤニヤ笑って言いました。

「バカ。まだ5月なのに、そんな気の早いやついるか」

「ふふふ……どうなんだろうねー？」

櫻井くんはどこか含みのある声でそう言って、ちらりと私を見ました。

もしかして、バレてる！？

さーっと、血の気が引いたような思いでした。

「一目惚れ、とかだっているかもしれないしー？」

「そんな、漫画じゃないんだから」

「シヨウは意外とモテると思うんだけどなー。頭も悪くないし、運動神経だつて良いしー」

「それはこの学校での話だ。滑り止めに入学した俺の気持ちを考えろ」

「うわ、ある意味最悪な答え！謝れ！この学校を本命で受けたオレのような可哀想な生徒全員に謝れ！」

「断る。仕方がないだろ。私立落ちたら公立行かつて親と約束しちまつたんだから」

「それがますますムカツク！この学校を定員割れで受かったオレに謝れ！」

「断る。というか、良かったじゃないか。結果的に」

「過程も大事なのー！」

その光景を見て、私が口を挟む暇はありませんでした。安心して、二人のやりとりを見ていると、藤野くんが気を遣ってくれたのか話しかけてくれました。

「黒松、もし……さ」

少し気まずそうに頭をかがいて、私を真っ直ぐ見つめました。

「もし、お前がここを本命で受けていて、入りたくてこの学校に入つたのなら……。さっきの発言は撤回する。不快にさせたなら、謝る」

「う……うつん！全然、ぜんっぜん、気にしてないよ！私、こー一本で受験したけど、ぜんっぜん気にしてない！」

びっくりと、藤野くんの頬が硬直しました。

本当に気にしてはいなかったけど、藤野くんの様子を見て、返答の仕方が間違ったことに私は気づきました。

……どうしよう、生意気なこと言っちゃった！絶対、イラッとしたよね。絶対、絶対、一瞬だけ腹が立ってたよね！？

嫌われたかと思い、すごく不安になっておどおどしていました。

「……お前、正直だなあ。一瞬、イラッとした」
「やっぱリーっ！」

心の中で絶叫しました。もう泣きたくなくて、この場から逃げ出したかったです。

しかし藤野くんは、意地悪そうに口の端を歪めて言いました。

「でもイラッとするのも変だよな。俺が言い出したことなんだし……。それにお前の反応が変すぎて見てて面白いから、どうでも良いや」

「はい……！？」

何を言われているのか全くわからなくて、まじまじと藤野くんを私は観察しました。その顔がまたおかしかったようで、藤野くんは真顔で吹き出しました。櫻井くんも、私の顔を見て笑っています。一体、どういう顔をしていたのでしょうか。私は惚けていました。

「はは、ごめん。マジでごめん。ホントにごめん」

一通り笑い終えたあとに、両手を合わせて藤野くんは謝ってきました。とても必死な謝り方でした。さきほどの謝り方よりものすごく必死でした。

何がなんだかわからなくて惚けてばかりでしたけど、楽しそうなのでいつか、と思いました。

「ねえねえ、黒松さんって藤野と仲良いの？」

藤野くんたちと別れ、夕食の席へとつくと、めざとくその様子を目撃していたらしい同室の女の子が声をかけてきました。

どうみても校則違反な派手で茶色い髪と、くるくるした髪。かつちりと固めたメイク。

どう考えても、私の苦手なタイプの子でした。人を見た目で判断してはいけないとは思いますが、こういう人はたいてい気が強くて自分の意見をはっきり言って口が悪い人なんです。偏見が混じっていますが、そうなんです。

「そ……そんなことないよ。入学式の日、お世話になったから男子の中では話しかけやすいけど」

「へー……。ねえねえ、藤野くんってカノジヨいるのかな？」

カノジヨ。そう聞いて、私の胸はドキリと高鳴りました。

「藤野くん、入学式の時に一年生代表であいさつしてたってことは、一番入試の成績が良かったことだね。頭良いんだー。顔もイケてるし、気にならなーい？」

「う……うーん」

あいまいに返事を返しながら、私はさきほどの彼女の言葉を頭の中で繰り返し返していた。

カノジヨ。カノジヨ。カノジヨ……。

「そ……そういえば」

気がついたら、口から勝手に言葉が出ていた。

「この間、すごく可愛い女の子と仲良く歩いている所、見たよ。その人なのかなあ」

どうせ誰かが確認したらすぐバレる。軽い気持ちでした。

研修旅行で、あたしはユウの姿を見つけた。声をかけようとしたが、周りに人がたくさんいてそこに進むことができなかった。

ただあたしはただ、楽しそうに笑うユウを見つめているしかなか

った。藤野クンも、笑っている……。とても楽しそうに、笑っている。

その様子を見てあたしの中に、イユに対して良くない感情が芽生えたのを悟った。

（そんなことない……。イユに嫉妬しているとか、そんなことない！）

あたしは必死にそんな自分を否定した。そんな汚い感情を友達に向けるなんて、間違っている。あたしはそれを、まるで封じ込めるようにして心の中でフタをした。決して触らないように、触れたらいつあふれ出すかわからない感情だった。

3人は別れて、イユは同室の子と一緒に夕食を食べていた。

イユの苦手そうな女の子たちに話しかけられていて大変そうなのがわかった。あたしは、イユが座っている席の3人ほど隔てたところに座っていて、顔は見えるけど話すことが出来ないという微妙な距離だった。

「ねえねえ、黒松さんって藤野と仲良いの？」

そのうちの一人が興味津々な顔でそう聞いていた。あたしは、まるで耳をゾウのように大きくしてその会話を聞いていた。

それは、あたしも少し気になっていることだったから。

イユは、控えめに否定をした。変な噂でも立てられたらたまらないとでも考えたのだろう。あたしは、そのイユの解答に正直、ホッと胸をなで下ろした。

しかし、次の言葉であたしは一気に地獄の底へと突き落とされたような気分になる。

「この間、すごく可愛い女の子と仲良く歩いている所、見たよ。その人なのかなあ」

あたしの世界は凍り付いた。
周りの音が一切聞こえない。ただ、イユの言っていた言葉だけが

頭の中を反響していた。

今、なんて……？

「えー、マジ？……うわー、ちょっと狙ってたのに残念すぎるっしょー」

「藤野って、ちょっとクール系でかつこいいしねー。女は放っておかないって」

「でもさ、もしかしたらただの女の子友達かもよ？それならまだチャンスあるんじゃない？」

口々にそれぞれの意見を周りがしゃべり出す。

——そうだ、もしかしたらそれはただのイユの勘違いかもしれない。
い。

あたしはそう気を取り直した。

いいや……気を取り直さざる得なかった。

藤野クンにカノジョがいるかもしれないって、可能性をどうしてもっと早く疑わなかったのだろうか。

あたしは、自分の愚かしさが疎ましかった。少なくともそれを予想していたら、今のようには心臓がわしづかみにされているような息苦しさは感じていなかっただろう。

「シオリちゃん？」

あたしのとなりにいた子が、不思議そうに顔を覗いた。あたしは慌ててなんでもないと取り繕う。

そうだ、まだ決まったわけじゃない。

しかし、あたしの世界はすぐに崩壊することとなる。

研修旅行が終わった、次の週の日曜日。あたしは一人で買い物へ出かけていた。

あの話を聞いてから、喉の奥に何かがつつかかったように、もどかしい気持ちを買い物で解消したかった。

イユを誘おうとしたけれど、あの子は外へ出かけることをあまり好まない。家の中でゲームをしたり、漫画を読んだりしてダラダラ過ごすのが好きだそう。

あたしはたまに彼女のそんなマイペースさに戸惑う時はあるが、そういう性格なのだと割り切ることにする。

他の友達と連絡する気にもなれず、こうしてあたしは一人で買い物に出かけたのだった。

いつも服を買っているお気に入りのお店で服を見ていると、耳に聞き慣れた声が入ってきた。

「はいはい、似合ってる似合ってる」

「……藤野、クン？」

お店のもっと中の方から、藤野クンの声が聞こえてきたのだ。女性向けの服屋なのに、どうして彼がいるのだろうと首を傾げていると、可愛らしい高い声が聞こえてきた。

「えー、なにそれーっ！もうちょっと真面目に選んでよっ」

あたしは、目の前の光景が信じられなかった。

ウェーブが緩くかかった黒い髪。ぱっちりとした愛らしい瞳。白いワンピースに、ピンクのカーディガンを着ていて、花がついた可愛いミニールを履いている。痩せすぎず、太すぎず、ちょうど良い体型。

とても、可愛い女の子がそこにはいた。

それを見た瞬間、あたしの世界はまるで色を無くしたように灰色になった気がした。

「服、買ってくれるんでしょ？約束してくれたよね？」

「……あー、そうだったっけ」

「そうだった！何忘れたふりしてるのっ」

「はいはい。ごめんごめん」

「もーっ」

謝って、頭を撫でてその女の子を藤野くんは上手にあしらっていた。女の子は、可愛らしく頬を膨らませてはいたが、仕方ないなあというふうにまた服を選び始めていた。

……なによ、これ……。

あたしは耐えきれなくて、気づかれないように立ち去り、外に出るやいなや走り出した。

ポツポツと小さく雨が降り始めていて、すぐに大きな雨粒となつてあたしの身に降りかかる。

あたしはびしょぬれになったが、それでもかまわず走った。

通り雨だったようにすぐに雨はやんだが、あたしの服はずぶぬれだった。そして、心も雨に濡れたようにずぶぬれになっていた。

息が切れ、ようやく荒い息で歩いていたずぶぬれのあたしの姿は、青い空を歩いている人たちから見ればさぞかし滑稽だっただろう。でも、そんなことを気にしている余裕なんてあたしにはなかった。

（カノジヨ、本当にいたんだ……）

気がついたら、またポロポロと雨が振っていた。空は晴れているのに、と思っているとそれは自分の目から出ているものと気づいた。

あたしは、恋に破れた。

そう思うと、どうしようもなく心の中が悲しくて悔しくて寂しくて仕方が無くて、泣くしか出来なかった。

はち

ゴールデンウィークは家でだらだらと過ごしているとあつという間で、それが終わったらすぐに宿泊研修へと行くことになった。

幸いなのか残念なのかわからないが、俺は櫻井と同室になった。うるさくてかまわないが、よく知った相手がいて幾分安心もする。

俺は大抵、人と上手く話すことが出来るが、やはりあまり話したことのない相手と対面するとやはり気を遣う。それはさりげなく褒めたりすることだったり、相手の話に関心を持って聞いてやつたりと様々なアクションを起こす必要があるからだ。

それは社会を生きていく上で必要なスキルで、今のうちに養わなければいけないものだと思うている。

だからそれをやめようとは思わないが、息が詰まりそうになるときだつてある。

だから、うるさいし、たまに苛つくが櫻井がいることで俺は安心した。

「お、次は晩飯？ たつのしつみだーなー」

当てられた部屋にいた同室のやつらとトランプでブタのしつぽをやっている、突然櫻井がそう言い出した。時計を見てみると確かに、もうすぐ夕食時だった。

「あー…確かに、行くか」

俺はすぐにトランプを片づけようとしたが「待った！」と櫻井に静止の声をかけられる。

「ウノ！」

そう言つて、バシ！と大きい音が上がった。それ、違う。

「つて……ああっ！」

数々の手が、輪の中心に集まっている。心の中で突っ込んでいるうちに、俺は手を出すのが遅れたのだ。

「てか、まだやるのかよ。行かなくて良いのか？」

お前が言い出したことだろうが、と言ったのだが「今のだけ」
と櫻井は我が侘を言ってきた。仕方が無く最後までやると、見事に俺は負けてしまった。先ほどのあれが勝敗を分けていた。もしかして、さっきで俺が負けることをわかっていてやめるのを嫌がったのではないかと思う。

若干、遅れて行くとそこはもうすでに他の生徒たちでいっぱいになっていた。だが、まだ準備が出来ていないみたいで皆思い思いに歩き回っていた。

人混みで酔いそう……そう思って、なるべく人の少ないところへ移動していると、黒松がいた。

彼女もこちらに気づいたようで、ぺこりとお辞儀をすると小走りでこちらに近づいてきた。

「こんにちは、藤野くん」

「ああ」

黒松は特別親しくはなかったが、入学式の一件と席が近いということもあって高田の次によく会話をする存在だった。

相変わらず、どこか不安そうにおどおどしていたが、最初に出会ったときよりは幾分親しげな口調で聞いてきた。

「そういえば、あの花瓶の花……誰、なんだろうね？」

相変わらず花瓶の犯人はわからないままで、俺はその言葉に素直に頷いた。

「ホント、楽しめたいけど誰なんだろうな」

「そうだね」

そうだ。俺は黒松に頼み事をしようと思った。

お前、覚えてたら他のやつに聞いてくれないか？

しかし、その言葉は発せられることはなかった。うるさすぎる邪魔が入ったからだ。

「もしかして、シヨウのこと好きなやつかもしれないぜー？」

俺の身体に全体重をよりかけ、いきなりそいつは会話に乱入してきた。櫻井だ。さっきまで女子と話していたはずなのに、一体全体

どういふつもりなのだろうか。

「バカ。まだ5月なのに、そんな気の早いやついるか」

一目惚れならまだしも、そんな浮き足経ったやつがいるのが信じられなくて俺は突き放すような口調でそう言った。だが、櫻井はニヤと笑みを浮かべるばかり。

「ふふふ……どうなんだろうねー？」

その厭らしい笑みがどうにもこうにも腹が立った。なんなんだ、その笑顔は。

そこで俺と櫻井は黒松を置いてけぼりにして、馬鹿のような会話を続ける。ふと、定員割れで黒松がこの学校に入学していたら今の発言はものすごく失礼に当たるのではないかと思った。

櫻井に対しては遠慮がないのでそういうことも言っても良いが、相手はクラスメイト。不快な想いをさせてしまったら申し訳ない。

俺はさっきの会話を黒松の前でしてしまったことを後悔して、彼女に話しかけた。

「黒松、もし……さ。もし、お前がここを本命で受けていて、入りたいくてこの学校に入ったのなら……。さっきの発言は撤回する。不快にさせたなら、謝る」

それは本心だった。

大抵の人間はそんなことない、と首を振るのが予想できたが、この一言があることによって俺のイメージは幾分変わる。

案の定、予想通り彼女は首をブンブン横に振って否定をした。

「う……うっん！全然、ぜんっぜん、気にしてないよ！私、ここ一本で受験したけど、ぜんっぜん気にしてない！」

ただし、違う意味で。

普通、こういう言い方はものすごく親しい相手にする発言ではないだろうか。

彼女も俺の反応を見て、失言に気づいたのか、泣きそうな顔になっていた。

それを見たら、なんだか面白くて先ほどまで抱いていたイラツとした気持ちが綺麗さっぱりなくなっていた。おい、気づいていなかったのかよ。

面白くて、つい口の端を歪ませてしまう。

「でもイラツとすんのも変だよな。俺が言い出したことなんだし……。それにお前の反応が変すぎて見てて面白いから、どうでも良いや」

それは書直な気持ちだった。しかし、彼女は思いがけない返答だったようで惚けた顔をしたあと、つぶれたカエルのようなひどく滑稽な顔で俺を見つめ始めた。

彼女としては俺がどういう意図でそういうことを言ったのか、考えているつもりだったようだが、その顔がおかしくて俺は真顔で吹き出してしまった。

……女子があんな顔するか、普通！？

黒松はなぜ自分が笑われているのか理解できていない様子で、それがさらに笑いを誘った。気がつくと、同じ瞬間を目撃していた櫻井も一緒に笑っている。

俺はまた痙攣しそうな腹を押さえつけて、必死に謝った。気の弱そうな子だから、もしかしたら傷つけてしまったかもしれない。しかし、いくら必死でも笑いが込められている俺の謝罪は何の効果ももたらさなかった。

黒松は最後まで俺たちが笑って意図がうまく理解できてはいなかったが、俺たちが笑っているのを見てつられて小さく笑っていた。

口の端を歪ませて微笑んでいる様は何度か見たことがあるか、小さく声を漏らして笑っているのを見るのは俺は初めてだった。

案外、子どもっぽい笑い方すんな、と思った。

宿泊研修が終わった、その週の日曜日の朝。俺は家の居間でごろごろとテレビを見ていた。外は文句のつけどころがないくらい快晴だったが、俺は家の中で一日を過ごすことを選んでいた。休日は家で過ごすにかぎる。

数ヶ月前に新調されたソファは最新式で、スイッチを押すとすぐに寝るような体勢にできた。テーブルに麦茶とポテチを置き、だらしのない体勢で食べていた。

「ちよつと、お兄ちゃん」

高い声が俺の背中にかかる。明らかに面倒なことになると悟った俺は、無視を決め込んだ。だが、その人物が俺の目の前に現れたのでそれは無駄な努力に終わった。

「聞してるの、お兄ちゃん」

パーマがかかっている長い髪を揺らしている中学2年生の妹がそこにいた。

黙っていればまあまあ見られるのに、口を開けばまるで母親のようにうるさい。藤野家では女性がうるさく、権限があるように思ってしまう。

「あー……なに、みその」

「なにつて、あたしの誕生日プレゼントくれるって話だったでしょ？」

「え、そんな約束したっけ」

「した」

大きくみそのは頷いた。が、あいにく俺には記憶がなかった。そういえば、昨日みそのの誕生日だったような気もしないでもない。

みそのを盛大に無視してさっさとテレビに戻ろうとしたら、突然テレビの電源が切られた。すぐ隣でみそのが怖い顔をしながら、リモコンを持っている。

「……言った、か？」

「言いました」

「マジで？」

「マジで」

「変な薬でも……」

「飲んでません」

「……………」

妹の視線がとても痛かった。よく格好を見ると、綺麗に着飾っている。本当に、黙っていれば見栄えがするの……と関係のないことを考えていると、さらに睨まれた。見透かされていたらしい。

「……ああ、わかった。わかったから。ちょっと待ってる」

「よろしい」

等々根負けした俺は、妹のために外出することにした。

みそのが自分の誕生日プレゼントに選んだ洋服は、決して安くはないがなんとか俺の財布でも対処できる金額だった。確実に足元を見て選んだ妹には、呆れを通り越して関心してしまう。

「やったーっ。ありがとうね、おにいちゃんっ」

嬉しそうに服を抱きしめるみそのを見て、ポン、と軽く頭を撫でた。小さい頃から妹にしてやっているから、もう条件反射のようなものになっている。

「おにいちゃんも、せつかく高校生になったんだからカノジョの一人や二人作ったらー？」

服のみならず、ベリースペシャルアイスクレープなるものまでねだられ、満足げにそれを食べているみそのがおちよくるように言った。

今いる場所は、街のクレープ屋の目の前。食べるためのベンチがあちこちにあって、カップルや仲の良い女子同士が楽しそうにクレープを頬張りながら笑っている。

俺は妹の買いい物に付き合わされた疲労感でぐったりとイスに座った。

カノジョ……そう言われて、何故かあの花瓶の件を思い出していた。宿泊研修の「お前のことが好きな女子からじゃないか」という櫻井の言葉を思い出したからかもしれない。

「なあ」

「なあに？」

「女子って、何されたら喜ぶんだ？」

「はっ!？」

意外な発言だったらしく、驚いた声を上げた。すると次の瞬間には飢えた獣のように、みそのは俺を質問攻めにした。

「え、なにになになに？好きな子できたのっ？おにーちゃん、好きな子いるのーっ!？」

力みすぎて、手に持っているクレープの中身が若干零れている。

だがみそのはそんなことは全く気にならないらしく、ずいずいと顔を近づけて来る。

「いや、違う。ただ、礼を言いたいやつがいるんだ」

「ふーん……」

疑うような目つきをしていたが、俺が何も白状しそうにないとわかると隣に座って答えた。

「ものをあげるなら、無難にお菓子とか、お花とかじゃない？」

案外まともな解答が帰ってきて少し驚いた。

「花……」

俺の脳内に、鮮やかな黄色い花卉のタンポポモドキがパツと浮かんだ。

いや、しかし……花瓶に刺さっているものと同じものを送るのはいささか変だろうか。それをするぐらいなら、係をちゃんとやれよと思われるかもしれない。

「……そうだ」

俺は思いつき、立ち上がった。みそのが不思議そうな顔をして俺を見上げる。

「俺、用事思い出した。じゃ」

「って……はあ？ちよつと、お兄ちゃん!？」

持たされていた荷物を置き去りにして、俺は走り出した。バス停まで急ぎ、ちょうど来ていたバスに乗って、降りる。たどりついた

場所は、学校だった。休日ではあったが、部活や仕事をしに生徒や教師が少なからず廊下やグラウンドにあちことにいた。

俺は校舎には入らず、校庭を目指す。足下を見ながら歩いていると、ある場所で足を止めた。

「あつた……」

そこには、咲き始めたばかりの色鮮やかなタンポポモドキが、雑草に混じって大量に咲いていた。そこは人目に付きづらい、草刈りさえあまりしてもらえないような場所で、放置されているからこそここまで繁殖しているのだと俺は思った。

俺は元気そうなタンポポモドキを選び、プチプチと引っこ抜く。大量かさなった姿を見ると、これはこれで立派な花束に見える。だが俺はそれを、一本一本丁寧に取り出して茎同士をつなぎ合わせる。しばらくすると、俺の手の中にはタンポポモドキでできた花輪が出来上がっていた。

多少それは不格好なものだったが、パツと見ると見栄えは良い。むかし、妹にねだられて作ってやった経験が活かせるとは思ってもしなかった。

俺はそれを教室へと持っていき、花瓶に入ったタンポポモドキのとなりにそつと置いた。

これで明日、その人物が学校に来ていなかったり見事に無視をしてそのままにしていたりすると俺は酷く恥ずかしい思いをすることになるのはわかっていたが、きつと受け取ってくれると信じていた。予想していた通り、次の日に俺が学校へ来たときにはそこに置いていたはずのタンポポモドキの花輪はなくなっていた。

あの日記は、一日経つごとに一日分を読むことにした。

軽く見ると、一年分ぐらいあるようだったし、元からシヨウは文章を読むのは苦手だった。一気に読み切る自信などなかった。だから、この方法をとることを思いついた。

シヨウが一日一日を過ごすたびに、彼女の一日一日を読む。彼女の目を通して見る、去年の学校は懐かしさと新鮮さを帯びていて、読んでいて楽しかった。

日記によつてはすぐつまらないことを書いていたり、逆に続きが気になることが書いてあったりしていたが、それでも一日一日のペースを止めることはしなかった。

放課後、一人教室にいる俺はぺらり、とページをめくる。そこには、研修旅行に行ったときのことが書かれていた。

「あの噂、もしかしてあいつか……？」

しかし、そんなすぐバレるような軽い嘘が数ヶ月も続くはずない。そう思い直して、さほどシヨウは気にしなかった。

また1ページ、日記をめくる。ぱらり、と軽い紙の音がした。

彼女が歩んできた一年を、今の自分が一つ一つ拾っていく。

自分の知らない『シヨウ』が何かするたびに、一喜一憂する彼女はなんだか面白かった。日記の通り、からかうとても面白いかもしれない。

今は5月。短いゴールデンウィークも終わり、朝の船の清掃のアルバイトを無事に終え、小遣いも手に入れたばかりだった。バイト後に櫻井の遊びに付き合わされて、結果的に財布の中はプラスマイナスゼロになっていたが。

シヨウは黒松に、日記を読み続ける旨を伝えようと教えられた連絡先に自宅から電話をした。彼女はいつシヨウが読み終わるか気になっているかもしれない。

数コール鳴ると、男性の声が電話に出た。恐らく、黒松の夫だろう。

「もしもし、黒松さんのお宅ですか？僕は、藤野と言います。黒松こころさんに用事があって、電話しました。取り次いでいただけま

すか」

電話の仕方としては間違っていないのに、シヨウの言葉に対して返事はなかった。電話ごしに呼吸をする音だけが聞こえてくるから、切られているわけでも電波状況が悪くなっているわけでもない。

「あの……もしもし？」心配になり、もう一度電話に向かって話しかけると今度は返事が返ってきた。

「……うちの家内は、今入院しています。うちの家内と、どのような関係でしょうか」

無機質な機会のような声だった。まるで、テープで録音された声をそのまま流したような抑揚のない声。

黒松との関係性をどう説明して良いかわからなくて、「娘さんの関係者」と伝えた。

「なんだって……？」

その声は先ほどとは違い、感情が宿っていた。ただし、それは決して明るいものではない。人生に疲れ切った、重く、静かで、何かに苛立っているような、そんな声だった。

「……うちには、娘はおりません。訪問販売なら、結構です。妻の妄想に付き合っているだけなら、ただちにおやめになられて結構です。妻の妄想を利用しようとしているだけなら、もう意味はないと思います。お引き取りを」

拒絶。

全てにおいて拒絶を含んだその言葉に、シヨウの背筋に何か冷たいものが走った。

「いえ……どれも、どれも違います。待ってください……」

そこまで言うと、電話は一方的に切られ、虚しい一定音だけが受話器から聞こえてくる。シヨウはもう一度、電話をかけた。するとすぐにまた、あの男性の声が聞こえてきた。

「すみません。何度も。俺は、怪しいものじゃありません。ただ、黒松さんの知り合いなんです。もしご病気なら……」

そしてまた、電話が切られる。シヨウは半ばヤケになって、また

電話をかけ、話をしようとするが一方的に切られる。何度か繰り返しと、本格的に無視され電話に出てもらうことはなくなった。

「くそ……っ」

苛立つて、そばにある壁を殴った。大きな音が鳴り、二階にいた妹から苦情が来たが無視をした。

彼は確かに入院、と言っていた。ということは、いきなり事故に遭ったと考えるよりは精神病院に入院した可能性が高い。彼女の言動は、普通の人間からして見たら異常なのだ。

娘が消えたばかりのときは彼女も動揺して、精神がおかしくなったように思える行動が多かったのかもしれない。それに家族が疲れてしまったと考えるのが妥当だろう。

黒松家の恥だと思って、あまり他人に話したくないのかもしれない。なら、事前に知らされた住所の場所へ行っても黒松こころの入院している病院を教えてもらえないだろう。

シヨウは二階の自室にいる妹に声をかけた。

「みその、ちよつと手伝え」

「なあに？あたし、こう見えても忙しいんだけど」

「いいから。バイト代出す。時給五百円で」

「最低賃金より低いんですけどぉー」

中学生のくせに最低賃金の値段を知っているとは生意気な……舌打ちをする。

「わかったわかった。時給千円。これで文句ないだろ」

「やりいつ、それでそれで？あたし、何すんの？」

現金な妹をあつさりと金で買収することに成功し、指示を出す。

「まず、ネットでここら一体の地図を出せ。で、この町にある精神科の病院を調べろ」

「なあに、探偵ごっこ？」

「そんなもんだ」

野次馬根性が発動し、うずうずと事情を聞きたげな妹の視線を受け流し、行動させる。

プリンタは家の中に一台しかなく、しかもそれが父の部屋だけであり、シヨウは自分のノートパソコンをそこまで持ち込んで、LANケーブルを繋ぐ。これで、シヨウのパソコンでもインターネットができるようになる。

インターネット検索で、近くの病院の一覧を出す。そこで気がついた。

「……グーグルマップじゃ全然出てこない」

場所と一緒に出てくるから楽だと思っていたのに、全然違う。とりあえずそこだけでもプリントするように妹に指示を出し、画面をスクロールすると市内のメンタルクリニックを紹介しているサイトを見つけたので、名前を言って妹に調べさせ、マーカーで地図に色を塗ってもらい、そのページをプリントさせる。

市内だけで20カ所近くあったが、住所を限定すればもっと探しやすくなるはずだ。

「……通いやすいことを考えると、家の近くが有力候補だな」

その家の近くの場所も数えてみると5カ所あった。広い市内なのに、こんなに病院が密集しているとはどういうことだと叫びたくなる。

だけれども、一件一件渡り歩くしかないのだ。

「病院って普通、日曜日しかやってないよな……」

「まー、そだねー」

だとすると、学校のある平日に行動を起こさないといけない。毎週土曜日になるたびに行っていたら、見つかるのはいつ頃になるかわからない。

幸い、シヨウは成績優秀で欠席は今のところない。多少学校をサボったぐらいでは何も問題ないだろう。学校をサボるという行為自体、罪悪感など全くシヨウは覚えないが。

決めたら即行動。黒松の家の近くにある病院を中心に回ることにした。

電話で問い合わせなかったのは、怪しまれると思ったからだ。今

の時代、プライバシーが尊重されていて少しでも疑わしいと何も教えてもらえない。なら、直接病院へ行って聞くのが一番だ。合っていたらそのままOK。違っていたら、間違えましたでおわり。一番確実な方法だった。

次の日、親には学校に行くそぶりをしていつも通りの時間に家を出た。ショウが学校をサボろうとしていることを悟ったみそのは、口封じに買収を持ちかけてきた。金でなんでも言うことを聞かせられるのは良いが、財布の中身が薄くなる。

制服で歩いていると目立つので、服も一緒に持っていく。近くの公園の公衆トイレで着替えた。

もうすぐ夏になるせいか、暑い。

北海道だから梅雨は来ないが、雨が降ることは多くなる。自然と外の気温ははじめとしてきて、じっとりとしたなんとも言えない汗が頬をつたう。あちこちに紫陽花の花が鮮やかな紫や濃い桃色で咲いており、艶やかにその存在を主張している。まるで、夜の街で男性を誘う遊女のようなであった。

バスに乗り、電車に乗って最初の病院へと回った。遠いところからスタートしたので、そこへ行くのにも時間がかかり、たどりつくところとちょうど病院が開業する数分前だった。病院の前にはすでに多くの人々が待っていて、日本社会の残酷な断片を目撃してしまったような気分になる。そのうち病院が開き、一斉にカウンターに人が集中したのでショウは一番最後に並ぶことにして、少し離れたところに立った。ようやくカウンターに人がいなくなったのを確認して、看護師に声をかけた。

「すみません、ここに黒松っていう人が入院しているはずなんですが」

「黒松さん、ですか。ちょっと待ってくださいね」

そう言って、看護師はパソコンを操作し始める「うーん……ここ

にはいないみたいですが、病院を間違われましたのだと思います」
外れだったのを確認し、シヨウは丁寧にお礼を言っつてその場を後にした。

ついでに、市内の病院のリストをもらつて、昨日妹に作つてもらつたりリストと地図とを照らし合わせて昨日調べた病院の他に漏れはないかどうか確かめた。

その調子で2件、3件と回つても収穫はなかった。4件目を回つたあたりで同じ苗字の人物を発見したが、残念ながら名前が違つていた。歩き回つた疲労と、次に行つたら病院が閉まつていることを知つて、シヨウは家に帰ることにした。

みそのが興味津々に今日は何をしていたのだと聞いてきたが、一言だけ「友達に会おうとしたけど無理だった」と伝えた。納得してない顔をしていたが、デリケートな話題に聞こえたらしくそれ以上は何も追求してこなかった。

その次の日も、学校を休んで病院を回っていると、昼頃に櫻井から着信が来た。

『あー、もしもしー？昨日も今日も来なかったから、体調でも悪いと思つて電話してみたんだけど。生きてるかー？』

「ああ……大丈夫。サボつてるだけ」

『は？そりやまた、なんで？』

「野暮用」

『お前に野暮用なんてできるのかー？というか、誰かさんが寂しそつだから早めに学校来てねー。』「ちよつと、何言つて……！」
『いーからいーから』電話ごしにドタドタという音や女子のものかと思われる悲鳴が聞こえてくる。半ば呆れて、電話を一方的に切つたが、すぐにまた着信が来た。

『いきなり切るなつて。それより、ホントになにしてるのさ。オレで良ければ協力するけど』

櫻井の口からそんな言葉が飛び出るとは思つていなくて、シヨウは耳を疑つた。

『いや、だつてお前、倒れた日あたりから変だぞー？……いや、倒れる一週間ぐらい前も変だったけど』

「……いや、大丈夫。ちよつと、知り合い捜してるだけだから」
シヨウは櫻井に説明はしなかった。

自分でさえ、まだ完全に信じ切っているわけではないのに突然そんなことを言われて、いきなり信じる方がどうかしている。

櫻井は不服そうに声を上げていたが、最後に「無理するなよー」とだけ言つて電話を切った。

友人の優しさにどこか嬉しさを覚え、シヨウは携帯見つめて唇をほころばせた。

気合いを入れて、それから2件まわり、3件目でようやくシヨウは黒松が入院している病院を見つけた。

「黒松ころさんですね。3階の312室にいますよ」

言われた通り、そこへ行くと黒松の名前のプレートがかかっている病室についた。場合によつては面会謝絶されるとも考えていたので、面会できると知つてホツとする。

シヨウは白い、無機質な大きな扉の前に立ち、控えめにノックをした。だが返事がないので、一言言つてから入室をした。

疲れ切つた表情をして、ベッドに座っている女性がいた。

頬はげっそりと痩け、目は虚ろで窓の外ばかり見ている。まるで大事なものでも抱えているように、両手で自分の身体を抱いている。無機質な病室に、生気を失つた存在。彼女はまるで、病室の置物のようであつた。

「……黒松さん」

シヨウは静かに声をかけるが、彼女は窓の外を見たままだつた。近づいて、彼女の視線の先を見ると仲が良さそうな親子が二人、歩いていた。

何も言わずに立っていると、風のように静かな声で彼女は言った。
「……イユがね、また来てくれるって」

年老いた老婆のように、その声は枯れ果てていた。

「でも、あの人だったら、信じてくれないのよ。イユがすぐそこにいても、全然気づかないんだから。おかしいわよね」

「黒松さん……」

「イユ、イユ、イユ……。どこへ行ったのかしら。あの子、おっちょこちよいだから心配だわ。また、クッキーなんて作ってお塩とお砂糖間違えなきゃ良いけど」

どこかおかしい。黒松は、いなくなったであろう『黒松イユ』の存在はきちんと覚えている。だけれども、最初に会ったときの印象と今の彼女は全く違っていた。

「あの子、一生懸命新聞を切り抜いていたりして……変な子よね。お母さんも一緒に手伝って、楽しかったわ……」

「黒松さんっ！」

耐えきれなくなり、黒松に呼びかけるとようやく気づいたようにゆつくりと彼女は首をシヨウの方へと向けた。どこか遠くを見ていた瞳は焦点が合わず、本当にシヨウを見ていたかどうか怪しい。

「ああ……藤野、くん、でしたか。イユ、元気にしています？内気な子だから、話しかけてくれると嬉しいわ」

につこりと、病んだ表情で笑った。

黒松の病室を出て、歩いている看護師をつかまえて聞いてみると彼女は重度の精神病だと説明された。そして、しばらく前から入院していることも。

病名は喪失不安障害。つまり、喪失病だった。

わかっていた。彼女自身が喪失病ということとは。最初に会ったときから。

でも、これは違う。短い間に、彼女は壊れてしまった。娘の幻想で、ではなく、周りに壊されてしまった。

「……なんです！」

気がつくのと、叫んでいた。

心の奥底が、悲鳴を上げていた。黒松の周囲に対する、暗く深い怒りと、悲しみの感情がこみ上げてくる。

黒松は、シヨウに会ったときにはすでにここで入院していた。それを抜け出して、会いに来てくれたのだ。

黒松は、シヨウに会うまで耐えていたのだ。娘の存在を信じてもらえる人間に会うまで。自分の心が、壊れてしまわないように、耐え続けていたのだ。

苦しくて、悲しくて、どうにかなってしまいそうだった。

心が壊れてしまうくらい、黒松は孤独だった。それを思うと、胸が張り裂けそうになる。

「……俺は、信じる」

零れた涙を拭きもせず、意志を込めた瞳だった。

「俺は、『黒松イユ』を信じる。あなたの分まで。そして、みんなが彼女を思い出せる方法を探す。探してみせる」

きゆう

今日は、嬉しいことができました。

どうしてかと言いますと、朝、いつものように花瓶のお花を取り替えようと教室に行くと、あるものが置いてあったからです。

それは、タンポポモドキで作られたお花の冠でした。

一目見て、彼からのプレゼントだってことを私はわかりました。ふさふさと、黄色い花が円形に広まっていて、手に取るとふわつと緑の匂いが鼻孔をくすぐりました。そつとそれを自分の頭にのせました。頭の上に心地よい重量感を感じました。

似合っているかどうかわかりませんが、そんなことは気になりませんでした。嬉しさの方が勝っていたから。

本当はずつとのせていたかったけど、花瓶の水を取り替えて新しい花を差し替えている間だけにしておきました。

名残惜しく花輪を自分の頭から外して、そのまま私は図書室へと向かい、誰も近づかないような古い本しか入っていない棚の中にこっそりと隠しました。帰りに持ち帰ろうと思います。

その日は一日中、私の頬は緩んでいました。シオリちゃんに何があったのかと質問攻めにされましたが、秘密と言って押し通しました。

嬉しい。

心がまるでふわふわと浮いているように、とても幸せな気持ちになりました。

学校が終わって、すぐに図書室に向かいこっそり花輪を回収した私は家に持ち帰り、自分の部屋で飽きるまで花輪を眺め続けていました。

花が枯れてもう花輪とは呼べないものになってしまっても、私は悲しくはありませんでした。贈ってくれた事实は、確かにそこにあったのだから。

シヨウは、ふ、と笑いを含めた声を漏らした。

花輪一つでこんなにも喜ぶ彼女。自分が彼女に花輪を贈ったのだろつと予測ができた。

恐らく、お礼のつもりだったのだろう。

たとえ彼女の記憶が今もあつたとしても、こんなにも自分の贈り物が彼女を喜ばせたなんて知らないままだったはずだ。去年の自分に對して、シヨウは優越感を持った。

今、シヨウがいるのは学校の保健室。今は昼休みの時間帯で、学校全体がざわざわと騒がしい。

勝手に座り心地の良いソファ―に座つて、日記を読んでいた。

保健室に常時いるはずの先生は今ちょうど不在。ついでに誰もいないので、遠慮することなく消毒液のする保健室を占領していた。

「あら？この前の子じゃない、どうしたの？」

ガラガラと音が鳴つて、保健室の先生が入ってきた。

シヨウは軽く首を下げてあいさつをする。

「先生にちよつと聞きたいことがあつて」

消えた『黒松イユ』の記憶を取り戻す方法を探るため、まず身近の先生を訪ねることにした。あのとき以上の話を聞くことは出来なさそうだったが、喪失病だった人を覚えている人の連絡先が聞けたら、と思つたのだ。聞いたときの印象だと、黒松のように心が壊れている可能性は低いだろう。

「この間言つてた、喪失病の人に会いたいんです」

先生は少し目を丸くして、まじまじとシヨウを見た。

「興味本位……ではなさそうよね」

静かに頷いた。

「理由を、聞いても良いかしら？」

シヨウのとなりの座り、そう言う。先生の重さで、ソファは先ほどより沈んだ。

シヨウは手短に説明をした。黒松の存在、あみの存在、自分が倒れた理由。シヨウの、目的。

「……俺も、頭がおかしいと思いますか？いない人間の記憶を捜すなんて無駄なこと、って思いますか？」

どう答えられてもシヨウは構わなかった。自分が本気だということとを伝えたかった。

「……そうね、どうかしているかもしれないわ」

「でも、教えてもらえますか？その人のいる場所を」

「探す必要はないわよ」

どういうことだろう。と思い、首を傾げると先生は微笑んだ。

「だって、この学校にいるんだもの。あなたも知っているはずよ」

「……誰、ですか？」

彼女の指した人物は、シヨウを驚かせるのには十分だった。

「先生、お話があるんですが」

保健室を出てすぐにシヨウは、職員室へと向かった。そこにいたのは、ジャージを着たがっしりとした教師。去年、一年生代表のあいさつのときに世話になったあの先生だった。最初に名前を聞いたときはわからなかったが、沖田という名前らしい。

沖田は、小テストの採点をしていた手を止め、不思議そうな顔でシヨウを見た。

「なんだ、去年の一年生じゃないか。どうした？」

驚くのも無理はない。沖田はシヨウの担任でも教科担任でもなかったし、部活にも所属していないから顧問でもない。ただ一度だけ

接点があったというだけの生徒が尋ねてくるのを驚くのは、当たり前のことだ。

それより、シヨウは沖田が自分のことを覚えていたことに驚いた。そのことを聞くと「練習が終わったあと、あんなにげっそりとした生徒を見るのは久しぶりだったからな」と笑っていた。当時、顔にでるほど嫌だったのかと、今更自覚した。

「ええ……その、ちよつと今は言いにくいことなんですが……」

恋の悩みと勘違いしたのか「おお、そうかそうか。そうだよな。他の先生方がいたら恥ずかしいよな」と沖田は妙に納得した様子で頷く。

微妙に否定しようとしたが一方的に「じゃあ、放課後に生徒指導室で待ってるからな」と言われて、会話をうち切られてしまった。台風のような教師だ。

仕方がないので放課後まで待って、帰りにゲームセンターを誘う櫻井の誘いを断って教室を出た。その途中、廊下で高田に会った。

「あ、藤野くん。もう帰っちゃうの？」

「ああ、まあ。似たようなもん」

「あはは、なあに、それ」

掃除用具を持っていた彼女はカラカラと笑った。ここの掃除当番なのだろう。

「……ちよつと待ってくれるなら、買い物に付き合ってくれない？ お父さんに贈り物をしたいんだけど、何選んで良いかわからないんだよね」

視線をやや斜め下に向けて、そう言った高田の誘いをシヨウは断った。

「ごめん、実は用事あるんだ」

「じゃあ、あたし、待ってるから……！」

シヨウの用事が終わるまで待ってる。その言葉を言い終えない内にシヨウは言った。

「長くなると思うし、悪いから、いいよ。櫻井にでも頼んでくれ」

「……そう」

元気がなさそうに頷き、高田は寂しく笑う。

「ごめんね、引き留めたりして。帰り、気をつけて」

「ああ、また明日」

軽く手を振って、高田と別れた。

「また……明日」

寂しげな響きを持ったその声の意味はシヨウはわかっていたが、聞こえないふりをして生徒指導室へと向かった。

生徒指導室へ入ると、沖田はすでにそこにいた。長方形の箱のよ
うな狭苦しい教室に、長机が一つ、イスが4脚ほど置いてあり、そ
れだけでこの教室はいっぱいだった。まるで尋問室だな、
と一人で苦笑した。

「おお、待ってたぞ。藤野」

どうやら自分の名前を誰かから聞いたようで、屈託のない笑顔を
向けて沖田は笑った。

もしかしたら、事前準備として自分のプロフィールを調べられて
いるかもしれない。

シヨウは向かい合うようにして沖田の前のイスに座ると、軽い調
子で沖田は聞いてきた。

「それで、いつ告白するんだ？」

「は!？」

まがりなりにも教師相手について声を上げてしまった。どうやらま
だ恋愛相談と勘違いしているらしい。

「……違いますよ、別の話です」

「おお、そうか。あんまり関わりのない先生の方が相談しやすいか
ら来たんだと思ってた」

本当に予想外だったようで、気落ちした表情で沖田は言う。

こうなったら本題をさっさと出してしまう。そう思い、真剣な
表情で沖田を見つめた。その雰囲気伝わったようで、沖田も静か
にシヨウの言葉を待つ。

「実は、保健室の先生から聞いたのですけど……先生、喪失病、だそうですね」

沖田のその表情は、わからない。しばらくの沈黙のあと、静かに沖田は口を開けた。

「……そうだ」

重い、重い、声だった。先ほどの沖田の印象とは全く違う。それほどまでに、その言葉には重く、深い想いがこもっていた。

「教えて、もらないでしょうか。その人が消えたときのことを、先生の思い出を。消えたあとの、周りの人たちを」

「ノリコが君に話したのなら、余程の理由があっただんな」

ノリコ、それは保健室の先生の名前だろうか。沖田の言うその名前は、どこか親しみが込められていた。

「俺はこの間、喪失病の人と会いました。その人は、消えたらしい俺のクラスメイトの母親でした。彼女の心が壊れる前に、彼女は俺に、この日記を渡しました」

桜柄の手帳を見せる。

「俺は、彼女をただの頭のおかしい人だとは思えない。そういうふうに思えたのは、この日記のおかげで……。この日記を書いていたやつは、どこか暖かくて、でもそれを俺は覚えていなくて、でも、それを思い出せたら、彼女は間違っていなかったんだって言えるんじゃないかって……」

途中から、自分でも何を言っているのかわからなくなった。とにかく必死に、消えた人間を思い出す方法を探そうとしていると訴えようとした。

「もう、いい」

沖田は短く言った。

「いいんだ。もう。わかった」

寂しげに笑った。そして、話し出した。

「俺と、ノリコは幼なじみだな。俺はどこにでもいるようなガキ大将で、ノリコは絵に描いたような優等生。顔を会わすたびに喧嘩し

ていた俺たちの仲を持っていたのが、高校時代に仲良くなったアキラだった」

言い争っている二人を、アキラが止める。アキラが間に入ると、何故か二人は喧嘩をしなくなった。それから自然と3人で遊ぶようになり、沖田とアキラは各々に彼女に恋心を寄せるようになったという。

二人の間には、スキがあったら告白して良し。という無言の了解があったようでいつもいつも相手の告白のタイミングを邪魔し続けていたとか。

それを繰り返していたある日、突然アキラは「自分はもうすぐ消える」と言い始めた。

「消えた人は、自分の死期がわかる……？」

「そうらしい。具体的にいつ消えるかわかっていた様子だった。それに、消えた自分を覚えているのはただ一人だということも」

もちろん、二人は信じなかった。だが、徐々に変化が起きていた。「すぐ近くにいますのはずのアキラを周りが気づかなくなっていったんだ」

同じ空間にいても、アキラの存在に気づかない。近くによって何度も何度も声をかけて、それでようやくアキラの存在に気づく。それは、アキラと関わりのない人間ほど明白だった。

とうとうことの自体を察した二人は、消えない方法を一生懸命に探した。だけれども、そんなものは見つからなかった。見つからないまま、最後の日を迎えた。

「それで最後にあいつな、ことあるうかノリコに告白したんだよ。最後だからと思いやがって」

彼女も、アキラの想いに答えた。アキラはどこか寂しそうに、しかし満足した顔で虚空へと消えた。

「でも、ノリコはあいつのことを覚えていなかった。気持ちを通じたなら覚えていてもおかしくないのに、俺があいつを覚えていたんだ。あいつが好きだったのは、俺だった」

彼女は嘘をついた。消える運命であるアキラを少しでも幸福にし

てやりたくて優しくして残酷な嘘をついた。

「あいつを覚えているのは、俺じゃないほうが良かったんだ……」
それから沖田は彼女にアキラを思い出させようとした。なにげなく思い出の品を見せ、思い出を語った。その努力は虚しくも、実ることはなかった。

「いくら記憶の矛盾点についてやっても、納得することはない。
最初は記憶自体に、もやがかかったみたいになるみたいで、思い出の話をしても「よく覚えていない」で終わり。月日が経って、そのときの話をすると「ああ、あのことね」と納得するが、それが誰と行ったかなんて記憶はごっそり抜け落ちている。その判断基準はあいまいで、まるで誰かが適当に記憶のラインを決めているようだった」

シヨウは保健室での会話を思い出した。

「一方的に想うだけでも、想われるだけでも駄目。誰よりも、絆の深い人」

「絆の深い人……って、誰がそんなの判断するんですか？」

「わからないわ。もしかしたら、神様かもしれないわね」

仮に、本当に神様が決めているのなら。本当に神様なんてものがあるのだとしたら、どうしてこんな残酷なことをするのだろう。

「先生……俺は、喪失した人間の記憶を取り戻す方法を探します」

「……無駄だ、やめておけ」

シヨウは首を振る。

「先生には無理でも、俺ならできるかもしれない。先生は悔しくないんですか？」

誰一人、大切な友人を覚えていなく、その存在を訴えるとまるで自分がおかしいかのように扱われる。世界中で、自分だけがその人を覚えている孤独、寂しさ。……悔しくは、ないんですか!？」

「お前に何がわかるっ！！」

沖田は立ち上がり、シヨウ胸元を掴んで叫んだ。

「ああ、そうさ。孤独だった。誰一人、アキラの存在は知らない。まるで、アキラが最初から世界にいなかったような扱いをされている。」

「……だけど、仕方がないだろう！どんなに必死で皆に説明しても、誰一人思い出さない。思い出すことはない。あいつがいなくなってから十数年間……頭がおかしくなりそうだった！あいつの存在を記憶の片隅に追いやつて、日々を過ごす。それだけで、精一杯なんだ！それが、お前に俺たちの、俺の苦しみの何がわかるんだ！」

悲鳴のような、泣き出す直前のような瞳の、悲しい訴えだった。

「……すみません」

シヨウは視線を逸らしてそう言うと、沖田の手がゆっくりと離れた。

「……すまない。生徒に乱暴をした。教師、失格だな」

沖田は自嘲気味に笑う。

「でもな、覚えておけ。お前のしょうとしていることは、無駄だ。誰が何をして、喪失病にはあらがうことは出来ない。これは天の理のようなものなんだよ。人間はいつか死ぬ。その運命は誰にも変えられない。それと同じくらい、この病気は決まっているんだ。運命そのものだ」

「……それでも、俺は……」

かすれた声が喉の奥から出た。

「お前が記憶を取り戻したい理由は俺にはよくわかる。お前は、唯一の人間ではないのに唯一に近い人間になっている。……その気持は、今のお前が持つてはいけないものだけど、俺は嬉しい。でも、教師としての立場だと俺はお前を止めないといけない」

沖田の言っている意味がほとんどシヨウにはわからなかった。ただ、止められていることだけはわかる。

「……諦めたく、ないっ！」

唇をかみしめ、拳を握りしめる。無力な自分が悔しかった。

沖田はシヨウの頭に手を乗せて、なだめるような口調で言った。

「なら、飽きるまで諦めないで良い。……そのうち、わかる」

その先の運命を知っているような、口調だった。

「そういうことは、理由なんていらぬ……な」

遠い日の思い出が瞳に映り、なつかしさを顔に浮かべて、切なく
沖田は笑んだ。

向日葵の花は枯れて、紅葉の落ち葉が地面を覆い尽くし、雪は町
一面を覆い尽くす季節になった。

その間、俺には好きな人ができた。

それは、高田。席が近いから話す機会も多くて、くだらない話で
いつも笑い会う。たまに、オタク知識を披露してドン引きされてい
る彼女に少し厳しめに突っ込みを入れる。そんな何気ないことが、
楽しかった。

誰と話をしても、彼女は楽しそうで、まるで太陽のようだった。

「あーあ、なんか宝くじとかで5億円ぐらい当てられたら良いのに
もしくは、雨のようにお金が振ってくる」

「ぜんっぜん現実的じゃないぞ、それ。しかも、小銭だったら絶対
痛い」

「んー、じゃあ、1万円札が10枚重なった束！」

「空から振ってくると、すごい重さになるから痛いだろうな」

「うつうつーん……じゃあ、家の隅に白いキノコが生えてそれがなん
と高く売れる！トリュフ的な」

「魔法のキノコだね」

「それを人々はマジックマッシュルームという」

「それ、なんか違うものになってるよ！」

俺、高田、櫻井。3人でそんな馬鹿のような話をして笑い合った。黒松も一応、話には加わっていたが口元を抑えて笑うだけで発言はない。

「あつははは……藤野クン、面白い……っ！」

ツボに入ったようで、腹を抱えて高田は笑っていた。余程苦しいらしく、身体全体が痙攣をしていた。

その姿に、俺の心に木漏れ日のように薄い、光がさしこめられる。春の日のような、暖かさを覚える。

高田を意識し始めたからこそ、俺は残酷なことを知ることになった。

「え。高田さんって、山尾と付き合ってるよね」

それは何気ない、男子同士の会話だった。

普段滅多に恋の話題をしない俺が珍しく加わっていると、そんな言葉が飛び出てきたのだ。

「……いつから？」

最初は耳を疑った。それが真実かどうか疑わしくて、聞いてみると、今年の夏から、だそうだ。夏がすぎてもう数ヶ月。未だ別れていないということは、順調に行っているということだろう。

「そうなんだ……」

俺は、その場の全員に悟られないようにわざと興味のないフリをして、話を別の話題に逸らした。

その後、放課後教室で櫻井にそのことを聞いてみると「え、知ってるけど」という答えが返ってきた。逆ギレに近かったが、そのことを責め立てるとよくわからないことを言い出した。

「いや、だってフェアにしないと」

どういうことだ。そう言いかかるうとしたが「オレ、今日忙しいからまたねー」と、まるで突風のようにその場を去っていった。

「……なんだよ、ソレ」

櫻井に聞いたことだが、まだ5月の頃から高田は俺のことが好きだったらしい。だが、見込みがないと悟って別の相手と付き合うことにした。

それで、どういうわけか高田は俺にカノジョがいると今でも思いこんでいるとか。その噂は今でも健在らしい。

そこまで知ってなんで誤解を解こうとしないんだと櫻井に対して無性に腹が立った。だが本人もそれを知ったのはつい最近のことで、どうしようもなかったと話していた。

その態度はいつも通り飄々としていて、真偽のほどはわからない。根も葉もない噂のせいでチャンスをふいにされたと思うと、どうしようもなく俺は腹が立った。やりきれない思いと、諦めきれない高田への想いが入り交じって、誰もいない教室で高田の席に座ると、ふてくされたように俺は突っ伏して瞼を閉じた。

自分の机とそう変わらない木の匂い。だけど、どことなく甘い香り。彼女はいつもこの席で一日を過ごしていると考えると、どこか切ない気持ちになって、ただ瞼を閉じるだけのつもりがそのまま寝入ってしまった。

ガス臭い暖房が入る音と、ページがめくれる音がして、意識が浮上した。

ぼんやりと窓の外を見ると、黒い絵の具をそのまま塗ったような真っ黒い闇が広がっている。眠気が根強く残っていて、再び瞼を閉じると後ろから本のページがめくられる音が聞こえてきたのがわかった。

誰かいるのだろうかと思ったが、起きあがるのも億劫でしばらくふわふわとした意識のままページのめくられる音だけを聞いていた。だいぶ時間が経ってもまだ身体は暖かくてもしかしてこれは夢の世界なのではないかと思った。後ろを振り向くとこの心地の良い夢が覚めてしまうような気がして、声だけをかけた。

「——読んでる本、聞かせてくれ」

そう言つと、ページのめくれる音は止まり、音の全くない空間が生まれた。音も何もない宇宙に取り残されたかのような錯覚がした。しばらくすると、最初から読んでくれるようで、ページを戻す音が響く。鈴のような声が聞こえてきた。

「——男が一人電車に乗っている」

それは、電車に乗っている男が様々な人々と会う話だった。

何もない最終駅を目指している男は心優しい人々に、そこへ行かずに一緒に来るように誘われるが、それを全て断っていた。それでも心優しい人々は男に「最終駅についたら花を贈ってもよいか」と聞いた。

一人残され、最終駅についた男は答えた。

「嬉しいよ、ありがとう——」

そして、どこかへと消えていった。

『青い空の下。もう使われていない線路の片隅にいくつもの花が添えられていた。

一人寂しい生涯をおくったはずの孤独な男に、誰かが花を贈ったのだ』

「コメントしづらい内容だな」

俺は素直にそう言った。

真面目に返すのも恥ずかしいし、この作品は何を伝えたかったのか文章読解能力の薄い俺は正直わからなかった。

後ろの気配は喉の奥で笑ったような音を出すと、俺の言葉に答えた。

「そうだね」

先ほどと同じ、鈴が鳴るような優しい響きだった。

「こいつ死んだのだろうか」

「そうだと思うよ」

「なんで電車なんかに乗ってるんだよ」

「あの世に繋がってたからじゃないかな」

「なんで花なんて贈ってるんだよ」

「死者には花を贈るから」

「花は、なんの花だったんだろうな」

「わからない。でも、私ならタンポポモドキを贈るかな」

タンポポモドキ。その言葉で、弾かれるように俺は起きあがって後ろを振り向いた。

「なんで、タンポポモドキなんだよ」

「……あちこちに生えているから」

そこにいたのは、黒松だった。

黒松は高田のすぐ後ろの席だった。今更ながら俺は気づく。

高田は少し驚いた様子だったが、すぐに目を細めて静かに微笑んだ。どこか幸せそうな顔だった。

タンポポモドキ。と聞いてまさか、と思った。けれども、その先を知るのどこか怖くてそれ以上俺はそのことを考えるのはやめた。その代わりに、別の言葉を彼女に向けた。

「俺、お前がそんなにしゃべってるの初めて聞いたかもな」

黒松とは席が近いので日常的に話はする。だけれどもいつも見る彼女は一言言うだけか、周りに合わせて笑っているか、相づちを打っているだけだった。

俺は、身体の位置を元に戻して、再び机に突っ伏して目を閉じた。
「もう一回、読んで」

返事はなかったが、ページを戻す音が聞こえて彼女が了承したの

がわかった。

静かに息を吸う黒松の音が聞こえ、再び、彼女は先ほどの話を読み始めた。

決して上手ではなかったが、幼い子どもをなだめる母親のような暖かさがそこにはあった。羊水に抱かれる赤子のように、汚い心など全部なくなったような気がした。

普段感じることもない、静かな音に、安らぎを覚えた。

先ほどの話を読み終わり、再びページを開く音だけが聞こえる空間がやってきた。

長い時間、その音に耳を傾けていた。

「……俺、失恋したんだ」

黒松に背を向けたまま、ポツリと呟いた。俺の声はまるで虫が飛んでいるかのように小さな音で、彼女に聞こえたかどうかとも怪しかった。

「付き合ってるやつ、いたんだって。笑っちゃうよな。そんな可能性、思いもつかないでうのうとドキドキして、緊張して……バカみたいだ」

どういうわけか、するするとそんな言葉が自分の口から飛び出していた。普段なら他人に絶対言わないような気持ち。もしかしたら、彼女の生み出した暖かい空気のおかげかもしれない。

返答は、なかった。相づちも、何も。だけれども、シヨウにとつてはそれで十分だった。

「諦めるには諦めきれなくて、諦めきれないとそれ以上傷つくのが嫌で……。意味わかんないよな。それに、俺に付き合っているやつがいるって誰かが言ったせいで、あいつ、俺のこと好きだったらしいのに、諦めたって聞いて、ますますわからなくなって……」

情けないことに、俺の瞳に涙がにじむのがわかった。女の目の前で泣くなんて格好悪いのに、それを止めるのは大洪水を一人でくい止めようとするのと同じくらい無謀で意味がないことだった。

必死で嗚咽を抑える音だけが空間を支配した。

たかが失恋ぐらいで、情けない。そう思うが、思うのに、想いと理屈は全然違うもののように、理屈を押さえつけて想いだけが一人暴れ回る。

「……いこう」

静かな声が上がって振ってきた。

いつの間にか黒松は立ち上がった。後ろの席にいた彼女は俺のいる前の席の方へと歩いてきたが、その顔を俺に見せることなく背中だけを向けていた。

「いこう」

短い言葉に、どこへ、と聞き返した。黒松は振り返って、言った。「シオリちゃんのところ」

その表情は、真面目なようで、どこか悲しげなようで、微笑んでいるようでもあった。

そつと、俺の左手を右手で掴むと、立ち上がらせようとする力が働いて、俺は特に抵抗することなくイスから立ち上がった。

黒松は、高田の元へ行くと言っていた。それがどういうことなのか、俺はすぐに理解する。

「……俺が、フラれる所でも見たいのかよ」

フラれるとわかつているのに、どうして彼女は連れて行こうとするのだ。静かな怒りが湧いて、苛立った口調でそう言った。

黒松は首を振った。いつもの彼女なら、睨まれるだけで身をすくませて何も言わなくなるのに、今日の彼女は違った。

「私も藤野くんも後悔、するから」

その瞳には揺るがない、意志の力が宿っていた。

「私が後悔して、藤野くんが後悔しているところなんて、嫌」

さらに強く、俺の手を握った。

「だから、行こう」

「……うん」

彼女の言葉は少なく、何かを伝えるのには足りなくて納得することはなかったけど、気がついたら俺は黒松に手を引かれて学校を出ていた。

引かれた手が、暖かった。

きゅう（後書き）

短編「終着駅を目指す男」がちよっぴり出ています。

じゅう

私は先生に雑用を頼まれて、学校に残って作業をしていました。

職員室での作業を終えた私は、廊下に足を一步踏み入れるとその身を切るような寒さに身体を震わせました。職員室は暖房がよく効いていて気づきませんでした。夜になると一段に冷え込んで廊下は寒くなっていました。

北海道は秋が短く、冬が早めに顔を出してくるので廊下を歩くと白い息が口から漏れて虚空へと消えていきます。それが面白くて何回もやってみると、蒸気機関車のように白い煙が出ては消え、出ては消え、を繰り返していました。

楽しくて一人で笑っていました。そこで、ようやく私はコートを取りに行くために教室へ行く目的を思い出して、早歩きで教室へと向かいました。

ほとんど誰もいないような廊下を歩いていると、私の教室の電気がついていることに気づきました。暗い廊下から見える教室の明かりは、暗闇を照らす一筋の光のように思いました。

中の様子を見るようにドアの窓を見ると、机に誰かが寝ているのが見えました。私はそっと、ドアを必要最低限の広さまで開けて素早く教室に入りました。暖房が入りっぱなしだったのか、むあつとしたぬるい空気を感じました。

起こすのは悪いな、と思いそのままコートを持って出ていこうとしましたがそこにいるのは藤野くんだと気づきました。……寝ている席が、シオリちゃんの席だということも。

私は藤野くんの想いに確信を得ました。

それはどうしてかと言われると困りますが、日常から彼の様子を見ていた私は今、彼が誰に想いを寄せているのかなんて薄々気づいていました。

それはとても辛くて悲しいことでした。でも、私が彼に先に告白して彼を手に入れようという気も起きませんでした。

私は他のみんなのように、たくさんたくさんお話しをすることなんてできません。こんなにもつまらない人間である私がこの気持ち伝えても、無駄だということはわかっていているから。

だから、毎日花瓶の花を取り替えて、ふとした瞬間に嬉しそうに花瓶を眺める彼を横目で見ていただけで幸せでした。

このまま帰るのはなんだか惜しい気がして、私は音を立てないように自分の席に座ると、読みかけの短編集を取り出して読み始めました。

前の席の人は寝ていて、後ろの席の人は本を読んでいる。きっと、この光景を見たひとがいたら不思議だったでしょう。

私は、この不思議な距離にどこか心地よさを覚えました。

藤野くんが起きたみたいで、話しかけてくれたときは少し驚きましたが、求められるがまま本を音読すると、嬉しがってくれました。二回目の音読が終わって、静かな空間が教室に蘇り、再び本を静かに読み始めると、かすれた切ない声で私に言いました。

その告白に私は心がどこか締め付けられるように、苦しい気持ちを覚えました。

シヨウくんが今もしおりちゃんを想っていること。私が宿泊研修のときに言った嘘を信じて、二人の想いがすれ違ってしまったことを知りました。

罪悪感とともに、悪魔の誘惑が私にささやきました。このまま、諦めさせてしまえば良い。そうしたら、誰にも彼を渡すことはない。このまま夢のような日々がおくれる、と。

きっと、私が一言言えば彼は諦めるとわかっていました。

その誘惑に流されるがまま、口を開こうとしましたがどういうわけか言葉が出てくることはありませんでした。

その代わりに気がつく、私は彼に言っていました。

「……いつ」

自分がそのとき、何を言ったのかすぐには理解できませんでした。身体が勝手に私の意志に反して行動しているような錯覚。……いや、違います。私の身体は、私が今したいことをしてくれました。

それに気づくと、ずっと心の中が軽くなりました。先ほどまであんなに私を誘っていた誘惑も、風に運ばれるようにどこか遠いところへ消えていきました。

あのまま誘惑に負けたら私は、卑怯な自分が許せなくて後悔する。藤野くんは、これから想い人の笑顔を見るたびに、気持ちを伝えなかったことを後悔する。

私の気持ちは伝わらなくても良いけど、そんな苦しそうな彼を見るのは嫌でした。結局自分のためでしたが、その結果私がどんなに後悔しても良いと想いました。

どちらも後悔だけど、後悔するなら幸せな藤野くんの笑顔を見て後悔したい。

私は藤野くんの手を引いて、学校を飛び出しました。彼女の家なら、私は知っている。数えるほどしか訪ねたことはないけど、道案内をすることはできます。幸い、彼女の家は学校から十数分歩いた距離にありました。

外は薄い雲がかかっている、星一つ見えませんでした。ポツリポツリと立つ蛍光灯の光だけが、道を照らし、私たちの行く道を示します。

吐いた息が白いぐらい、外の気温は低かったですが、そんなこと私は気になりませんでした。身体は外気に触れてみるうちに冷えていましたが、藤野くんの左手を握った右手の空間だけが別の世界に繋がっているんじゃないかと想うぐらい暖かさを持っていました。

「……」

そこは、どこにでもあるような住宅街にあるマンションの一つ。周りには同じようなマンションが建ち並んでいて、自分がどこにいるのかわからなくなりそうでした。

私は、藤野くんをチャイムの前へと促し、立ち去ろうとしました。「……少しだけ、いてもらえるか。勇気が、欲しい」

私は頷いて、近くの非常階段に隠れることにしました。

私が隠れたあと、彼は迷って、チャイムを押すか押さないか葛藤しているらしく、ようやく自分の意志でチャイムを押すまでかなりの時間を要しました。

私のいる位置からだ、藤野くんの姿は見えないから情報は音しか入ってきません。だけれども、己の心と葛藤する藤野くんがありありと頭に浮かんで少し、くすりとしました。

軽いチャイムの音が鳴ると、インターホンからしおりちゃんの声が聞こえてきました。

『はい』

「高田、藤野だけど。……ちょっと、良いか」

『え、藤野くんっ？ど……どうしたのっ？』

「とにかく、今、二人で話したい」

『え……あ、うん。わかった。ちょっと待ってて！』

バタバタと音が鳴り、数分経つとドアの開く音が聞こえました。

「お待たせ！用事ならケータイで連絡してくれば良かったのに、しなかったってことはあたし何か忘れ物でもした？」

「……とりあえず、場所移動しようか」

そう言つて、二人は行つてしまいました。非常階段から外を見ると、玄関前に二人の姿が見えました。

「これで、よかったんだよね」

声はどうしてか震えていて、外にいないはずなのに、雨が私の手の甲にポツリポツリと落ちていました。

そのとき、ふと、元からあった記憶を突然思い出したように、ある知識が頭の中に浮かびました。

「わたし……消える？」

私はこの日、私の運命を知った。

あたしは、藤野クンを忘れるために他の男の子と付き合うことにした。

藤野クンが、他の子と仲良くしているところをずっと待って、チャンスを伺うなんてできなかった。幸せそうな様子をみるたびにきつと、あたしの心は悲鳴を上げ涙を流す。買い物をしている光景だけを見てあんなに苦しくなるんだから、きつと耐えられないと思った。

だからあたしは、たまたま告白してきた男子の返事をオーケーしたのだ。

オーケーしたのが夏休みが終わる直前だったから、夏休み中はその男子とずっと一緒に遊んだ。デートでカラオケや映画、ゲームセンターだって行っただし、夏祭りで花火だって一緒に見た。初めてだって、やった。

あたしは、藤野くんと関わることをやめられなかった。彼はあまり気に入らないようだったが、ただ友達として接しているだけだと言いついていた。

そう、友達。

友達としてなら、ずっと彼のそばにいられる。告白して、フラれることもない。傷つくことも、疎遠になることもない。

だから、これで良いのだ。と、あたしはあたし自信に言い聞かせていた。

そう、これで……良いのだ。

そう思っていた。

カレシは穏和で、優しく、喧嘩もなく、順調といえば順調に進んでいた。少なくとも、あたしは今のカレシが嫌いではなかったし、恋人らしい行為をするのにも抵抗はなかった。

藤野くんがあたしの家に訪ねてきてくれたのは、今の彼と付き合っただいぶ経った冬の日だった。

「二人で話したい」

そう藤野くんに言われたとき、どうしてか胸が高鳴った。

止まっていた時計がある日いきなり動き出したかのように、あたしの心臓は鼓動を始めていた。

二人でマンションから出てすぐに、藤野くんはあたしに向かって言った。

「好きだ」

その頬は赤くて、照れくさそうで、もどかしい自分に苛立っているのがわかって、その言葉は本気なのだとすぐにわかった。

「返事は、いらない。知ってくれるだけで、良い。高田にカレシがいるのもわかってる。」

これは俺の一方的な行為だけど、これでგიჩანუქნაたりとかしたくない。我が俤なの、わかってる。でも、俺の気持ちを避けてたりしないでほしい」

あたしの身体がカツと熱くなったのがわかった。

……藤野クンが、あたしのことを……？

「で、でも……藤野クン、付き合っている人いるのに……」

「そんなの、いない」

その言葉に、あたしはホツとした。彼女がいるのに、あたしに告白してきたのではないという安心ではなかった。

だけれども、次の言葉であたしは凍り付くことになる。

「いない。入学してから、ずっと。夏になって、秋になって、冬になっても、ずっといない」

「え……」

「誰かが流した、嘘。だったんだ。そんなの」

「で……でも、宿泊研修が終わったあと、可愛い女の子と一緒にいたの見たよ……」

「それ、妹。ふにやふにやした長い髪の毛、滅茶苦茶高い声出すやつだろ？」

言い当てられ、本当に妹なんだと確信し、動揺してあたしは一歩下がった。

「そ……そんな」

「宿泊研修終わった日、久しぶりに妹の買い物に付き合わされたんだ。それを見たやつが勘違いしたんだろうな……。俺の耳に早く入っていれば、すぐにわかったはずなのに」

諦めるように藤野クンは苦笑した。

「勘違い、あったみたいだけど、今の俺の気持ちは変わらないから。……じゃあ、俺、帰るよ。風邪、引かないうちに家の中入れよ。」

——また、明日」

穏やかにそう笑って、藤野クンは帰って行ってしまった。

呆然と一人、取り残されたあたしは、先ほどの藤野クンとの会話を頭の中で繰り返し返していた。

ずっと、ずっと、藤野クンにはカノジヨがいなかった？

じゃあ、彼を諦めて諦めるために、他の人と付き合ったあたしは？
自問自答を繰り返し返して、ある思考にたどりついた。

——イユ。

地獄の業火で焼かれたマグマのように、その気持ちはふつつと沸き上がってきた。

あの子だ、あの子なんだ。あたしは、確信していた。

あたしは毎日毎日飽きもせずに、教師の花瓶の花を取り替える彼女を知っている。

これまであたしは、ただ真面目な彼女が花瓶が使われていないことを嘆いてやっているものだと思っていた。真面目なことをしている自分を人に知られるのが嫌だから、こっそりと隠すようにやっていたと思っていた。

だけど、それは違う。

あの子は、藤野クンが好きだったんだ。それも、最初に花瓶の花を取り替えたその日から。

彼女が嘘をついたのは宿泊研修の日。藤野クンが妹と出かけたのは、宿泊研修が終わったあと。

想いを密かに寄せていたイユにとって、藤野クンを狙う女は邪魔なだけだったのではないだろうか。だから、少しでも彼に虫が寄らないように嘘をついた。

そして、その話を聞かなかったらあたしはその日、街に出ることなんてなかった。現場を見て、勝手に失恋して、他の人と付き合うことなんてなかった。

あの子があたしの藤野クンを想う気持ちを知っていたとは思わな

い。だけれども、結果的にあたしと藤野くんはすれ違ってしまった。
——許せない。

心の奥底からそう思った。どす黒い感情が、あたしを支配していた。

友達だと、思っていたのに。

じゅう（後書き）

ドロドロ展開。

しおりちゃんは、素直で明るくて思いこみの激しい子なんです。

じゅうち

沖田の話聞いてから、シヨウは必死に喪失病について調べた。

ネットで調べ、精神医から喪失病について訪ね、そこからなんとか、喪失病になった人間を知っている人物の連絡先を突き止めて、話を聞く。会いにいける距離だったら、直接会いに行く。そのために学校を休むことなんて、しょっちゅうだった。

どうしたら記憶が戻るなんてわからなかった。ただ、がむしやりに情報を集めた。

沖田の話と、それらの話をまとめて俺はようやく喪失病というものの輪郭を掴んだような気がした。

まず、喪失病にかかった人間（消えた人間）は、自分が消える時期がわかる。それはある日いきなり、思い出すようにその知識が頭の中に沸き上がってくるのだという。

それから、関わり合いのない人間の意識から徐々にその存在が消え始める。関わり合いの深い人間だと、そういうことはない。

それに、どうしても自分が消えた後それを覚えている人間は、一人しか存在しないこともわかるという。

次に『一番親しい人物』は、消えてからでないとわからない。喪失病の人間が消えて初めて、記憶が自分にしかないことに気がつく。最後に、それ以外の人間は、まるきりその存在を感じ取れなくなる。写真に消えた人物が写っていたら、ただの風景画。もしくは、写真自体に気がつかない。他の人間が写っていた時は、写真を認識できるが人物は認識できない。

深く関わりのあったもの。……例えば消えた人物が作った作品などは、消えたばかりのときは誰も気がつかない。けれども、月日が経つとそれが認識できる。ただし「誰が作ったんだろうね」というふうになる。

消えた人物のことを思い出しそうになるきっかけを見つれたり、疑問を抱きそうになると、意識がはつきりとしなくなりいわゆる「ぼうつ」としてた」という状態になる。

「どうやら、記憶がない人間の「忘れる」というものには段階があるようだった。

最初は、消えた人物に関わりのあるものを見たり、考えたりすると、あたまの中がぼんやりとして考えることができなくなる。それから徐々に、時間が経って記憶自体があいまいになるせいか、「ぼんやり状態」だったとき思い出せなかった記憶を思い出せる。ただし、その頃にはごっそりと消えた人物の記憶はなくなっているが。

おおざっぱにまとめるところだが、細部のラインはあいまいで、聞くたびに覚えていることと覚えていないことが分かれていた。もちろん、共通して誰一人、消えた人物に関わる記憶が抜け落ちたり、モヤがかかったりして思い出せない。

ここまで調べ、いろいろな話を聞いてきてなお『一番親しい人物』以外の人間が消えた人物を思い出したという事例は一つとしてなかった。

ショウは、重い息を吐いた。

久しぶりに登校した学校ではいつもと変わらず授業が行っており、いつもと変わらない調子で教科担任が授業を進めていた。

窓を見てみると、大粒の雪が外の世界にいつぱいに広がっていた。景色なんてものは見えなくて、ただ激しく振る雪だけが景色という世界を支配していた。

今は、冬。それも、年が明けて、1月が過ぎて、2月になった。

授業がつまらなくて、ショウは黒松の桜柄の日記帳を取り出した。日記の角はボロボロで、ページはめくられ続けてすっかりくたびれていた。1日分を1日経つたびに読むと決めていたが、すでに読んだページは暇なとき、それこそ飽きるぐらい何回も何回も読んでいた。

そのページには、罪悪感を覚えながらショウの恋愛の背中を押

す黒松の姿が書かれていた。最後の方に自信の喪失病を自覚した旨が書かれてあった。

そして、それが書かれた次の日からの日記は、葛藤の毎日であった。

消えること自体に恐れは抱いてないようだったが、それから彼女は生きるということを誰よりも考えていた。

「生きること……」

ポツリと呟いたとき、いきなり視界が暗くなり、手に持っていた日記帳が突如手からなくなった。

「藤野くん。しょっちゅうおさぼりになっているのに、なかなか心の余裕があるんですね。先生は感心しますよ」

そこには、国語の教科担任。山田が立っていた。

山田は、頭の上が少し円形脱毛症気味の年輩の先生で、抜き打ちで漢字テストをすることで有名だった。

「あ……っ」

シヨウは山田に怒られたことよりも、取り上げられた日記帳の方が気になった。

「……すみませんでした。返して、もらえますか？」

素直に謝ったが、納得していない様子で山田は眉をひそめる。

「本心からの言葉には聞こえないが。……まあ、いい。ところでこれはなんだ？ 藤野、日記を書く趣味なんてあったのか」

山田がそう言うのと、ドツとクラスメイトが笑った。

そんなことはどうでも良い。日記を。

そう思い、奪われた日記帳を取り返そうとするがふい、と交わされる。山田の顔が、いやらしく笑みを作っていた。シヨウが自分の日記を奪われて、必死になっているのだろうと思ったのだろう。

「なんだなんだ？ 必死になって」

日記を手にとって山田は日記を音読し始めた。

「お前の字にしては丁寧だな……」私が死んでも世界は変わらない。私がいなくなっても、世界は変わらない。なら、私が消えても世界

は変わらない。消えても死んでも私は世界にとって、なんの意味もなさない』って、なんだこれ？ポエムか？」

またクラスからドツと笑いが生まれる。

そこは、シヨウがまだ読んでいないページだった。まだ知らない、彼女の言葉を知ってしまったことに悔しさを覚える。

いや……それよりも、彼女の日記が。彼女が、汚される。

頭の中が真っ赤になった。

「……………い……………ヨ……………ウ……………っ」

櫻井の声がどこか遠くから聞こえる。

だけど、聞き取れない。耳は音を拾うのに、音はシヨウの頭をすり抜けていってしまう。

なんだ？

そう思っ、耳を傾けようとすると、今度は先ほどよりはっきりと聞こえてきた。櫻井が、自分と呼んでいるようだった。

「……………おい、シヨウっ！」

どうしたのだろう。どうしてそんなに鬼気迫ったような声色なのだろうか。ぼんやり思っていると、弾かれるような衝撃が走った。

「おい、シヨウっ！！」

「あ……………」

はっ、と意識が戻ったとき、目の前にあるものがわからなかった。どういうわけか、自分の机が倒れている。何故か、山田が尻餅について、鼻血を出してシヨウを鬼でもみるかのような目で見つめている。どうして、シヨウはクラスメイト数人に取り押さえられているのだろうか。どうして、自分の左頬に痛みが走っているのだろうか。

わけがわからなくて、右手を見るとその手には血がにじんでいて、

じんじんと痛い。左手を見ると、桜柄の日記帳が握られていた。それを見たとき、ホッと安心して、目の前の光景を認識した。

「お……れ……」

目の前に、右手を振り下ろしたままの櫻井がいた。櫻井が、自分の頬を殴ったのだと理解した。

「お前……何、してるんだよ！」

櫻井の激昂が飛ぶ。信じられないものを見たような顔だった。

「俺……何を、していたんだ？」

足下からじわじわと恐怖が襲ってくる。シヨウは考えなくなかった。知りたくなかった。その先を。だが、櫻井は今にも泣きそうな表情で伝えた。

「お前、先生殴ったんだよ！それ、読まれたときお前、先生に襲いかかって、押し倒して殴りかかって……っ！」

その言葉でようやくシヨウは自分が何をしたのか自覚した。

「お前、どうしたんだよ！本当に、おかしい。おかしいぞ！なんで日記奪われたぐらいでそんな頭に血、上ってるんだよっ！」

櫻井は、すがりつくように櫻井にしがみつく。

「シヨウ……っ！」

「……ごめん」

押さえつけられていた身体の拘束が解かれ、シヨウは櫻井の肩に手を乗せた。

こんなにも心配をさせてしまったのかと思い、胸が痛かった。

幸い、なのかは不明だがシヨウは退学を免れた。

殴った理由に教師の落ち度もあったというのがもつとも大きい理由で、被害者の山田本人も素直にそれを認めたからだ。

その結果、シヨウは3日間の短期停学処分という形を受けることとなった。

学校から両親にその連絡が行き、専業主婦である母は泣きながら

シヨウを迎えに来た。とにかく「ご迷惑をおかけしました」と頭を下げて謝る母の姿を見て、涙が出そうになった。ただ、申し訳なかった。

家に帰り、連絡を受けた父が仕事を早めに切り上げて帰ってきた。帰って、顔を合わせた瞬間に殴られた。

「どうして殴ったんだ」

一通り、シヨウに対する怒りを口にし終えた父はソファに座って静かにそう聞いた。その隣に母が、悲しげな面差しで座っている。「……大事なものを、取られて、気がいたら目の前が真っ赤になった」

正直に、そう話した。

「自分でも、どうしてあんなことをしたのかわからない。ただ、取られた、って思った瞬間、自分が何をしているのかわからなくなっただ」

それを聞いて、父と母は悲しげに目を伏せた。なら、と今度口を開けたのは母だった。

「先生から、最近あなたをサボるということを知ったけれど……それは、今日のとは関係ないの？」

シヨウはすぐに返事ができなく、言葉を詰まらしてしまった。関係ある、といえば嘘じゃない。

それを肯定と受け止めたのか、両親は神妙な面差しで静かに詰問をする。

「何か、危ない遊びでもしているんじゃないか」

「……違う」

「なら、何だ」

シヨウはそれに答えられなかった。黒松のことを正直に話せば、両親はさらにシヨウを問題児扱いするだろう。信じてもらえるとは思っていないかった。

「違う……遊んだり、していない」

「なら、何をしているんだ。答えなさい」

強い口調でそう言われても、ただやっていないと繰り返すしかなかった。

話することができないこの状況がとても悔しく、唇を咬んだ。じわりと血の味がした。

「……あたし、知ってるよ」

高い声がかかった。

ドアから半分覗き込むようにして、妹の、みそのがそこには立っていた。

「みその……っ？」

みそのはゆつくりと歩いてきて、シヨウのすぐ隣に座った。

「お兄ちゃんね、心の病気の人の友達のために学校休んだり、殴ったりしちゃったの」

「おい……っ！」

どこまで知っているのかわからなくて、思わずシヨウは妹の言葉を止めようとしたがみそのは首を振ってシヨウの静止を無視した。

「お兄ちゃんが取られた大事なものは、その心の病気の人の日記。あたし、こっそり見たから知ってるもん」

まさか読んだのか。みそのが人のものを勝手に見たことに対して怒りが湧いたが、今は怒るタイミングではない。グツとシヨウは堪えた。

「だから、あんまり怒らないであげて。お兄ちゃんは、お兄ちゃんなりにその人のために行動してたの。それは、優しい、いつものお兄ちゃん……でしょ？」

その言葉に、喉の奥からこみ上げるものを感じた。

「そうなん……だな」

父が確かめるように、シヨウの顔を見た。シヨウは、無言で頷いた。

両親は納得したような顔をし、母は泣いた。でもそれは、学校へ

謝りに行ったときの涙とは全く異なるものだった。

細かいことは両親は聞かなかった。その優しさが、シヨウの胸を打った。

話が終わり、シヨウは先に自室に戻ったみそのの部屋の前に立っていた。軽くノックをして声をかけると、入って良いという声が聞こえたのでドアを開けて部屋の中へと入る。

入ると、みそのは自分のベッドの上に腰を下ろしてシヨウを出迎えた。女の子らしい、花柄と大量のものが置いてある部屋だった。部屋の片隅に置かれた電気ストーブが、赤く鈍い光を放っていた。

「みその……その、ありがとうな」

入るやいなや、シヨウはみそのの目を真っ直ぐ見てそう言った。

みそのは緩やかに微笑んで、自分の隣へとシヨウを誘った。その通りにシヨウは隣に座ると、弾力性のあるベッドがギシ、と音を立てて少しだけ沈む。

「……お前、本当に日記、読んだのか？」

それだけは知りたかった。もはやあの日記はシヨウにとって、自分の身体の一部に等しい存在でそれに他人が介入するのは心地がよいくない。

みそのはカラカラと笑って、身体を後ろに倒してベッドに寝転がった。

「あはは、読んでないよ。余程大事なものなんだね、お兄ちゃん」

その言葉に、シヨウは安心した。それが顔に出ていたようで、さらにみそのは笑う。

「でもね、お兄ちゃんがその日記の人のために頑張っていることは知ってるよ。妹だもん。顔は悪くないのに、どこか残念なお兄ちゃんのためなら、みそのさんは一肌でも二肌でも脱いじゃいますよー」

「……なんだ、その言い方」

どこか含みのある言葉に、シヨウは首を傾げた。

みそのはきょとんとして自分の兄を見つめると、突然腹を抱えて笑い出した。

「あつはははは……っ！何ソレ、ありえない？気づいてないし！最っ高！」

「……なんなんだ」

自分だけがわかっていないようで、どこか腹が立った。置いてけぼりにされた気分であつた。だが、みそのはそれを教える気はさらさらないので「秘密」。自分で気づけば？」と言つて取り合つてくれなかつた。

「とりあえず、こんなことまたしちゃ駄目だからね？次はもうあたしもお兄ちゃんをかばえないんだから。学校にも、しばらくはなるべく真面目に行くこと！反省してるってことをアピールしなきゃいけないからねっ！」

母のようなことを言い始めて、シヨウは苦笑した。

「わかつた。しばらくは言うとおりにする。……本当に、ありがとう」

いつもは憎たらしい、金で動くような妹だが、こんなときばかりはみそのの存在に救われた。素直にお礼を言うのも、今日は抵抗がなかつた。それほどまでに、みそのの行動に感謝していた。

感謝、というその言葉。当てはまる人間はもう一人いる。シヨウは、思い出した。

——櫻井。

謹慎が解けたら、真っ先に謝ろう。謝つて、お礼を言おう。先生にもだ。

そう心に決めて、シヨウは自分の部屋へと戻つた。

それから3日の謹慎期間の間。シヨウは大人しく家で勉強をしていた。

4日目の朝。謹慎が解けたシヨウは、朝早く起きて学校へと向かつた。真つ白い雪で覆われている街は、どこか神秘的で、本当に春になるとこの雪が全部消えてしまうのかと思つた。

メールで礼を直接言いたいという旨を事前に知らせてあるので、櫻井も早くに学校に来ているはずだ。まだ除雪されていない道を切

り開くように進みながら、考える。

学校に着くと、校内はとても寒くて身震いをした。手袋をはめていなかった手が赤くて、触れると痺れるように痛かった。

廊下は外よりは若干暖かったが、気休め程度で早足で教室へと向かう。

教室に行くときまだ誰もいなかった。教室には暖房がすでに入っているようで、暖かい。外は暗く、シヨウは教室の電気をつける。自分の席へと座って、鞆を降ろすとはらいきれなかった雪がボロボロと床に落ちて、徐々に溶けて水になっていくのがわかった。

教室の後ろを見てみると、棚の上に花瓶があつた。何も花が飾られていない花瓶で、ただ無機質な陶器が鈍く光に当たっていた。

2年生になって、生活委員ではなくなったシヨウだったが、シヨウは生活委員をやめなかった。それがどうしてなのか、シヨウには思い出せなかったが、黒松が花瓶の花を取り替え続けていたからだと思いたかった。花瓶に花をさす。ただ、それだけの関係がどこか心地よかったのではないかとシヨウは考えた。

「おー、久しぶりー」

そこまで考えると、櫻井が頭や肩に雪を大量に乗せてやってきた。歩きたびにそれが落ちて、床を濡らす。

緩くシヨウは微笑むと「久しぶり」とあいさつを返した。

「で、俺に例が言いたいってー？ 珍しすぎて、ホントにお前からのメールか疑ったぞ」

櫻井は自分の席。つまり、前の席に座り、白い歯を覗かせた。

「……ああ。礼を言う。ありがとう。あるとき、殴ってくれて助かった」

きつと、櫻井が一発シヨウに当てていなければ、シヨウは頭に血が上ったままさらに酷いことをしていただろう。櫻井が必死で叫んでいなかったら、シヨウは自分のしたことに気づくのがおくれただろう。

「殴られて礼を言うやつなんて、稀すぎてびっくりだわー」

おちよくるようにして、櫻井は笑った。でも、と櫻井は真剣な目をして言う。

「——でも、お前がそこまでになる理由ぐらいは教えて欲しい。あの、日記帳だ。あれは、一体なんなんだ？」

そこにあるのは、好奇心ではなかった。瞳の奥に映るのは、シヨウを心配する色。

「……お前、春から様子がどこかおかしい。授業態度は良くなかったけど、1年生までは授業をサボることもほとんどなかった。どこか上の空で、思い悩んでいるようで……。オレ、聞きたかったけどいずれお前が相談してくれるだろうと思って見守ることにしていたんだ」

黒松の行方を調べているとき、櫻井からの電話を思い出した。そのときから彼は、感づいていたんだ。でも、それをシヨウに強要することなくただ、見守り続けてくれた。

「……ありがとう。でも……櫻井、お前は信じてくれるか？俺の、言うことを」

心が壊れてしまった黒松このころのこと。この世に存在していたであろう、黒松イユのこと。存在を思い出させてあげたくて、一筋の光さえ見えないのがむしろにアガク、自分を。

「それは、聞いてみないとわかんないけどさー。そろそろ、友達として限界なんだよねー。納得はしなくても、お前の言い分は聞いてやらないと」

肯定はしていなかったが、了承と見てシヨウは語り出した。黒松このころがシヨウに会いにきたときのこと。その娘が残した日記のこと。喪失病という、病気のこと。

櫻井は無言でそれを聞いていた。その表情からはシヨウは何も察することが出来なかった。全てを聞き終えた櫻井は、両手を高く伸ばしてあくびをするように言う。

「ありえねー！」

「信じては、くれないんだな」

「いや、信じるにはいろいろ常識的じゃなさすぎて。漫画の登場人物みたいに『お前がそう言うなら、信じる』とか言えないっつー」

「そう……か」

友人に信じてもらえていないと思うと、酷く残念で言うんじゃないかったとさえ思えた。

「でもさー、お前がそこまでする理由はわかったから良いやー」

「は？」

理由ならさつき言った。それを信じないのに、わかったとはどういうことなのだ。

確か、妹の部屋でも似たようなことが起こったようなデジャブを感じて、シヨウは言葉の意味を考えるように難しい顔をした。

「みそのちゃんが爆笑するワケがわかったよ。こりゃ、駄目だ」

シヨウの反応を見て、呆れたような顔をした。

「気づかないのも良いけどさー。そういうのって、他人に口出しされてもなんも嬉しいことじゃないしー。去年もそうだったよな、お前」

「去年？去年、何かあったか？」

シヨウが思わせぶりなことを気にするよりも、去年、という言葉に反応した。

「まったまた。お前、意気奮闘してたろーが。オレ、だいぶ前から事情知ってたけど黙っていたのは悪いと思ってるんだぜー。なんせ、フェアじゃなかったからな」

「フェア？フェアって、何が？」

フェア。その言葉を聞いて、櫻井ははた、と止まった。思い出しそつで、思い出せないようなもどかしい表情をする。

「……なんか、砂を拾っているカンジ。拾おうとするのに、砂の中の大事なところはことごとく手から抜け落ちる」

自分でも納得できない様子で、櫻井は唇をかみしめた。

「わかんね。でも、あのときオレはそう思ってたんだよ。高田は、

フェアじゃない。それだけは覚えていた。だから、高田にカレシがいたってこともお前に言わなかった。お前に変な噂が流れているのも、前々から知っていた」

「……それって」

シヨウは覚えている。櫻井に詰問したあと、一人で教室に戻ってふてくされていたこと。そのあと、高田の家に行って、告白したこと。シヨウの記憶にあるのはそれだけだったけど、あの一連の出来事には黒松が関わっていた。フェアじゃない、というのは黒松に対してだろうか。

どうして櫻井がそんな行動に出ていたのか。はつきりとした理由はわからない。だけれども、櫻井は黒松を応援していたのでは、と考えた。

「……とにかくさ、お前自分のことに関しては面白いぐらい鈍いな。それだけ聞けば、オレとしては十分だよ。ちよつとだけ、羨ましいな」

櫻井は、顔を上げて天井を見上げた。本当に、羨ましそうな切ない顔だった。

「そのうち、わかる出来事がおきるさー」

「お前、また何か隠してるのか？」

「あつははは。ご明察ー。でも、これもオレは言っちゃ駄目だからさー。基本、口出ししないのがオレのポリシー」

視線だけ、シヨウに向けた。

「……その喪失病って、呪いみたいだな」

「呪い？」

「そう、呪い。喪失病にかかった人や、一番親しかった人への呪いじゃない。オレの……オレたち、人類の呪いみたいだ。オレたち自身、喪失病みたいだ」

「人類全てが、喪失病……？」

「だってさ、おかしくないー？喪失した人間の記憶がオレたちにはさっぱりない。お前の言っていた、黒松イユだって、オレもお前も

全くこれっぽっちも覚えていない。思い出せない。これって、ありえないだろ？目の前にその人に関係するものがあっても、オレたちは認識できない。わからない。喪失した人間や親しかった人間がおかしいって言うよりは、覚えていないオレたちの方がおかしいだろ？」

それに近い考えをショウは抱いたことがあった。それは、黒松の言葉が信じられなくて教師の人数を数えたあととき。

「…おかしいのは、あの人じゃない。俺たちの方なんだ」

そう、確かにショウはあのとこそう思った。

「だから、呪い。人間一人消えてもこれっぽっちも変わらない、この世界の呪いだよ」

「呪いっていうのも、現実味がねえな」

「はは、そうかも！。でもオレは、呪いの力でそうなったんだな！とか思えば、少しは信じる気にもなったりならなかったり」

「どっちだよ」

そこまで言って、お互いに笑い会った。それがショウにとっては、これ以上ないほど嬉しかった。信じてはくれなかったが、拒絶することも櫻井はなかった。

心の底から、櫻井と友達になれて良かったと、思った。

じゅうついち（後書き）

もしよろしければ、感想お待ちしております。

じゅっに

私は、自分が消えるということを無条件で受け入れていました。どうしてか、と言われるとわかりません。ただ、私がいずれ消えるということは、決定事項で覆すことの出来ない運命だと、わかっていました。

私の頭の中に浮かんだその知識。私が数ヶ月後に消える、ということ、一番絆の深い人しか私のことを覚えていないということ。それは私には選ぶことができなくて、わからないまま消えてしまうということ。

私は、今まで生きた人生を振り返りました。

友達はいなかったわけじゃないけど、これと言った親友のいない私。しおりちゃんや友達だけど、風のようにあちこちに行ってしまう。クラスではいつも置いてけぼりで、2組グループなんかに分けられると必ず一人余る私。たまにグループに入れられて会話をすると、みんな私に気を遣ってしまう。

他人と話すのがとても億劫で、機嫌を悪くすると何かされるんじゃないかと思つて、顔を伺つて、ずっとビクビクしていました。先生にも怒られるのが怖くて、勉強をしました。

高校を決めたときだって、たまたま自分の偏差値がこの学校に合っていたから。自分の意志で決め学校だけど、特に夢も目標もない私は、手頃な公立校だからと選びました。

きつと、これから私は周りに流されて、これといった目標がないままに毎日を過ごして社会人になって、面白みのない人生を送るのだと、ずっとそう思っていました。

それに、私はたまに思っていたのです。

私は死んでも、世界はこれっぽっちだって変わらない。

新聞で誰かが死んだ、ニュースで誰かが死んだ。ひいおじいちゃ

んや、ひいおばあちゃんが亡くなったときだって、世界は何一つ変わらなかった。ただ、消耗品のように人生が終わって、捨てられる私が死んでも世界は変わらない。私がいなくなっても、世界は変わらない。なら、私が消えても世界は変わらない。消えても死んでも私は世界にとつて、なんの意味もなさない。

人はただ死ぬだけ。そうなのだと、思いました。

死ぬのは怖くない。この人生に、意味なんてないんだから。

そう思うと、私は毎日がどうでも良くなり始めました。

授業を適当に聞いて、真っ直ぐに家に帰る。その様子に最初に気づいたのは母でした。父の帰りが遅いある日。ソファでだらしないテレビを見ていた私のとなりに、母が座って来ました。

「最近、元気ないみたいだけどどうしたの？」

むかしにはなかったシワを浮かばせ、心配そうに私に言いました。

「……別に、なんでもない」

「嘘が下手ねえ。なあに、お母さん聞けるなら聞くけど」

言っても、信じてくれないでしょう？

「本当に、なんでもないって言うてるでしょ……っ！」

そう言ったときにはもう遅かった。私は母に対して、怒鳴っていました。

母は驚いた様子で私の顔を見ていました。一瞬、泣きそうな顔をしたあと、その手がするりと伸びて、私の頭を撫でました。

その行動に驚いて、私は啞然としていまし。

「言いたくないなら、それで良い。でも、お母さんはいつもでイユの味方」

「……うん」

高校生にもなって、頭を撫でられるなんて恥ずかしかったけど、その心地よさに私は身を委ねました。

「ねえ、お母さん」

「なあに？」

「私が生まれたとき、どうだった？」

今まで聞いたことない、質問をしていた。

母は和やかに笑って、テレビの近くにある写真を持ってきた。それは、赤ちゃんの私と、今よりだいぶ若い父と母の姿だった。

「そりゃあ、嬉しかったわよ。あなた、生まれたときからちっちゃくてね。もう少して未熟児扱いだったんだから。でも、元気に生まれてきたわ」

懐かしそうに、目元をほころばせました。

「それで、1歳ぐらいになっていっぱい食べさせて太らせようとしてもあなた、全然食べないのよ。私がぬいぐるみであやして、油断した隙に口の中に一生懸命放り込んでもダーって出しちゃって。根気の戦いだったわ。

それなのに、食べ物以外は口に入れたがるのよ。あの頃はまだお父さん、タバコ吸っててねえ。小さいイユがお父さんのタバコを口に入れちゃって、死にかけた、なんてこともあったわね」

それは笑い事ではないように思えます。

「……嫌に、なったりしなかったの？」

「育児疲れって言葉があるくらいだから、嫌になったりもしたわよ」
「なら……」

「でも、それでも自分の子どもなんだから嫌でも嬉しいわ。同じ日はないと思うぐらい、一日一日が経つごとに、面白いぐらい成長するの。子どもって、不思議よね。そうやって成長して、最初は言葉さえ話せなかったのに今はこうして、考えて、歩いて、しゃべってる」

ふつと母は私の顔を覗き込んだ。

「お母さんは、イユのこと大好きよ。お父さんだって、そう。イユの笑顔が、大好きなんだから」

でも、お母さん。私、私は……消えちゃうんだよ。もしかしたら、お母さんの記憶にすら残らないかもしれないんだよ。

そう、言いたかった。でも、言えませんでした。

「イユがこれから、もっと成長して、素敵な人を見つけて、好きな

ことをして……そんな、当たり前だけど幸せに満ちた人生を送ってほしい。その手伝いができるんだもの、お母さん、嬉しいわ」

お母さん。それも、無理なんだよ。だって、私、いなくなっちゃうんだから。

「……お母さん、もしも、だよ。もしも、自分の死ぬ日がわかっていたら、どうする？」

聞かずにはいらなかった。

「しかも、ただ死ぬんじゃないくて、死んだら、この世から存在がなくなっちゃう。誰の記憶からも、自分の存在がなくなってしまうの。それがわかっていて、お母さんは今、自分が生きていたいって思える？」

「なあに、それ。また変なゲームでもやりだしたの？」

「いいから、答えてっ」

私の真面目な問いが伝わったのか、母はうーんと顎に手をやって考えると、ふわりと笑った。

「お母さん、よくわからないわ」

「えー」

そこまで思わせぶりなことをしておいてそれかい、という突っ込みがものすごくしたくなりました。

「ふふ、でも、そうねえ。お母さんは、どうするかなあ。まず、イユがちゃんと大学に行けるようにたくさんお金を借りておくかしら。そうしたら、請求書なんてものもなかったものになるじゃない？」

「現金な……」

「ああ、それと、お父さんとも離婚しないと。お父さん、知らない人と結婚している状態になっちゃうわよね。あ、爪切りはちゃんと見える場所に置いておかないとね。お父さん、すぐにどこにおいたか忘れちゃうから」

「おかあさん……」

あまりにも現実的な答えに拍子抜けしてしまった。みっともない声が出ました。

「それにそれに、美味しいものを一杯食べたいわよね。私名義のカードで払って。消えた頃には、はい、チャラー。なんて。んー、それとー……」

「もう……いい」

真面目に話した自分がバカらしくて、ソファーから立ち上がったとき、母が言った。

「それと、自分の大切な人が幸せになるところを見たいわよね」

「……消える前に、死のうとは思わないの？」

「どうして？ せっかく生きてるんだから、最後まで使わないともったいないわ」

「……そう」

私は、そう思わなかった。思えませんでした。

お母さんは、幸せな人生を送ってきたのだ。だから、そんなことが言えるんです。

一日が過ぎて、二日が過ぎて、私はどこか諦めて毎日を過ごしていました。

朝日が昇って、雪の世界を光が包み込む。昼は、日の光で地上が照らされる。夕方は、家に帰る人々の道を暖かく導く。夜は、瞬く星々が深い闇の中、それぞれに自己を主張しながらそれを眺める人間に感動と光を与える。

教室で自分の席に座りながら、ぼんやりと私は窓の外を見ていました。

いつでも見てる、どこでも見える。風景。

でも、その風景さえ見ることはいずれなくなる。

私の人生に、意味なんてあったのだろうか。

教室の暖房が入って、乾燥した空気が私の頬を撫でる。

「黒松、何してるんだ？」

「……何も、してない」

ドアが開いて、櫻井くんが入ってきました。どうやら長時間廊下にいたようで、身体自体が凍りなのではないかと思うぐらい冷気を発していました。

「ねえ、黒松」

櫻井くんは、自分の机——私の右前の机の上に座ると、私に問いた。

「黒松は、花瓶のことショウに言わないのか？」

「……言わない」

「どうして？」

心底不思議そうに櫻井くんは首を傾げました。私は櫻井くんが花瓶のことを知っていることはなんとなく予測していましたから、特に驚くことはありませんでした。

「ただの、私の自己満足だから。今更言ったって、藤野くんにとっては困るだけだよ」

「そうかなあー。それでもなんじゃないかー？」

「そうでもあるよ。だから、言わない」

「じゃあ、黒松が藤野のこと好きってコトも？」

「……………」

その言葉に、私は肯定も否定もできませんでした。

「このままで、いいのか？」

ゆっくりと、言い聞かせるように櫻井くんが言いました。

「……どうして、そんなこと言うの？」

「まあ、俺が言う義理も理由もないよなー。でもさあ、宿泊研修のときから変わらず一途なヤツって、見ていて応援したくなるじゃん。健気でさー」

「健気じゃないよ。……それだけで、幸せだっただけ」

「あいつが他のヤツと付き合っているのを見ても？」

本当に、私は答えることができませんでした。胸の奥がチクチクと痛い。心臓がまるごと鉛のようになったかのように、気持ちに押

しつぷされそうになります。

「……まあ、それも良いかもね。もう少しいると、あいつここに来るから、相手でもしてやってくれ」

そう言つて、飄々と笑つて櫻井くんは教室から出ていってしまいました。再び、誰もいない空間に私一人が取り残されました。

どうして良いかわからず、おろおろしていると先ほど櫻井くんが言つた通り藤野くんが教室にやってきました。

「あ」

彼にとつては意外だったようで、短く驚いたようにその場に固まっていた。開きっぱなしのドアから廊下の冷気が流れてきて、教室の温度をどんどん下げて行きます。

「……櫻井、来なかったか？一緒に帰ろうつて言われて教室で待つてる、なんて言つてただけだ」

「……帰っちゃった」

短くそう言つて、会話終了。

入学式の際のデジャブを思い出しながら、何を話して良いか私は全くわかりませんでした。ただ、視線を泳がせて彼が何か言うか行動を起こすかを待っていました。

しかし、いつこうに藤野くんは教室を出る気配はありません。ドアを閉めて、自分の席に座ると、突っ伏して一言言いました。

「……読んで、くれるか？」

彼が何のことを言っているのかはすぐにわかりました。

だから私は鞆にあった手頃な一冊を手にとって教室で音読をしました。

どうして彼は突然そんなことを言い出したのでしょうか。

藤野くんは、自分の席で突っ伏しながらそれを聞いていました。だから顔は、見えない。

藤野くんと初めて過ごしたあの日みたいに、心地の良い空間が生

まれました。私の音読は下手なのはわかっていましたが、読んでいるととても心地がよい。妙に、リラックスしている自分を覚えめました。

彼も、そう思ってくれているのでしょうか。

一つ読み終わって、私は音読を止めました。私はそのまま黙読していましたが、時間が経ってまた藤野くんが「読んで」と声をかけました。言われたとおり、私は手頃な話を読み始めました。

読んでいる中、私は考えていました。

私が消えたら、この時間もなかったことになる。この、どこか居心地の良い彼との距離感も彼の記憶から、世界からなくなってしまう。それなら、今ここで消えても良いじゃないだろうか。窓から飛び降りて、頭から落ちる。それだけで、私のことをみんなが覚えてくれている。誰も忘れることはなく、記憶に残る。

隣の席にいる、藤野くんをちらりと見ました。

もし、このまま飛び降りたらきつと彼の記憶には残る。突然自殺した、クラスメイトとして彼の記憶の中に私は一生残るであろうと考えました。

このまま、窓に行って飛び降りようか。飛び降りるのは、怖くはありませんでした。だって、死ぬことはわかっていているのだから。

私は、短い小説を音読し終わると、静かに席を立ちました。藤野くんは、気づかない。

夕方なのに、もうすでに暗い外が映る窓に向かって歩きました。

見下ろすと、下校する生徒たちが見える。元気そうに、楽しそうに、笑い合っていました。

その笑顔を、壊してやろうか。そう、思いました。

ここで私が飛び降りて、その楽しくて平和な人生を少しでも汚してやろうか。窓を開けると、冷たい風が入ってきて濁った教室の空気がなくなりました。

手をかけて、足を窓枠に寄せようとしたときでした。

「黒松」

私は首だけ彼の方向を向けると、突っ伏したまま藤野くんは私に語りかけてきました。

「この間は、ありがとう」

一つ一つ、気持ちを込めるように彼は言いました。

「すごく、すごく、感謝している。本当に、ありがとう。黒松」

ただの、平凡なその言葉がどういいうわけか私の心を揺さぶりました。

「黒松がいてくれて、あのとき黒松が聞いてくれて、良かった」

どうしてか、私の瞳からは涙が溢れていました。身を乗り出している私の頬から零れた滴は、顎を伝って私の胸元へと落ちていきました。

『いてくれて、良かった』それだけの言葉が、嬉しかった。どうしようもないぐらい、嬉しかった。

世界がまるでキラキラと、星々の瞬きのように光が満ちているように感じました。

「藤野くん」

震える声を必死で抑えながら、私は彼に語りかけました。

「どう………いたしまして」

私は本当に藤野くんが好きなんだと。彼にお礼を言われたぐらいで涙が出るほど嬉しくなる私は、どうしようもないぐらい彼のことが好きなんだと思いました。

このままで、終わりたくない。

初めて、そんな感情を抱きました。

この気持ち、少しだけ伝えても良いだろうか。

「藤野、くん」

かすれるような声が出ました。

「……なに？」

未だ彼は突っ伏したまま、私に答えます。真っ直ぐで癖のない髪が、彼が身動きするとさりと崩れました。

好きです。

そう言おうと、口を開こうとしたけど、自分の喉からは空気の振動する音が消こえてヒューという音しか出ませんでした。

勇気が、出ない。私は自分が、自分自身がとても焦れたくて、そんな自分に苛つくのに、身がすくんで動けなくて、どうしようもありませんでした。

——告白というものは、これほどまで怖いものなの？

恥ずかしさと、言ったあと、嫌われるのではないかという恐ろしさ、私が私を支配しました。

身がすくんで、勇気が出ない。

これまで一度たりとも、この気持ちを伝えようと思わなかったツケなのでしょうか。私は、言葉の続きを言うことが出来ませんでした。

「……ううん、少しでも力になったのなら良かったって思っただけ」
せめて、私は思いました。

せめて、この気持ちを彼に伝えるまで、私は生きていたい。

藤野くんとは、それからたまに本を読んであげるようになりました。

はたから見ていると、それは不思議な光景だったかもしれませんが、それでも、私は幸せでした。幸せであるとともに、もどかしい日々でした。

本が読み終わるまでに、告白のイメージトレーニングをして、勇気を振り絞ろうとするけれど、毎回うまく行きません。

藤野くんはいつも机に突っ伏していたので、そんな私の変化に気づくことはありませんでした。……それに、ときどき読んでいる途中で寝入っていましたし。

『明日はバレンタインデーです』

2月の10日の朝、ニュースでそんなことを言っていました。

「あら、もうそんな季節？お父さんにチョコレート贈らないとね、イユ」

リビングでお菓子をつまんでいた母がそう言いました。

バレンタインデー。それは、女の子が男の子に愛を伝える日。

「これだ……っ！」

私は思いつきました。口で直接言えないなら、間接的に伝えればよい。そちらの方がはるかに、恥ずかしさも勇気も必要ない。

私は急いで近所のスーパーへ出かけ、『バレンタインコーナー』なるところで材料とラッピングの袋を買いそろえました。ただたんにチョコレートだとなんか作った気がしないので、チョコレートのクッキーにしました。ラッピングは、タンポポの絵がプリントされた袋。もはやタンポポは、私と彼を繋ぐ唯一のキーアイテムのように私は思っていました。

面白そうに私がクッキーを作るところを覗く母を追い出し、慣れない作業をどうにかこなして、クッキーを焼きました。

「あれ……？」

焼き上がったクッキーは……なんというか、独特の形をしていました。ロッキー山脈のように、あちこちが割れてぼこぼこしていたのです。手作りだと不格好になると聞いていたので、こういうものなのだろうと、さほど気にせず出来上がったばかりのクッキーをタンポポ袋に入れました。

「そうだ、手紙を入れよう」

私はレターセットとペンを持ってきて、紙の前に立ちました。

「どうしよう……」

まず、文面が出てこない。ストレートに好きでした、と伝えれば良いのかもわかりませんでした。

ふと、櫻井くんに言われたことを思い出しました。

『黒松は、花瓶のことショウに言わないのか？』

今更だけど、言っても良いのでしょうか。私は迷いました。迷って、迷い続けてようやく決心をして書くことに決めました。

けれども、今度は筆が動かない。自分の肉質を残すのはとても恥ずかしく思えました。

「うううーん……」

「何うなってるのよ。それよりも、新聞縛ってちょうだい」

夕飯を作っていた母に言われ、いったん作業を中断して山積みになった新聞紙を古新聞として出すためにビニール紐で縛っていました。

その間も私はずっと考えます。

こういうのは、たいてい肉質と決まっている。だけれども、どうにもこうにも恥ずかしい。なら、他に代用できるものは……。

目の前の、新聞の山が視界に入りました。

「……これだ！」

思いつき、私は早速作業に取りかかりました。

伝えたい言葉の字を、一つ一つ新聞から探す。軽い気持ちで始めたのは良かったのですが、意外にこれ、ものすごく根気のいる作業です。細かい文字を舐めるように見回して、一生懸命探し、あったら切り取る。

母がいぶしげな顔をしていましたが、笑ってごまかして作業を続けます。

『いつかははなわをありがとう。ずっと好きでした』

これだけの文書を作るのに、ものすごく時間と神経が削られるような思いをしました。

私は完成を見て、満足げに微笑むと手紙を袋に添えて、そっと鞆の中に入れました。

次の日、私はいつも通り朝早く学校へ行くと、一度あたりを確認してから藤野さんの靴箱の中にそれを入れました。

「……よし」

満足げに頷きました。彼はすぐにこの手紙を見ないかもしれないけれども、確実に次の日には私の気持ちは彼に届いている。少し嬉しくなって、スキップをしながら私は教室へと向かいました。

贈ったクッキーが砂糖と塩を間違えて作ってしまったことに気づいたのは、その日の夜。

その手紙に、差出人の名前を書くのを忘れたのもその日の夜。

私のバレンタイン計画は、二重に失敗しました。

気持ちを伝えることに失敗して、別れの日、刻一刻と迫ってきていました。

そして私はその日、自分の日記帳を落としたことに、気がつきま

せんでした。

じゅうに(後書き)

甘酸っぱい目指して。

不器用な、恋する女の子目指して。

じゅっさん

藤野クンの告白を聞いてから、カレシに何を言われても、何をされても、寝ても覚めても考えるのは藤野クンのことばかりだった。

あたしは、離れていったはずの藤野クンへの気持ちが生るのを感じていた。

藤野クンは、告白してくれた翌日から普通だった。いつも通り、あたしに接していた。

あたしにとっては、そのいつも通りさえ苦しむ要因だった。

どうせなら、気まずい顔をしてくれれば良いのに。そうしたら、良かったのに。

苦しくて仕方がないとき、バレンタインデーが来た。

あたしは、彼にバレンタインプレゼントを贈ることにした。でも、チョコレートだと作った気がないのでチョコレートクッキーにする。

あたしにはカレシがいる。カレシがいるのに、こんなことをするのは浮気意外何者でもない。だから、差出人は書かなかった。

まだ寒い冬の道を、朝早くあたしは歩いた。滑り止めが巻かれている道路は黒く泥のように雪と入り交じり濁っていて、お世辞にも綺麗とは言いがたかった。

通り慣れた道を通り、学校へと行った。藤野クンの靴箱を探し、見つけて開けてみると、先客がいた。

タンポポの袋のクッキー。

ひっそりと、藤野くんの靴によりそうようにそれは置かれていた。それが誰からなのか、あたしは人目でわかった。イユ、からだ。あたしのイユに対する憎しみが湧いた。この期に及んで、またあたしと彼の仲を邪魔するようなことを。

あたしの頭の中は矛盾した考えていっぱいだったけど、そんなこ

とはあたしは気がつかない。ただ、イユが許せなかった。

かさり、と音が鳴った。あたしの手には、イユのクッキーが握られていた。クッキーの形は不格好で、こんなものを人に贈るなんて信じられないと思った。

あたしは近くにあったゴミ箱にそれを捨てる。それがまるで汚れているもののように、あたしは扱う。ゴミ箱はぎゅうぎゅうだったらしく、少しだけ袋の先端がはみ出ているのが見えた。それをさらに押し込むと、クッキーの割れる感触が指に伝わってきた。

あたしは冷酷にゴミ箱を一瞥して、彼の靴箱に自分のクッキーを入れた。ピンクの華やかなリボンが、靴箱全体を華やかな雰囲気にしたように思えて、口元から笑みがこぼれ落ちた。

上機嫌であたしはその場をあとにし、いつも通りの学校生活を送った。

藤野クンをちらりと見ると、どこか具合の悪そうな顔をしていた。体調が悪いのかと、心配になった。もしかしたら、今日中には食べてもらえないかもしれない。

そしてクッキーを贈り、藤野クンへの気持ちをより一層強くしたあたしは、日に日にカレシへの扱いがぞんざいになっていくのを感じていた。

「……別れよう」

3月も終わりに近づいた春休みの日。カレシとデートしていたあたしは、喫茶店で料理を食べ終えたあとにそう言った。

カレシは、自分に落ち度があったのか、何か悪いところがあったなら直すと言ってくれた。その気持ちはとても嬉しかったけど、あたしは静かに首を横に振った。

「ごめん。好きな人、できたの」

彼は納得してくれた。優しい人だった。

それから春休みが明け、新しい季節が巡ってきた。クラス替えも

行われていて、見知った顔は全員また同じクラスだということを知った。

内装は変わらないけど、違う教室に腰を下ろしてあたしたちは話をしていた。教室内はまだ何も飾られていなくて、殺風景だ。これからどんどんと、クラスの目標だったり誰かの作品だったり、スケジュールなどが貼られ、書かれていくのだろう。誰かが持ってきたのだろう。あの地味な花瓶だけは変わらず教室に置いてあり、花がさしてあった。冬の間は造花だったけど、少し経つとそこには茎の長いタンポポモドキが飾られるようになっていた。どうしてか、この空間だけがポツと火に灯されたように暖かさを感じた。

それがイユの例えようもない暖かい気持ちなのだと思います、あたしは決心をした。

——言おう、この気持ちを。

あたしは藤野クンを放課後、話があると言って教室に残るように伝えた。

「好き。あたし、藤野くんのこと、ずっと好きだった」

自分の気持ちを伝えることに、迷いはなかった。

藤野クンは、一瞬目を見開いて口元を抑えた。顔が、赤い。

「……あの頃はまだ他の人と付き合っていて、バレンタインデーのプレゼントはあんな形でしかあげられなかった」

あたしは、正直に告白した。そのときにはもう、いいや、その前からずっと彼のことが好きなんだと。

「じゃあ、花瓶の子は、お前……だったんだな」

「え……？」

その言葉の意味が、わからなくてあたしは黙ってしまった。その沈黙が肯定と思ったのか、藤野クンは嬉しそうに顔をほころばせた。「そう、だったんだな……」

すごく、すごく、嬉しそうだった。花瓶の花を取り替えていたの

はイユだった。でも、あたしは事実を言わなかった。

「……そうだよ。ずっとずっと、気づいて欲しくて花瓶の花を取り替えていた」

あたしは、嘘をついた。

俺は、その日がバレンタインデーだとは知らなかった。

「あれ？」

朝、学校へ登校して靴箱を開けるとそこには可愛らしい袋に包まれたチョコが入っていた。

「ああ、バレンタインデーか」

少しだけ周りを気にして、添付されてあった手紙に目を通した。

手紙には差出人が書いてあったが、それが期待していた人物ではないと知ってがっくりと肩を落とした。

「そうだよな、そんなわけないよな」

彼女にはいまだ付き合っている人がいる。一瞬でも期待してしまったので、それが裏切られた時の落ち込みと言ったら、言葉に出来ないぐらいだった。

「って……ん？」

中靴を取り出して、右足を入れたとき、何かが足の裏にあたるような感触がした。パキッ、とそれは崩れたような音がした。

「なんだ？」

驚いて、靴の中を見ると何かが詰まっていた。取り出すと、タンポポの袋と、添付されたカードを見つけた。中に入っていたクッキーのようなものは、元の原型をなしているものは一つとしてなかった。先ほど踏んでしまったせいだろう。

カードを取り出すと、典型的な誘拐犯がするように新聞紙を切り抜いた文章が綴られてあった。中身は『いつかは花輪をありがとう。ずっとまえから好きでした』という内容だったが、どうして脅迫状の形なのだろうと首をひねる。これは、イタズラだろうか。

真偽を確かめようと、じっと見つめていると袋がタンポポ柄なのと、文章の内容が気になった。

……もしかして。

教室にある、毎日が取り替えられている花瓶を思い出した。

花輪の話を知っているのは、自分と花瓶の子しかないはずだ。だから、これは間違いなくその子からの手紙。

いつからかの返事を、今もらったという喜びを感じた。どきり、と心臓が鼓動を打った気がした。

「あ……れ」

いつの間にか、高田からチョコレートをもらえなかったという気持ちよりも、花瓶の子からのメッセージが届いたことに喜んでいる自分を自覚した。そして、教室で静かに本を音読してくれる彼女を、思い出していた。

確かに、ここ最近教室で黒松と一緒にいる時間は増えた。

だけれども、それはほとんど会話なんてすることはない空間。居心地が良いとは感じていたが、それ以上ではないはずなのに。

「なんで、黒松が出てくるんだ」

想いをふりきるように、舌打ちをして俺は半ばヤケになって花瓶の子からもらったクッキーを一気に口に放り込んだ。

カリッと、音が鳴って咀嚼していると、突然の塩気が口いっぱいに広がった。

「——っ！！」

まるで、塩の塊を食べているようだった。俺は涙目になって、水道へと向かう。途中、教師に注意を受けたがそんなものはかまっていられなかった。

はき出さなかったのは、我ながら感心した。

水でとにかくその塩の塊クッキーを腹に押し込み、がぶがぶと飲む。水はまだ冷たくて、唇が冷たさで感覚がなくなっていたが、構わず水を飲み続ける。

ようやく口の中が落ち着いて、深い息を吐いた。塩キャラメルとか、塩ソフトとか流行っているのは知っていたが、ここまで塩の分量を多くするのは間違っている。

本格的にこれはイタズラなのだろうと思った。普通、塩塊クッキーをバレンタインに他人に渡さない。

「いや、しかし……花輪のことを書いてあったし……」
脅迫形式だったか。

もしかして、これは差し出した本人にとっては大まじめなことだったのだろうか。

「藤野くん、おっはよー。おいおいおい、どうしたんだよ。女子からチョコレートでももらって、嬉しさのあまり口いっぱいに頬張ったけど喉に詰まって洗い流してたのか？」

ニヤニヤと笑みを浮かべて櫻井がやってきた。

「違うし。ラブレターだと思ったら脅迫形式で、心のこもったクッキーだと思っていたら塩の塊で、飲み込んでたんだよ」

「あらら。そうきたかー。これなら、あのままにしておいても良かった……のかなー」

「は？」

「いやいや、こつちの話。とりあえず、もらえて良かったじゃん。

よ、このモテ男ー」

何を言っているのかわらなかったが、肘で小突いてにやける櫻井がとにかく目障りだった。

「そういうお前はもらったのか？」

「もらったけど、みんな義理さー」

にわかには本当に信じられなかったが、そう言うのだからそうなのだろうと無理矢理自分を納得させた。

「そつえばさー、最近、黒松と仲が良いみたいだけど。……高田

はもういいの？」

「……なっ！」

何故それを。おちよくられているのはわかっていたが、どうして俺は動揺してしまった。

「お……お前には、関係ないだろ。第一、黒松とは何もない」

「それが大いに関係ありありなんだけどな」

「はあ？」

「いやいや、見守る者としては気になるもので」

「何の話だっ！」

「——お前は、高田のことが好きか？」

え、と櫻井を見ると、先ほどのニヤけた笑みは消え、真剣な瞳で問いている櫻井がいた。

「……告白したぐらいなんだから、好きだろうな」

俺は告白したことを櫻井に伝えてはいなかったが、どういう情報ルートか。櫻井は知っていた。

「ふうん。まあ、高田の方が楽しいもんな」

「さつきから何が言いたいんだ。お前は」

底知らぬ顔で櫻井は唇を尖らせた。

「いやいや。ひいき目になっている人物が報われないと、あまりにも可哀想で」

「はあ？」

「いやいやいや、いいんだよ。それは君の勝手さ。でもね、それによつて傷つく人がいることを君はもっと知るべきだ」

「なんか口調いつもと違うんだが」

つついっつい突っ込みを入れると「黙りたまえ」と怒られた。どことなく理不尽さを感じるのは俺の気のせいだろうか。

「とにかくさ、その鈍さなんとかしてもらいたいんだけど」

「鈍いって……」

その言葉の意味はわかるが、実感が全くなかった。

櫻井は苛立ったように俺の頭をバシバシ叩くと、教室へ行くように誘導した。

「……全く、不器用な子って応援したくなるよなー」

櫻井のその言い方は呆れたような口調だったが、どこか悲しそうな表情もしていた。

じゅっさん（後書き）

かなりの暴露話ですけど…イユちゃんの告白しようんぬん、とか脅迫状まがいのラブレターとか、実は私の経験が元ネタです。

ケーキ作りして砂糖と間違って塩を入れてしまったこともありました（さすがに焼き上がったときに気づきましたが）。

あの頃は若かった…（遠い目）

じゅっよん

バレインタイン計画が失敗した私は、ものすごく落ち込みました。これじゃあ、ただのイタズラだよ……。

ガックリ頂垂れました。どうして私はどこかズレているのでしょうか。

「黒松、これ、お前のだろ」

「……あ、うん」

なくした日記帳は後日、無事に私の手元に届けられました。届けてくれたのは櫻井くんで、廊下に落ちていたのを拾ったそうです。日記の裏表紙に私の名前を書いていたのが幸いしたようです。

私は日記を持ち運んではいますが、鞆に入りっぱなしでいつの間にか開いていた鞆から落ちたのだろうなと考えていました。

「ねえ、黒松ー。もし、オレがコレ読んだって言ったら怒る？」

「読んだの？」

櫻井くんの表情はうかがい知れない。消える消えないとかこんな内容の意味不明な私の日記を見て信じる人はまずいないとは思いますが、プライバシーの侵害と見た人のモラルを伺ってしまいます。

「……いや。ただ、どう思うのかわかって」

「まあ……その、あれが私の日々思っていることだよ。としか……」
「ふうん」

「それに、見たところで何も変わらないよ」
消える運命は、何も。

それを聞いた櫻井くんは、くると私に背中を向けて「渡したからじゃねー」と言っただけで去ってしまいました。

「……一体、なに？」

なんだか置いてけぼりにされたような気分になって、私はその背中をポカンとしながら見つめていました。

そうこうしているうちに、私が消える日は刻一刻と迫ってきていました。

最初は『春ぐらいかな』というぼんやりとした感じだったが、月日が経つに連れて『春の、この日ぐらい』になっていくのがわかりました。恐らく、その日が近くなるとより正確に私は消える時間帯を知ることができる。

——私が死んでも、世界は変わらない。

今でもそう思います。

けれども、藤野くんが『いてくれて、良かった』と言ってくれたとき、私はそれ以外の思いを見つけたような気がしました。

私が死んでも、世界は変わらないけど、人の記憶には残る。

私の生きた1秒1秒が、この世界には確かに刻まれるのだと。

世界は変わらないけど、この世界には確かに存在していたのだとでも、私が消えたら人々の記憶には残らない。

「あれ、黒松さんいたの」

ある日の掃除中、クラスの子が私に向かってそう言いました。私は最初からそこで掃除をしていて、他の子とも話していたはずなのに、どういうわけかそう言われました。

その言葉を聞いて、私は私の運命を再認識しました。

私は自然と受け入れていた『喪失』という名の運命が恐ろしくなりました。

たぶん、私にそう言った子は決してわざとではない。日に日に私の存在がみんなから薄れていくことを表しているのだと、私は悟りました。

喪失してしまったら、消えてしまったら、人々の記憶にすら残らない。記憶に残らない、ということは世界の存在が消えてしまうのと同じ。

人は、誰かに認識されて初めてそこに存在できるのではないだろうか。それなら、ただ一人しか覚えてもらえないことしかできない私は、本当にそこにいたと言えるのでしょうか。

なら、『掃除当番のときにいた黒松イユ』はあの子の世界の中ではいなかったと同じではないでしょうか。

その恐怖は、影のように私の足下をひっそりについて回り、そのうち私を食らうのだと思いました。

だから、その前に消えてしまおうか。

再び、私はそう考えました。

ナイフでも、なんでも、それで喉をかついたり、飛び降りたりしたら、きつとみんなの記憶に残る。

どんな悪い最後でも良い。思い出しに、記憶に残るのなら、どんな惨めな最後でもかまわないと、そう思えました。

きつと、気持ちを伝えることができたのなら……藤野くんにはものすごく悪いことをしたなあ、と思ってしまうかな。

でも、彼の記憶には残るんだ。

そう思うと、私はとても嬉しいです。

「そう、死ねば良いんだ。消えるその瞬間に、死ぬ。それで、誰の記憶にも残る。人々に、私がいたってことを証明できる」

この運命から逃れられないのなら、せめて多くの人々に私の存在を植え付けよう。

長い冬が過ぎ、再び春が巡ってきました。

桜の開花はまだみたいで、桜の木が太く大きな蕾を今か今かと花咲く時を待っています。少しだけ身を切るような冷たさを含めた風が、吹き荒れて道行く人の体温を下げています。

ほとんど溶けた雪の上を可愛らしい一年生が真新しい制服を着て、

楽しそうに歩いています。今は、4月の後半。

私は、新しい教室の窓から外を眺めていました。

「……とうとう、明日で最後の日か」

私が消えるまで、あと一日、という日になりました

私はとうとう、想いを彼には告げられませんでした。

これで、良かったかもしれない。そう思い、ました。

私は、明日、消えるその瞬間に自殺をする。そのために、睡眠薬を手に入れ、飛び降りるための高いビルも見つけてきました。

それだけで、私はこの世からは消えない。ただの自殺をした人間になる。

「……くだらない、人生だったなあ」

何の特別でもない、人生。それが終わると思うと、少しだけ寂しいような気もしました。

「でも、決まっているんだから仕方がないよね」

空を見上げると、青い。快晴、ではなかったけれど澄んでいる青い空でした。雀やカラスが気持ちよさそうに、大空を駆けめぐっています。

教室の後ろを見ると、そこには私が去年一年間花を取り替え続けていた花瓶が置いてありました。誰が持ってきたのはわかりませんでした。私は持つてきてくれた誰かに感謝しました。これでまた、花を生けることが出来る。

そうだ、明日飾る花はタンポポモドキにしよう。私は思いました。今の季節なら、もう生えているのがあるはずだから。

いつも通りの何事もない一日を、味わうように過ごす。

教室にいるみんなにとっては、いつもと変わらない、くだらない日常の一つだけれども、私にとっては二度と来ることのない、くだらない日常でした。

「あ、黒松まだいたんだ」

「あ……うん」

放課後、多くのクラスメイトが帰宅や部活へ向かう中、告白をしようとは機会をうかがってたらだと教室に居残っていました。今日、藤野くんは先生に放課後用事を言い渡されていたのは知っていました。だから私は彼が来るまで教室に残っていました。

「帰らないのか？」

藤野くんが不思議そうに私の顔を覗き込みます。

「あ……その……」

言わなきゃ。

でも私の視線は床に向いていて、足は震えていて、口を開こうにもくぐもった音しか聞こえてこない。

——こんなチャンス、もうないのに……っ！

なのに、声が出ない。身体が動かない。私の身体はまるで金縛りに合ったかのように、動きません。

「わ……たし、藤野くん……に」

今言わないと、後悔する。わかっている。

未だ、私の言葉の続きを待つて藤野くんが私を見つめています。

「わたし……っ！」

勇気を、出して。

そのとき、私は彼に何を求めているのわからなくなりました。

告白するのはそう、この気持ちを伝えないと後悔するって思ったから。

でも、告白しても人生を後悔してないって言える？

たかが、告白をしたぐらいで私の人生は一言で素晴らしいと言えるものになるの？

「……なんでもない。ばいばい」

そう思うと、この行為には意味なんてないんじゃないかと思ってしまったのです。

気がついたら私は、鞆を手にとって教室から出ていっていました。……どうせ、後悔するなら一緒に……ね」

ポケットに入った瓶を見つめました。その中の白い錠剤。私は明日、これを飲んで、窓から飛び降りる。そのシナリオは変わらない。それがすぐか、最後までギリギリかになっただけ。

「……運命は、変わらないんだから」

そう呟いて、教室を跡にしようとしたとき、さきほど出たばかりの教室からガラリと音が聞こえました。

藤野くんが出てきたのかと思って、振り返りましたが廊下には誰もいない。

——そういえば。

まだ、シオリちゃんの席にある鞆はなくなっていなかった。

「まさ……か」

嫌な予感がして、すぐにでもその場を離れようとしたが、足が動かない。逆に、怖る怖る教室のドアのすぐ近くに気がついたら私はいて、聞き耳を立てていました。

どこの誰でもするような雑談のあと、突然二人の会話の音がぱったりと止まりました。

そして、低く息を吸ったような音が聞こえて――。

『好き。あたし、藤野くんのこと、ずっと好きだった』

ヒヤリと、背筋が寒くなるような悪寒。心が止まってしまうかと思っぐらいの、衝撃でした。

声はまだ続きます。

『……あの頃はまだ他の人と付き合っていて、バレンタインデーのプレゼントはあんな形でしかあげられなかった』

『じゃあ、花瓶の子は、お前……だったんだな』

『え……？』

『そつ、だったんだな……』

『……そうだよ。ずっとずっと、気づいて欲しくて花瓶の花を取り

替えていた』

「——っ！！」

私に流れる時が止まったかのように、私の身体は、心は、停止しました。

そんな、だって、花瓶の花を取り替えていたのは私なのに。

悔しさ嫉妬憎悪悲しみ、すべてを全てが混じらないまま、ごちゃごちゃになってしまったような気持ちがしました。

気がついたら、瞳からは涙。これは、なに？

「いますぐに……」

いますぐに、それは違うと教室に入れば彼らの雰囲気は壊れる。シオリちゃんの面目は丸つぶれになる。告白だって、なかったことになるかもしれない。

すぐ、目の前にあるドアノブに私は手を伸ばします。

幸せになんて、させてたまるか……っ！

私は、ドアノブに手をかけると、ドアのガラス越しに抱き合っている二人の姿が見えました。

「あ……」

二人とも、目をつぶり幸せそうな表情をしていました。

私は、手をそっと離しました。

そして、その場にしゃがみこみました。

壊してやりたいと思うと同時に、二人の幸せなこの表情を壊したくない。

——悔しい。

素直に、そう思いました。

どうして、私はあのとき勇気を出さなかったのだろう。

言っても言わなくても同じなんて、思ってしまったのだろうか。でも、もう遅い。

シオリちゃんの気持ちが決まった今、彼らの気持ちを邪魔するこ

とはできない。

私は、藤野くんの気持ちを知っている。彼の背中を後押しして、シオリちゃんに告白させたのは私だもの。

ドツと、後悔の波が私に押し寄せてきました。あんなこと、言うんじゃなかった。

枯れない泉のように、私の目から涙がボロボロとわき出て、零れて、いきました。

こんな……こんな最後、迎えたくなかった……っ！

じゅっよん（後書き）

終わりに近づいています。

どうか、よろしければ最後までおつき合ってくださいませ。

じゅっ

「好き。あたし、藤野くんのこと、ずっと好きだった」

確かに、彼女はそう言った。

俺は、それが信じられなかった。

顔に熱を持つのがわかる。

「……あの頃はまだ他の人と付き合っていて、バレンタインデーのプレゼントはあんな形でしかあげられなかった」

それでも、ずっと前から好きだったのだと彼女は俺に伝えた。靴箱に入っていたのプレゼントは二つしかなかった。1つは、差出人が書いてあり彼女にはだいぶ前に断りを入れていた。

なら、あれを贈ったのは高田なのだ。

「じゃあ、花瓶の子は、お前……だったんだな」

自分とその子しか知らないはずのことがそこには書いてあった。

「そう、だったんだな……」

嬉しかった。

自分の好きな人物が、あの花瓶の子だったなんて。

「……そうだよ。ずっとずっと、気づいて欲しくて花瓶の花を取り替えていた」

俺は、高田の頬に手を伸ばした。つるりとした暖かい肌が手に触れた。ふわり、と抱きしめるとどこか甘い匂いが鼻孔をくすぐった。

「……嬉しい」

抱きしめた腕を少しゆるめて俺は、高田に向き合う。

「……じゃあ、花輪……作ってやる。礼はすぐに言えよな」

脅迫状のようなラブレターを思い出す。

嬉しそうちに、高田は笑った。

「本当に？嬉しい。藤野クンの、初めての贈り物なんてあれ、と俺は思った。」

初めて？

その言葉が、引つかかった。

「高田、俺が贈る花輪はどんなのだと思うか？」

不安を解消したくて、俺は聞いていた。

高田は、屈託のない笑顔で言った。

「色とりどりのお花でできた花輪が良いな。春だから、ピンクとか」

その瞬間、俺はわかった。

「……高田」

俺は、高田を身体から引き離す。

「どうしたの……？」

「違う……、お前じゃ……ないん……だな」

その言葉に、高田の顔がさあつと血の気が引いたようなものになる。

「……俺が贈る花輪の花はな、タンポポモドキなんだ。決まってるんだよ……」

「え……」

「だから、お前は……違う」

俺は、高田に背を向ける。どういう気持ちか、もうわからなかった。

高田のことが好きなのは変わらないのに、裏切られたという感覚。花瓶の子じゃなかったという、絶望感。

「……ごめん、今、なんて言ってよいかわからないんだ」

「あたしは……っ！」

後ろから衝撃が来た。温もりが背中から感じる。高田が俺の背中に抱きついたのだ。

「あたしは、ずっとずっと藤野クンのことが好きだった！あの宿泊研修の日、藤野クンにカノジョがいるってイユが嘘をついていなかったら、あたしは藤野クンを諦めて他の人とは付き合わなかった！あの子は、藤野クンの恋敵を排除しようとかんなことを言った！他の人と付き合っても、あたしは藤野クンを忘れられなかった。それぐらい、好きなの。お願い、ごめんなさい……。だから、嫌いにならないでっ！」

「排除しようとして……」

高田が一途に俺を想い続けていたという告白より、俺は『恋敵を排除しようとした』という言葉の方に反応してしまった。

「あの子は、花瓶の花を取り替えたその日から藤野クンが好きなんだよ！だから、あたしの……。あたしたちの邪魔をしていたの！」

「それって……」

「だから、あたしたちは本来もつと早くにお互いの気持ちを確認められたはず。それが遅くなった原因はあの子なんだよ！」

あたしは、それが悔しい。藤野クンだって、あたしに告白に来てくれたときすごくすごく苦しかったよね？その原因は、イユなんだよっ！」

「じゃあ、花瓶の子は本当は……」

黒松、だったのだ。

俺は、なんという勘違いをしていたのだろう。

「……高田」

だから俺は、高田の名を呼んだ。

とうとうシヨウは、最後のページまでたどり着いてしまった。

そして今日が、その最後のページをめくる日。
朝、誰もいない教室で、最後のページをめくろうと手を伸ばすが、
開けない。

告白していた現場を見ていた彼女はどうしたのだろう。

その時期、高田とどうなったのかはシヨウ自身がよく知っている。

「藤野クン」

突然、声をかけられてシヨウは慌てて日記帳を机の中にしまった。
そこには、高田が立っていた。

「なんだ、高田か。どうしたんだ？」聞くと、高田は意を決したように言った。

「あたしね、やっぱり藤野クンのこと諦めきれない。去年、フラれちゃったけどやっぱり諦めきれないよ」

それに、と高田は続けた。

「藤野クン、去年どうしてあたしをフツたの？」

シヨウは頷いた。そうだ、自分は去年、放課後の教室で高田に告白された。そしていきなり櫻井が現れて、シヨウを連れ去って行った。

でも、シヨウはそのときのことを思い出せない。否、違う。

高田がそのとき、何を言って、自分が何を受け答えしていたのかはつきりと記憶に残っているのに、そのとき自分が何を考えていたのかがわからない。

まさか。

冷や汗が流れた。

「フツたって……」

あの日記では、俺は高田と想いを寄せ合っていた。だけど、それは長くは叶わなかったことを俺は知っている。

「俺は……そのとき、なんて言っていたんだ」

気がつくのと、せっぱ詰まったようにシヨウは高田に聞いていた。

高田は、それには答えなかった。代わりに、シヨウが隠した日記帳をゆつくりと手に取った。

「『イユ』」

手帳を開かずに、高田は言った。

それは高田が知っているはずのない単語だった。

「高田、お前……まさか、あいつの記憶が……？」

高田は、ふわりと笑った。何かを知っている顔だった。

「本当に、記憶が……蘇ったのか……！？」

シヨウの顔には、喜びが浮かんでいた。もし、これが本当なら、自分にも記憶が蘇る可能性は高い。

だけれども、高田はシヨウの予想を裏切った。

「この子の、せいだったんだ」

「え……？」

そう言った瞬間、高田はライターでその日記に火をつけた。

「なに……を！」

あまりのことに、シヨウは目の前の光景が信じられなかった。焦げ臭さが、教室中に立ち上る。

すぐに動かなかったのが、シヨウの敗因だった。

高田は後ろを振り向いて、走った。その先にあるのは、開けっ放しの窓。

まさか……！

最悪の事態になることを、身体は理解していたらしい。シヨウは立ち上がり、駆けた。高田の腕を掴んで、その行動を引き留めようとしたが、時はすでに遅かった。

シヨウが掴んだのが、まだ反対の手だったら良かったのかもしれない。だが、それはなかった。

高田は、捕まれない手……つまり、日記帳を持っているを大きく振りかぶって窓の外から捨てた。

世界が、まるで凍り付いてしまったような錯覚さえ覚えた。

「あ……」

放射線状を描いて、赤く燃え上がったそれは重力に逆らわず落ちていった。落ちたところには、もうすでに赤い火の塊となって燃え続けていた。

「ああ……あ」

血の気が引いたのがわかった。

赤く燃え続けている日記帳以外の、視界も燃えたように赤く染まっていた。

「ああああああああああっ！」

とたんに力が抜け、引き留めていた腕を離し、その場に膝をついて、座り込んだ。

「どうして……」

かすれた声が出た。

「どうして、こんなことを……っ」

高田は、静かな声で答えた。

「……藤野クンは、あの日記のせいで頭がおかしくなっている」

「そんなこと……っ」

「なら、どうして先生を殴ったの？」

高田の瞳からは、大粒の涙がこぼれていた。

「藤野クン、目を覚まして！藤野クンが追いかけているのは、ここにはいない人なの！存在していない人なんだよ！」

「……違う！」

シヨウは叫んでいた。

「違う！あいつは、黒松イユは……確かにここに、この学校に、この世界に存在していた！俺たちが覚えていないだけで、あいつが生きていた跡はちゃんと残ってる。ここに、ちゃんとあるんだ！」

「黒松イユなんて、いない！藤野クンは、ただの日記の亡霊に取り

憑かれているだけ。喪失病の人に、捕らわれているだけ！」

「お前、どうしてその名前を……」

高田は、涙を拭いもせず、膝についてショウと目線を同じにして答える。

「……調べたの。藤野クンの後を追って。そうしたら、突き止めた。あの日記だって、藤野クンがいない隙を狙って読んだ」
「なら……」

あの日記の内容が、普通のものではないぐらい高田にもわかったはずだ。

「いいえ、違う。あれは、黒松ころさんという人が書いたただの妄想だよ。だって、あたしたちは、イユという子のことを覚えていないんだもの」

「それは、喪失病のせいで……」

「そんなもの、あると思っっているの!？」

高田は激昂した。

「どう考えても、あり得ないでしょう!？ 藤野クン、あなたが言っているのはただの妄想。喪失病は、ただ人がいなくなったと騒ぐだけの病気。どうして、気がつかないの!」

「お前は、あの日記を見て何も思わなかったのか!」

「……思ったよ! 思ったからこそ、こうするのが一番だって、思ったんだよ!」

あの日記に書かれていたあたしは、確かにあたしの知っているあたしだった。藤野クンがうちまで来てくれた時、きっかけを作ってくれたのは『黒松イユ』だった。

毎日毎日花瓶の花を取り替えていたのは、『黒松イユ』だった。あたしは不思議だよ! 誰がやったかわからないのに、あの時期だけは花瓶には毎日綺麗な花が生けられていた。それが、『黒松イユ』がいなくなった時期になると花瓶の花はなくなっていた。それどころか、気にしようとも思わなくなっていた。……気持ち悪い!」

「高田、逃げるな。それは、あいつがいた跡なんだ……! この世界

の、生きた証なんだ」

「違う、違うっ！」

高田は首を振る。

「そんな子、いなかった。いなかった……っ！だって、それを認めたらあたし、その子に負ける。藤野クンを、取られちゃう！」

「何を……？」

「ねえ、藤野クンはその子のこと……『黒松イユ』のこと、好きなんじゃないの？」

だから先生に日記を取られたら怒ったし、必死で存在を肯定しようとする。あたしが亡霊に取り憑かれているっていうのはね、そういうことなんだよ」

「そんな、こと……」

否定しようと口を開いたが、これまでの一年間。話してきた人々の顔が突如浮かんだ。

応援していると笑う、沖田。ありえないと笑った、妹。理由が理解できたと言った、櫻井。全員の顔が浮かんだ。3人は皆、言葉としては違うことを言っていた。だけれども、言っていたことは同じ。俺は、いつから……。

「いつから俺は、黒松イユのことが好きになったんだろう……」

頬に一筋の涙が伝い、落ちた。

自覚したら、これまで抱いたことのないどの気持ちよりも尊く、切なくて、悲しい気持ちを抱いた。

「俺、黒松イユのことが、好き……なんだ」

その感情の名は、恋と言った。

日記の中で、笑う彼女。悩む彼女。泣く彼女。全てが、彼女の生きた証そのものが愛おしい。

「はは……俺、確かに頭おかしいかもな」

涙を拭うこともせず、シヨウは立ち上がった。

「会ったことのない女の子に恋をして、勝手に怒って、勝手に泣いて……。はたから見たら、ただのおかしな人間だな」

「なら、わかるでしょ……？ 藤野くんがしていることは、無駄なの。報われることのない、気持ちなんだよ」

同じような言葉を沖田にも以前言われた。あの言葉にはもう一つ、意味があつたのだ。今更、気づいた。

「……はは、本当に気づくの遅い」

乾いた笑いが漏れた。

「だからさ……」

意志の込めた瞳で高田を見つめた。

「俺は、黒松イユのことが好きだからお前を好きにはなれない。高田の気持ちには、答えられない。……ごめん」

高田は、全身から力が抜けたように頂垂れた。

「去年のあたしも、こんなこと言われたのかなあ……。わかんない。思い、出せないんだよ……。嫌だよ、気持ち悪いよ……」

のろのろと立ち上がって、シヨウを見つめた。

「……いずれ、藤野くんは気づくよ。その気持ちが、どんなに無意味か。そして、その気持ちを抱いたことを後悔する」

「ああ」

「藤野くんは、絶望するよ。その気持ちの行き先には何も無いことを」

「ああ」

「藤野くんは、悲しむよ。報われない想いを」

「ああ」

「それでも、いいの……？」

シヨウは、ちょっと困ったように眉を下げて笑った。

「いいさ。だって、好きになってしまったから」

その頬は、少しだけ赤かった。その姿は、どこにでもいる好きな女の子の話をする青年だった。

シヨウは学校が終わったあと、一人で校庭にいた。あまり人目のつかないようなその場所には、大量の咲き始めたばかりの色鮮やかなタンポポモドキが、雑草に混じって大量に咲いていた。そこは人目に付きづらい、草刈りさえあまりしてもらえないような場所で、放置されているからこそここまで繁殖しているのだとシヨウは考えた。

——あれ？

同じような風景を見て、思っ、ここに来ていたような気がした。「きつと、2年前の俺がここに来たんだな」

記憶にないし、覚えもないが、きつとそうなのだろう。

元気そうなタンポポモドキを選び、プチプチと引っかく。大量かさなった姿を見ると、これはこれで立派な花束に見える。まるで昔からそうしていたように、シヨウは手慣れた作業でタンポポモドキの茎をつなぎ合わせて大きな輪っかを作った。

その出来映えに満足していると、背中に低い声がかかった。

「おお、去年の子じゃないか」

「校長先生」

そこには、ワイシャツにズボン、ノーネクタイというラフな格好をしたこの学校の校長の姿があった。その両手にはポラロイドカメラが握られている。

シヨウの視線に気がついたのか、校長は照れくさそうに笑う。

「いやあな……。去年、君にここで会って、このカメラで写した写真が思いの外、家族に好評だね。高校生らしい、甘酸っぱいシヨッ

トを撮ったものだと自負しているよ。それがきっかけて、ちょっと趣味に始めることにしたんだ」

「はあ」

「せっかくだし、撮っていかないか？ ささ、立って立って。あ、その花輪良いね。ほら、もつと掲げて」

流されるまま、シヨウは先ほど作ったばかりのタンポポモドキの花輪を掲げて大人しく被写体になった。撮っている最中、校長が言った。

「いやはや、不思議だな。去年も今も君一人しかこのカメラでは撮っていないのに、去年の写真に写った君はとも高校生っぽい、甘酸っぱい幸せそうな姿だったと記憶にあるんだ。実際は、ただ一人で笑っているだけの写真なのにな」

「……校長先生」

その言葉を聞いて、シヨウは聞いた。

「去年の僕は、同じ花輪を持っていましたか？」

「ああ、持っていたとも。今日の君と同じように、放課後に一人で花輪を作っていてね。……とても、楽しそうに作っていたよ」

「印象だけで良いんですけど……そのときの先生の思い出にある、僕たちを含めたこの場所の雰囲気はどうでしたか？」

校長はあまり聞かれないようなことを問われ、首をひねっていたが、すぐに口元を緩ませた。

「……とても、暖かかったよ。幸せ、幸せそのものだった」

「ありがとうございます……」

先ほどもらった写真をもらい、シヨウは礼を言って、その場を後にした。見慣れた生徒玄関をくぐって、廊下を歩いて、教室へと向かう。

いつもの廊下側、一番後ろの自分の席に座る。黒板ではなく、横座りにして座って窓側を見るようにした。背中には壁が当たっている、背もたれがなくても楽ができた。

夕焼けに染まる教室に、赤い光が灯される。

シヨウは、先ほど作ったばかりの花輪を自分の机の上。……ただし、落ちるギリギリの場所に置いた。少しでも、彼女に届くように。今でも、30個ある机の中に座っていない人物がいることがわからない。だけれども、シヨウは知っていた。わかっていた。

きつと、シヨウは思う。

「きつと、俺の席の隣が、お前の席だったんだな」

シヨウは、意識しすることのできない隣の席を見やった。そこは、いつも誰かが座っている気もするし、座っていないような気もする。ただ、夕焼けの光を鈍く反射していた。

「黒松さん、お元気ですか……？」

シヨウは呟いた。

あの日のあと、シヨウは黒松のいる病院へと向かった。

彼女は相変わらず、どこかぼうつとして自分に娘の調子はどうなのかと、元気にしているのかと聞いてくる。

「大丈夫、元気ですよ。今日も、花瓶にタンポポモドキの花を生けていましたから」

シヨウは穏やかに答えた。

いつかこの人も、壊れた心をゆっくりでも治していくだろう。それは、病院の先生の言う「正常な人間」に戻ることはない。

「大丈夫ですよ。誰がなんと言おうと、黒松さんの言うとおり、イユはいるんですから」

そして、いつの日か黒松イユの死も受け入れて、黒松イユという人間の心を、生きた証を抱いて、きつと、歩いてくれる。

「俺は、信じています。イユの記憶が戻ることを。戻らなくても、あなたのくれた日記のおかげで彼女を覚えています。彼女を知っているのは、あなた一人じゃない」

そして、シヨウは思った。

これから多くの喪失病になってしまった人の、『一番親しい人』に会おう。

彼らはとても孤独で、黒松こころのように中には壊れてしまう人

もいる。沖田のように、苦しみを背負って、忘れるように努力して生きている人間もいる。

でもそれは、喪失した人間のことを忘れてしまふのに等しい。

シヨウは、彼らが彼らの大切な人間を覚えて、生きていつて欲しい。

だからせめて自分だけは、心の底から彼らの大事な人の存在を信じよう。

シヨウは、鮮やかなタンポポモドキの花輪に視線を向けた。

ポケットから、去年校長のポラロイドカメラで写した写真を取り出す。それを、先ほどもらったばかりの写真の隣に並べた。去年写した写真の自分は、中央より右にずれて、良い笑顔で笑っているきつと、この隣に黒松イユはいた。この空洞にもう一人入れば、その写真はちょうどよくぴったりと収まるのだから。

「好きだ」

シヨウは、何もない虚空へと呟いた。

高田の言う通り、自分は本当に頭がおかしいのかもしれない。

顔も知らない女の子に恋をした自分。もういない彼女に恋をしてしまった、自分。

報われることのない恋。

シヨウは、日記を綴った黒松イユが好きになった。その気持ちは、誰かに改ざんをされた記憶でもなければ、自分の妄想で作り上げた人物なのでもない。

語られなかったページには何を書いてあったのだろう。少しでも彼女が幸せだったら良いなと思った。いつの日か、黒松こころの心が少しでも回復したら、聞いてみよう。彼女の、最後を。

自分と彼女は結ばれなかったのかもしれない。だけれども、今ある気持ちは本物だから。

今ここにいる自分が、彼女を好きになった。

それだけは間違いない。

「……好きなんだ」

きつとこれからの自分はいつか、彼女のことを好きでなくなるかもしれない。けれど、それで良いような気がした。彼女のことを好きでなくなっても、好きだった記憶は残る。

だから今は、少しだけ。

シヨウは机に突っ伏して、目を閉じた。

こうしていると、彼女の優しい声が聞こえてくるような気がした。彼女との、優しい時間が流れていくような、気がした。

じゅうじ(後書き)

これで終わりかと思いきや…とうとう、次回で最後です！
彼らの物語に、どうかもう少しだけおつき合ってくださいませ。

語られなかった日記

ついに、私が消える日が来ました。

消える時刻は、今日の夕方。元から私の頭にあったかのように、はつきりとその知識は私の頭の中に浮かんできました。

二人はもう、両想い……なんだよね。

そればかりが頭から離れずにいました。私は最後の登校の時間をかみしめることなく、いつもと同じ時間に家を出ました。

朝露に濡れた雑草や花を横目で見て、途中で、元気なタンポポモドキの花を見つけて、摘みました。こればかりは気分が落ち込んでいても、忘れることはありませんでした。

見上げた校舎は白い壁が鈍く光っており、見慣れた玄関から校舎に入ってまだ慣れない2年生の教室へと足を運びました。

沈んだ気持ちで教室のドアを開けると、そこには先客がいました。

「あ……」

「おう」

藤野くんが、片手を上げて私にあいさつをしました。

よりにもよって、最後の日に……。

私はどうして良いかわからなくて、軽く頭を下げてそそくさと自分の席に座りました。……隣だから、あまり意味はありませんが。

「なあ、黒松」

「……な、なに？」

「ちよつとだけ、付き合ってくれないか？」

「え、でも……」

「ちよつとだけ」

誘われるがまま、私は藤野くんの後ろについて歩きました。

どういうこと？だって、昨日、藤野くんはシオリちゃんと……。

でもそれを聞くことがとても怖くて、声をかけようと思いました
それが出来ませんでした。

気がつくと、先ほど出たばかりの生徒玄関を出て校庭の方へと歩
いていました。雑草と花が大量に生えている場所まで藤野くんは私
を連れて行くと、穏やかな顔で笑っていました。

「少し、目を瞑ってる。声をかけるまで、開けるなよ?」

私は静かに頷いて、目を瞑りました。

何をされるのだろう。どことなくドキドキしましたが、少しだけ
期待していた感触もなく、がざがざという音が離れたところから聞
こえて、やがて静かになりました。

不安になり、まだかと声をかけると「まだ」ときっぱり言われて
しまいました。

そうしてしばらく経つと「目、開けて」という声とともに、頭に
どこか覚えのある重力感を感じました。

「あ……」

ふわりと、花と草の匂いがしました。

その重力感と香りで、私の頭には何が置かれているのか私は悟り
ました。

「……花輪」

藤野くんの手には一輪の、茎の長い黄色の花。——タンポポモド
キが握られていました。

「タンポポ……モドキ」

その行動で、私は全てわかりました。

「藤野……くん」

どうして彼がそれを知っているとか、もうそんなのどうでも良か
った。彼がタンポポモドキの花で作った花輪を贈ってくれる。それ
で、私の世界は色を帯びたような気がしました。

彼は少し照れくさそうに笑って、その手の花を差し出す。

「タンポポの花言葉は真心の愛、思わせぶり、神のお告げ、だそう
だ」

「……なら、タンポポモドキの花言葉は？」

藤野くんは意地悪そうに笑って「豚のサラダはどんな花言葉になると思う？」と逆に聞いてきました。

私は少し考えて、「クロユリみたいな……呪い、とか？」「怖いわ」即座に突っ込まれました。

「……じゃあ、なに？」

即座に手厳しい突っ込みを受け、少し不機嫌になつて聞くと、藤野くんは左手を私の頬にあて、私の左手に差し出したタンポポモドキの花を握らせました。

「——最後の恋」

まるで誓いの言葉を言うように、彼は私の瞳を覗き込んで言いました。

ふわり、と風が吹いて、私の頬を撫で、髪の毛が浮き上がりました。

その花言葉は、私の胸のなかにすつと溶けていきました。

「タンポポよりもずっと、切ない言葉だね」

「ああ。でも、俺はこっちの方が好きだ」

好き、という言葉にドキリとしました。

「……私も、好きだよ。タンポポモドキ」

「ああ。そこら中に生えてるしな」

そう言つて、小さく笑い合いました。

「あ、君たち！ちょうど良い！」

突然、後ろから声をかけられました。

私は驚いて目を丸くして、藤野くんは呆れたように手を額に当ててため息をしていました。

そこにいたのは、この学校の校長先生でした。ぴつちりとしたス

ーツを着ているのに、それはどこか汚れていて、その手にはポラロイドカメラが握られていました。

「たまたまね、家を片づけていたらこれが出てきてな。フィルムがもったいないから、何か良いものを撮って回ろうと思っていたんだよ。君たち、ちよつと被写体になってくれないか？」

「いえ……その、校長先生……」

藤野くんが、やんわりと断ろうとしていました。

「いえ、是非。お願いします」

彼の言葉が言い終わるより先に、私は言っていました。ちらりと藤野くんを見ると、少し驚いたような顔で私を見ていました。

校長先生は嬉しそうな顔になり、「ささ、並んで」と私たち二人をその場に並ばせました。

「そのタンポポの花輪、可愛いね。お姉さん」

校長はポラロイドカメラを掲げながら、私にそう言いました。

「いいえ、タンポポモドキですよ。校長先生。——そして、ありがとうございます」

かしやり、かしやりと軽いシャッター音が鳴りました。

写した瞬間、ポラロイドカメラの下からは写真がゆっくりと出てきて、校長先生はまだ暖かいそれを私に渡しました。まだ写真は現像されきっていないくて、黒い。早く見たくて、私は写真をパタパタふりました。

「……わぁ」

「お」

「なかなかよく取れているじゃないか」

ようやくうつすらと現像されてきた写真に写っていた私と藤野くんは、とても幸せそうに笑っていました。その距離は、教室にいるときより近いけど、近すぎない頑張って距離をぎこちなく取っているようにも見えました。

「校長先生」

私は先生に声をかけました。

「これ、先生にあげます」

「……いいのかい？」

私はにつこりと笑いました。

「もう一枚、ありますから」

私は藤野くんの手握られている写真を見て、そう言いました。

ありがとう、とお礼を言った校長先生の背中を見送って藤野くんが「……良いのか？」と言いました。

「——うん。だって、こうすればきっと、いつか藤野くんの元にこれが届く」

私は彼の持っていた写真を渡してもらって、私のいつも使っている日記帳にそれを挟み込みました。もう、一年ほど使っているものだからカバーもはじっこもページもボロボロで、お世辞にも綺麗とは言えないものでした。

「……どういうことだ？」

「秘密」

私は人差し指を唇に当てて、いじわるっぽく微笑みました。

「さあ、授業が始まっちゃう。教室に戻ろう？」

差し出されたタンポポモドキを見せつけて、私は彼に手を差し伸べました。

その手は、とても温かい。

今、生きているんだと、そう思いました。

教室の花瓶に、私はみんながいる前で堂々と一輪のタンポポモドキの花を指しました。同じくタンポポモドキでできた花輪も、その隣に置きます。

それがどうしようもなく愛しくて、そっと触れるとすべすべとした花弁が私の手に安心をもたらします。

「……おい」

不機嫌そうな声が背中にかかる、予想通り不機嫌な藤野くんが私を見ていました。ただし、ただの不機嫌ではなくて頬の赤い方の不機嫌でしたが。

「うん」

私は頷いて、自分の席へと戻りました。

横を見ると、話しかけてくる櫻井くんを無視して机に肘をつき、手を頬にあててむっとり黙っている藤野くんの姿。

その姿が微笑ましくて、私は穏やかに笑いました。

そしてその日、かみしめるように私はいつもの何気ない日常を過ごしました。

「じゃあ、また明日」

藤野くんは、そう言って私に手を振って別れを告げました。

「うん、また明日」

私は、もらった花輪を大事に抱えて笑って手を振ります。

結局、気持ちを伝えることも叶うこともなかった。

その背中を、追って、消えたくないと泣きすがりたい衝動を抑え、私は必死で笑顔を作って彼を見送りました。

そう、消えたくない。

初めて、そう思いました。

……忘れられたくない。

でも、それは無理な願い。

私は、窓枠に手をかけました。ポケットには、無機質な瓶の感触があつて、その中には睡眠薬が大量にはいつています。

今、この睡眠薬を飲み、窓から飛び降りて無理矢理にでも自分の存在を世界に刻みつけようか。

私は、目の前の薬をじつと見つめました。

……私がいなくなったのを知ったら藤野くん、悲しむのかな
覚えて欲しいという欲求と、忘れてほしいという欲求。二つの相

反する矛盾した感情が、私の中で暴れ回りました。

瓶の蓋を開けて、錠剤を取り出しました。白くて小さなその睡眠薬は、一見して他人の命を奪うものとは思えませんでした。それを、右手の手のひらにのばし出す。カラカラカラ、という軽い音が聞こえました。

これを飲んだら、藤野くんは私のことを忘れない。

最初に会ったときの記憶も、宿泊研修で笑ったときも、本を読み聞かせたあの心地の良い空間も、今日の……花輪を送ってくれた思い出も、彼は覚えていてくれる。

窓枠に手をかけました。グツと、音が鳴り私の身を軽やかにその上に乗せてくれます。

立ち上がると、広い広い街が一望できました。

そういえば、この学校は高い山の上にあったんだな、と今更思います。

遠くには、海。水平線が、真っ直ぐ一直線に伸びていました。

これが、もっともっと見えると緩く丸い形になるんじゃないかなと思います。だって、地球は丸いから。

水平線の近くには小さくフェリーやヨットのようなものが見えました。海上近くの陸には港。細々としたものはたぶん、輸入や輸出をされている商品。

街が見えました。いくつものビルやマンションが建ち並ぶ、街。

その部分だけはギュウと押しつぶされたように、車や人や置物などで密集していました。

街を囲むようにして、のびているのは住宅街。街に近いと、密集していて、少し遠くなると少しだけ減っている。かなり遠くなっていると、またそこだけ住宅街が密集していました。よく見ると、その先にも街のようなところ。

広い広い町。

あれだけちつぽけで狭いと思っていた、私の住んでいる町がそこにはありました。

「おい、何してるんだー？」

下を見てみると、先ほど帰ったばかりの藤野くんと櫻井くんの姿がそこにありました。藤野くんはどこか目のやり場に困ったように、私から視線を外しています。

「見えてるぞー」

「え」

それが自分のスカートだということに気づき、急いで抑えて窓枠から教室の中へと戻りました。

おずおずと窓から下を見下ろすと、朗らかな顔で笑う藤野くんと、楽しそうに手を振る櫻井くんの姿。

「……………」

私は、その二人を見て、笑って手を振りました。なるべく元気に再会を疑わないように。

並んで歩く二人の背中が校門から消えても、私はまだそこにいました。

手の中にあるたくさんの錠剤を見つめる。

まっすぐに手を伸ばし、外に向けて私はその手を離しました。白い薬が重力に逆らうこともなく、落ちていきました。

……これで、良いよね。

教室に一人取り残された私は、花輪をそつと花瓶の横に置きました。

最後の別れを惜しむように、優しく扱いました。

だって、これは持っていけないから。

私は、いつも教室から校舎に出るときみたいに、いつもの道を歩いて行きました。

「また、明日」

どういうわけか、歩いている最中に視界がぼやけてうまく景色が見れませんでした。最後に見る景色なのに。でも、身体は帰り道を覚えていて私は苦することなく家へと帰宅できました。

見慣れた我が家に入り、一目散に自分の部屋へと向かう。この間、母が買ってくれた服に着替えて母を喜ばせてあげたかった。

「お母さん、似合う？」

居間に行って、料理中の母に笑って声をかけました。母は嬉しそうに笑って、似合うと褒めてくれました。

それが、最後に見る母の顔。

悟られないように、笑顔を作ることと精一杯でした。私の人生の中でこれほどまでに、笑顔を作ろうと頑張ったことなんて一度もなくて、とてもとても、大変でした。

私は母に服を見せびらかしたあと、何事もないように二階に上がり、今、こうして日記を書いています。

つまらない人生でした。

何事も、成し遂げたとは言えないような、どこにでもある平凡でつまらない人生でした。

楽しかったこともあったけど、後悔したことや悲しかったことだつてたくさんありました。

内気な私は友達だつて少ないし、うまく他人と話すことが出来ません。もう一度、やり直せるなら……といくらでも思います。

私がいなくても、いなくても世界は変わらない。だけど、それだけじゃないように私は今、思えます。

私が進んだ跡は、必ずどこに残る。最高の形でも、最悪の形でも、誰の目にも見えなくても、私という存在がいたという証は絶対にこの世界に刻まれる。

だから、この私の喪失は、神様の与えてくれた奇跡なのかもしれません。

一番大事な人だけが、一番大事な人の存在を覚えている。大切に出来る。ただ一つの、唯一を抱いて、生きていくことが出来る。

忘れてしまった人間は、悲しみを抱くことなく、幸せな人生を送ることができる。

それは、とても残酷なことなのかもしれません。だけど。

藤野くんは、私が消えたことで悲しまないで良かったと思います。私が自殺して、彼の人生に大きな傷を残すより、綺麗に私を忘れてくれた方が良く私は思うのです。

藤野くん、幸せになってください。

私が生きられなかった時間を、生きるように。共に、歩むように。何気ない、ただ過ぎ去っていく時間を大切にしてください。

それは、かけがえのないあなたの存在した証。

何回でも恋をして、何回でも傷ついて、何回でも後悔してください。

事故でも、自殺でも、病気でも、死んでしまうまでに、あなた自身の時間を大切にしてください。

それが、私の望み。

だから、どうかその日まで幸せに。

藤野くん。

『また明日』

語られなかった日記（後書き）

ここまで読んでいただいて、ありがとうございました！

お気に入り登録して頂いた方々、偶然見つけて読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

ほんのすこしだけ、この作品について語らせて頂きます。

個人的には、正当派ラブストーリーを目指したつもりです。

これを見て、少しでも切ない彼らの想いを感じてくれたらすごく嬉しいです。

子どもならではの、初々しくて純粋な恋愛を描けたかなあ…？と
思っております。

「もっとこうしたら良い！」とか「ここ不自然！」などあれば、よろしければご指摘いただけると嬉しいです（誤字脱字もかなり多いですが…）。

最後に、本当にここまで読んで頂いてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5433w/>

喪失病

2011年9月20日00時39分発行